

垣吉遺跡群

一般国道249号七尾田鶴浜バイパス
改良工事に係る発掘調査報告書

1997年3月

石川県立埋蔵文化財センター

垣吉遺跡群

1997年3月

石川県立埋蔵文化財センター





垣吉B22号墳全景

例 言

- 1 本書は鹿島郡田鶴浜町垣吉地内に所在する垣吉D3号古墳、垣吉B遺跡、垣吉B22号墳、垣吉フクベ山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国道249号七尾田鶴浜バイパス改良工事に伴う事前調査である。費用は七尾土木事務所が負担した。
- 3 現地調査は平成3年度と6年度に実施した。
第1次調査 伊藤雅文・北野博司 平成3年8月19日～12月20日
第2次調査 久田正弘・西井康雄・立原秀明 平成6年6月1日～10月24日
- 4 現地調査は平田天秋、中島俊一、小嶋芳孝、唐川明史の指導の下におこなった。また、柿田裕司、松山温代、宮下栄仁、田畑 弘、和田 学、谷口克好、上野 敬、竹中義博、田中健一の補助を受けた。
- 5 遺物整理は平成7年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。
担当は浅野豊子 正木直子 尾崎昌美、北 康子
- 6 本書の編集は伊藤と久田が協議して実施した。
第1章 白田義彦（現在 石川県埋蔵文化財保存協会 主任調査員）
第2章 西井康雄（現在 金沢土木事務所 技師）
第3章 伊藤雅文
第4章 久田正弘（現在 石川県埋蔵文化財保存協会 主任調査員）
第5章 Dr.Dean Goodman（マイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所中島研究室）
- 7 垣吉D3号墳の垣吉B22号墳の事前調査として、レーダー探査をDr.ディーンに、電気探査を西村康氏に依頼しておこなった。そして、調査報告を第5章にのせている。
- 8 出土遺物と記録資料は石川県立埋蔵文化財センターが管理している。
- 9 現地・資料調査と本書作成にあたり、以下の方々に御指導・教示を得た。感謝致します。
唐川明史、近間 強、浅野豊子、滝川重徳、細口喜則、飛田功児、Dr.Dean Goodman、西村 康、中司照世

報告書抄録

ふりがな	かきよしいせきぐん							
書名	垣吉遺跡群							
副書名	一般国道249号七尾田鶴浜バイパス改良工事に係る発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	久田正弘・伊藤雅文・西井康雄・白田義彦・ディーングットマン							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒921 石川県金沢市米泉町4丁目133番地 (TEL 0762-43-7692)							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		(㎡)	
かきよし 垣吉D3号墳	鹿島郡田鶴浜町 垣吉地内	17401	31034	37° 3' 20"	136° 54' 13"	H3.8.19 ~12.20	700	国道249号七尾田 鶴浜バイパス改良 工事
かきよし 垣吉B遺跡	同上	同上	31040	37° 3' 12"	136° 53' 42"	H6.6.1 ~10.24	2500	
かきよし 垣吉B22号墳	同上	同上	31032	37° 3' 10"	136° 53' 36"	同上	650	
かきよし 垣吉フクベ山 遺跡	同上	同上	同上	同上	同上	同上	900	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
垣吉D3号墳	墳墓	古墳時代中期	円墳、埋葬施設	なし				
垣吉B遺跡	集落跡	古墳時代中~後期	竪穴住居跡・土坑	土師器・須恵器		古墳時代前期後半から中期の須恵器を伴う時期までの集落で、山影げに位置するという特殊な立地である		
垣吉B22号 墳	墳墓	古墳時代前期	前方後方墳、埋葬 施設	土師器		古墳時代前期の前方後方墳である。くびれ部で供献上土器が出土している。墳丘盛土に下層の集落遺跡の包含層を使っている。		
垣吉フクベ 山遺跡	集落跡	弥生時代終末	竪穴住居・土坑・ 環壕	土器、中世珠洲焼 片		B22号墳の下層になり環壕をもつ高地性集落である。		

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	11
第1節 調査の経緯	11
第2節 調査と経過	11
調査日誌	12
第3章 平成3年度の調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 垣吉D3号墳の調査	17
第3節 垣吉B遺跡の調査	21
第4節 小結	22
第4章 平成6年度の調査	23
第1節 調査の概要	23
全景写真	24
第2節 垣吉B遺跡の遺構と遺物	28
1. 竪穴住居跡	28
2. 掘立柱建物跡	32
3. 土坑	32
4. その他の遺構	34
5. 包含層出土遺物	34
垣吉B遺跡調査写真	37
垣吉B遺跡遺物写真	43
第3節 垣吉フクベ山遺跡の遺構と遺物	45
1. 概要	45
全景写真	47
2. 竪穴住居跡	49
3. 土坑	55
4. その他の遺構	57
5. 包含層出土遺物	59
垣吉フクベ山遺跡調査写真	60
垣吉フクベ山遺跡遺物写真	71
第4節 垣吉B22号墳	73
1. 現況	73

2. 墳丘	73
3. 盛土	73
4. 周溝	73
5. 主体部	80
6. 古墳出土土器	80
垣吉B22号墳調査写真	84
垣吉B22号墳遺物写真	110
第5節 小結	112
第5章 垣吉B22墳地中レーダー探査報告	113

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

垣吉遺跡群は、石川県鹿島郡田鶴浜町垣吉地内に位置する。石川県は加賀地区と半島側の能登地区からなる。能登地区は邑知地溝帯を境にして、その北方に広がる北・中部地域と南部地域に区分される。

能登半島は概して、平夷な丘陵・小河川による小開析平野・邑知地溝帯からなる。北部地域では標高300m級の比較的高い高地が半島北側の外浦側に偏在し、富山湾に面した北部地域内浦側と中部地区は標高100~200mの低平な丘陵と小河川により開析された樹枝状小谷が発達している。南部地域は能登半島を二分する邑知地溝帯と富山県の県境に沿った石動山(565m)・宝達山(637m)を中心とした比較的高い高地からなっている。邑知地溝帯は南西端で幅約3km強、北東端では幅約1.5kmを計り、北東側がやや狭くなるが、直線的に伸びている。邑知地溝帯の西側にある邑知潟は、現在は僅かに86haの水面積を残すにすぎないが、干拓事業前の旧邑知潟は県下では河北潟に次ぐ湖沼であり、水面積456ha、平均水深1.20mの規模を有していた。

能登半島の海岸線をみると、北部地域は比較的平滑であり、中部地域は屈曲に富んでいる。中部地域の中でも、屈曲が顕著なのは外浦より内浦である。南部地域になると再び平滑的な海岸線を呈する。このような中部地域の内浦側の地形は、古来より季節を問わず波静かな天然の良港と好漁場を提供しているといえよう。

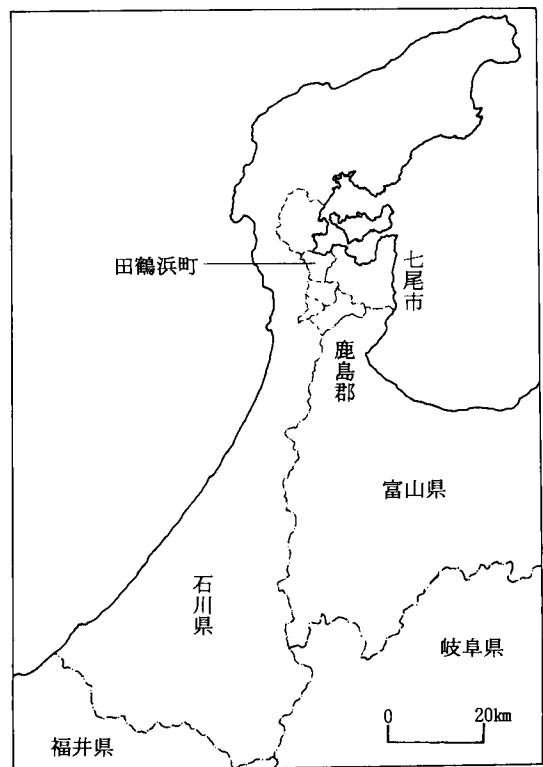
田鶴浜町は、石動山に源を発して、邑知地溝帯を横断して七尾湾西湾へ注ぐ二宮川の下流域に位置する。二宮川は氾濫が多かった河川であったといわれ、上流部の鹿島町付近では天井川となっている。田鶴浜町の南西には町内最高峰の赤蔵山(179m)が聳える。

また、邑知地溝帯の羽咋方面から奥能登内浦方面への最短道程は、二宮川流域平野を行くものであり、「田鶴浜往来」といわれ、古来からの基幹ルートであった。本遺跡群は二宮川沿いにあり、高田から杉森にかけて広がる小平野が望める位置にある(第4図)。

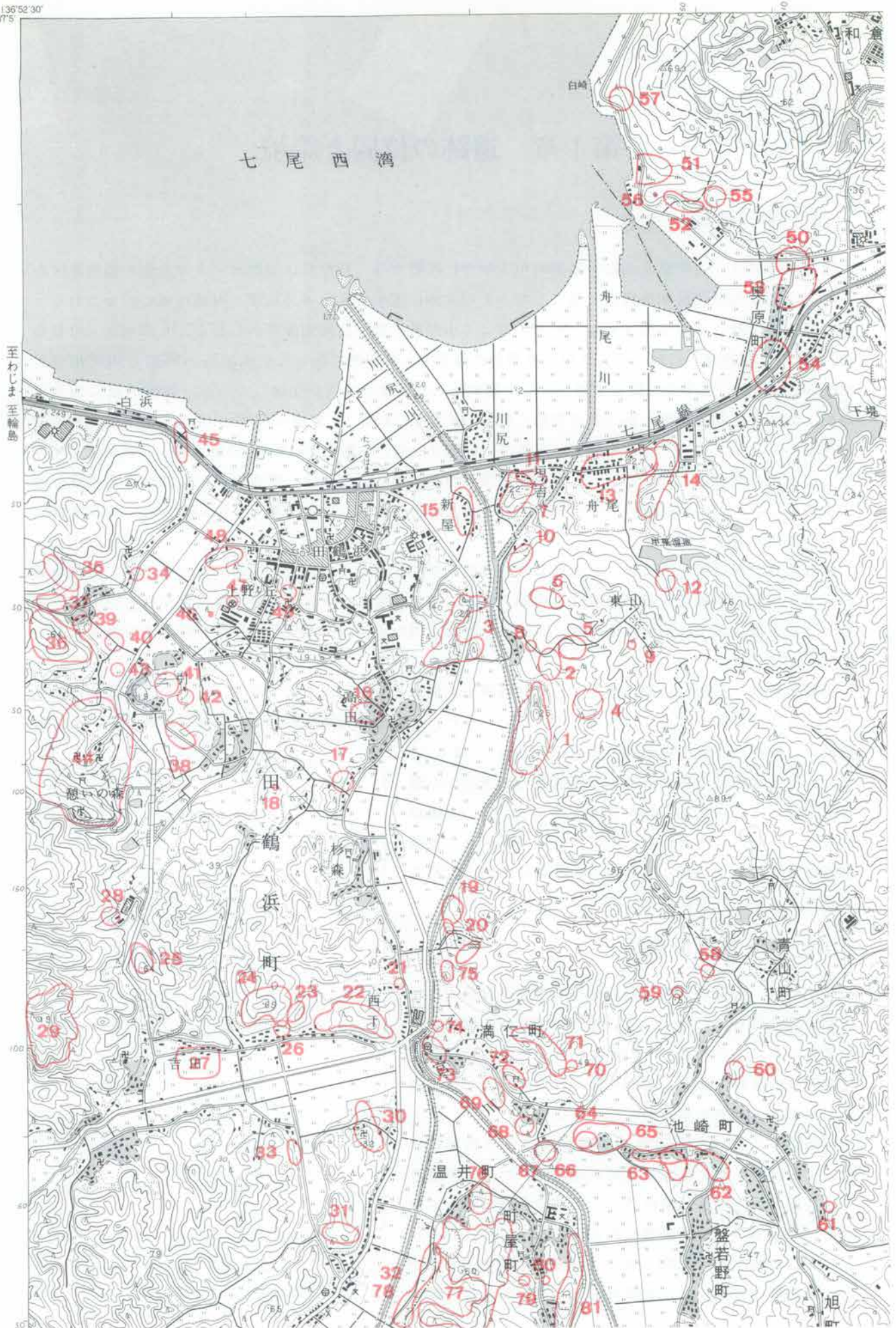
第2節 歴史的環境

縄文時代 能登半島内浦側の地理的環境は狩猟・漁労活動に適したものだ。そのため、内浦側は縄文時代の遺跡が多くみられる。その縄文時代の代表的な遺跡は、能都町真脇遺跡である。前期初頭~晩期終末の土器が出土しており、長期間集落が存在していた。

田鶴浜町においても近年の発掘調査により長期にわたって存続した縄文時代の遺跡が確認された。大津遺跡では前期中葉の墓坑が検出され、土器は前期中葉を主体とし、早期末より中期後葉にわたって出土している。三引C・D遺跡(第2図39・40)では前期初頭の貝塚、中期と後晩期の貯蔵穴などを検出した。貝塚からは貝殻、



第1図 石川県全体図



第2図 周辺の遺跡 (1/2万5千)

表1 周辺の遺跡

- | | |
|-------------------------------|-----------------------|
| 1. 垣吉B古墳群 (古墳) | 42. 三引F遺跡 (縄文) |
| 2. 垣吉B遺跡 (弥生～平安) | 43. 三引G遺跡 (中世) |
| 3. 垣吉A古墳群 (古墳) | 44. 赤蔵山遺跡 (平安・中世) |
| 4. 垣吉C古墳群 (古墳) | 45. 三引観音遺跡 (不詳) |
| 5. 垣吉D古墳群 (古墳) | 46. 三引大塚古墳 (古墳) |
| 6. 垣吉E古墳群 (古墳) | 47. 三引上野丘住宅古墳 (古墳) |
| 7. 垣吉F古墳群 (古墳) | 48. 三引上野丘住宅古墳群 (古墳) |
| 8. 垣吉A遺跡 (古墳) | 49. 田鶴浜館跡 (安土桃山～江戸) |
| 9. 東山遺跡 (縄文) | 50. 奥原A遺跡 (古墳) |
| 10. 垣吉南遺跡 (縄文) | 51. 奥原B遺跡 (古墳) |
| 11. 垣吉遺跡 (縄文) | 52. 奥原C遺跡 (不詳) |
| 12. 舟尾コウラ池瓦窯跡 (平安) | 53. 奥原遺跡 (中世) |
| 13. 舟尾遺跡 (不詳) | 54. 奥原南遺跡 (不詳) |
| 14. 舟尾古墳群 (古墳) | 55. 奥原折戸遺跡 (縄文) |
| 15. 新屋遺跡 (不詳) | 56. 奥原古墳 (古墳) |
| 16. 高田氏館跡 (安土桃山～江戸) | 57. 奥原新古墳 (古墳) |
| 17. 杉森てらあと遺跡 (古墳・奈良・中世) | 58. 池崎窯跡 (平安) |
| 18. 杉森遺跡 (縄文) | 59. 池崎横穴 (不詳) |
| 19. 西下ほそめ遺跡 (鎌倉～室町) | 60. 池崎門前出遺跡 (平安) |
| 20. 満仁細田古墳群 (古墳) | 61. 池崎上手遺跡 (奈良・中世・近世) |
| 21. 西下遺跡 (縄文・鎌倉～室町) | 62. 池崎古墳群 (古墳) |
| 22. 西下古墳群 (弥生～古墳) | 63. 池崎向手遺跡 (弥生) |
| 23. 吉田経塚山1・2号墳 (弥生～古墳・南北朝～室町) | 64. 満仁円山古墳群 (古墳) |
| 24. 吉田古墳群 (古墳) | 65. 満仁円山遺跡 (弥生) |
| 25. 吉田A遺跡 (縄文) | 66. 満仁館山古墳 (古墳) |
| 26. 吉田B遺跡 (縄文・古墳～平安) | 67. 満仁館山遺跡 (弥生・奈良～中世) |
| 27. 吉田C遺跡 (縄文・古墳～平安) | 68. 満仁寺家干場遺跡 (不詳) |
| 28. 吉田野寺遺跡 (縄文) | 69. 満仁遺跡 (弥生・古墳) |
| 29. 幾保比城跡 (鎌倉～室町) | 70. 満仁横穴 (不詳) |
| 30. 伊久留古墳群 (古墳) | 71. 満仁八幡B古墳群 (古墳) |
| 31. 伊久留下出古墳群 (古墳) | 72. 満仁八幡A古墳群 (古墳) |
| 32. 下出遺跡 (奈良・平安) | 73. 満仁諏訪遺跡 (不詳) |
| 33. 吉田南側遺跡 (奈良・平安) | 74. 満仁四十刈遺跡 (不詳) |
| 34. 三引北側遺跡 (不詳) | 75. 満仁細田古墳群 (古墳) |
| 35. 舟尾遺跡 (不詳) | 76. 温井遙拝所遺跡 (奈良・平安) |
| 36. 曲松城 (鎌倉～室町) | 77. 温井古墳群 (古墳) |
| 37. 三引A遺跡 (縄文) | 78. 温井遺跡 (弥生～平安) |
| 38. 三引B遺跡 (縄文) | 79. 町屋坂遺跡 (中世) |
| 39. 三引C遺跡 (縄文～中世) | 80. 西三階坂遺跡 (中世) |
| 40. 三引D遺跡 (縄文～中世) | 81. 町屋古墳群 (古墳) |
| 41. 三引E遺跡 (弥生) | |

鹿・魚・イルカの骨、土器等が出土している。貯蔵穴からはドングリ・トチの実等が出土した。土器は前期初頭～晩期までが出土している。大津くろだの森遺跡では第1次調査で中期中葉の竪穴住居・土坑、第2次調査では環状柱穴列と四本柱建物跡を検出した。土器は中期中葉から晩期後葉まで連続と出土している。他に石器も多数出土している。またそれらの中には土偶・異形土器(人面付土器)・石棒・石冠・石刀・環状石器等の祭祀具・装身具も含まれている。これらの遺構・遺物より、大津くろだの森は当地域の拠点集落と思われる。大津くろだの森遺跡、三引C・D遺跡のような長期間にわたって存続する縄文時代の遺跡は、県内でもあまり例をみない。

弥生時代 この時期の能登で最も開発が進んだ地域は、古邑知瀨南岸の縁辺部(現在の羽咋市次場町から吉崎町、鶴多町周辺)である。古邑知瀨の南側には全国的に著名な吉崎・次場遺跡が存在している。

田鶴浜町で弥生時代の遺物が出土しているのは、大津、三引、垣吉、杉森地区等であるが、発掘調査された遺跡が少く、当地における弥生時代の様相は不明な点が多い。周辺の七尾市満仁町館山遺跡、満仁町丸山遺跡、池崎町向手遺跡等は、弥生時代中期後半とされるが、遺跡の詳細は不明である。それら二宮川流域（ここでは田鶴浜往来に係る田鶴浜町垣吉から鳥屋町川田・大槻までとする）の弥生時代の遺跡は、微高地、台地、丘陵緩斜面に立地するが、二宮川流域の低地部で当該期の遺跡が発見される可能性はある。田鶴浜町の吉田経塚山墳墓群（第2図23）の発掘調査では、弥生時代後期の台状墓二基を検出している。これら台状墓は吉田川流域に拠点を置いた有力族長層の家族墓といわれている。この吉田経塚山墳墓群の存在より、周辺を治める族長クラスを輩出するような社会基盤が整っていたとされている。

古墳時代 邑知地溝帯と二宮川流域は古墳の密度が非常に高いところである。弥生時代からの開発が進んでいたこと、交通の要所であったこと等がその背景にあったと思われる。この邑知地溝帯と二宮川流域の有力首長層の古墳とされているものをここで概観する。

前期に比定されている有力首長層のものとみなされる古墳は鹿島町の小田中亀塚古墳（前方後方墳）・小田中新王塚古墳（前方後円墳）、鹿西町の雨の宮1号墳（前方後方墳）・雨の宮2号墳（前方後円墳）等である。近年の雨の宮1号墳の発掘調査で、長さ6.2m、幅0.8mの割竹形木棺を密閉したとされる長さ7.2m、幅2mの粘土槨が出土した。その粘土槨から車輪石4点、石釧15点、神獣鏡1枚等が出土した。これらの遺物の性格から畿内との強いつながりが指摘されている。二宮川流域では鳥屋町の大槻11号墳（前方後方墳）、七尾市の尼塚1・2号墳（1号墳前方後方墳：2号墳前方後方墳）等である。能登半島における有力首長層の古墳が邑知地溝帯のほぼ中央に集中する傾向が伺われる。

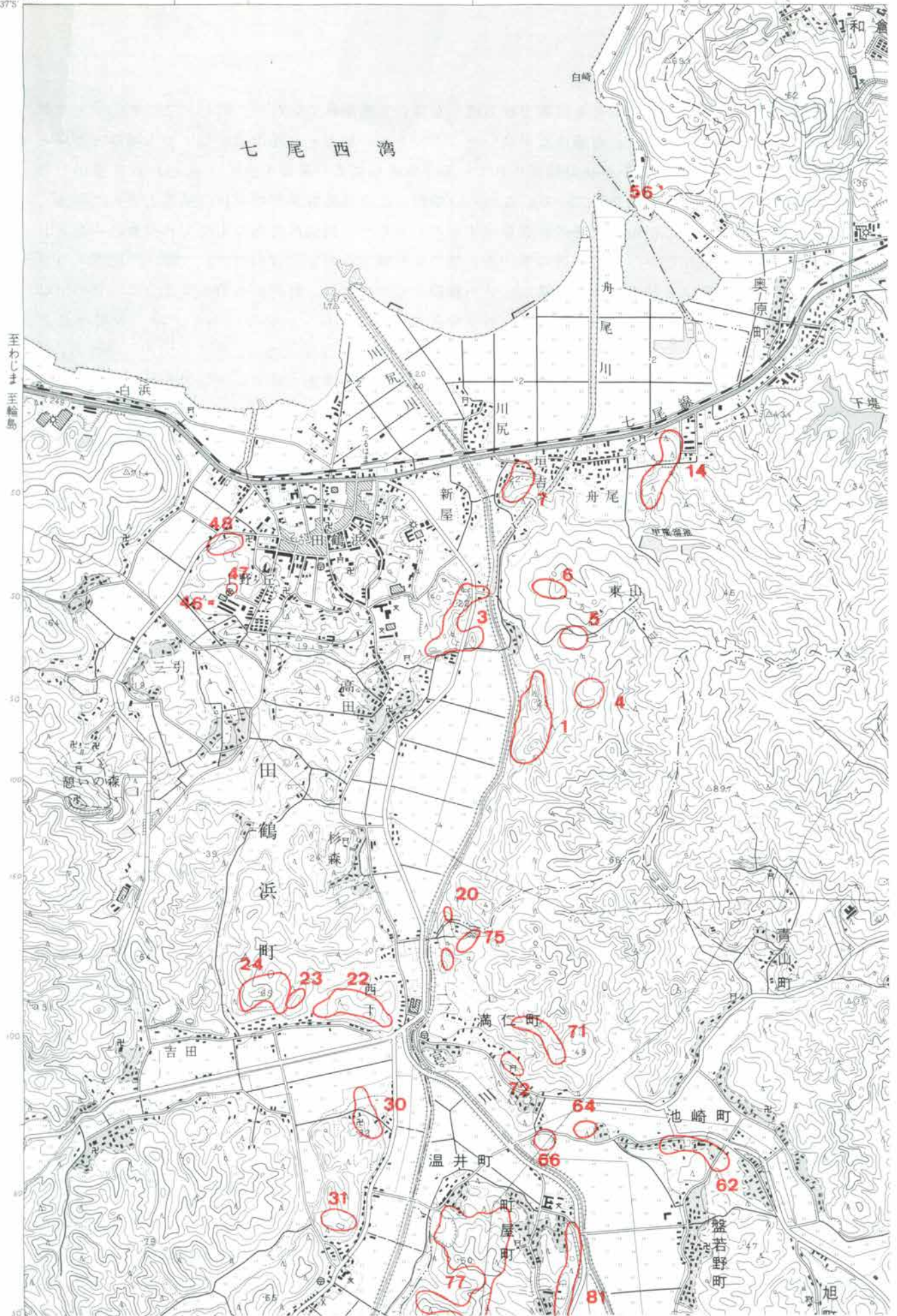
また、能登半島における古墳で特筆すべきは、志賀町の徳田燈明山古墳（前方後方墳）である。何故なら、古墳の存立基盤を主に弥生時代以来の集団関係の発展的形態の成立を可能にすると思われる生産力のある平野に求め得ようが、能登でも最大級ともくされる徳田燈明山古墳の眼下にそのような平野は存在しない。その存立基盤として内浦と外浦を結ぶ結節点（大津と志賀町川尻を結ぶ）であることと七尾湾沿岸に近接するという地理的位置、七尾湾岸の手工業生産が挙げられるかもしれない。徳田燈明山古墳のような畿内的要素の強い古墳がこのような位置に存在することは、古墳時代前期においてこの地域周辺が畿内勢力にとって能登地方における最も重要な地域の一つだということを裏付けるものであろう。畿内勢力の地方進出・統制に新たな視点を投げかける貴重な考古資料である。

古墳時代中期に比定されている有力首長層の古墳ともくされるものをあげると、西の羽咋市側では滝大塚古墳（帆立貝型古墳）、柴垣観音山古墳（円墳）等がある。邑知地溝帯の中央部では、水白鍋山古墳（前方後円墳）、小竹ガラボ古墳（前方後円墳）等がある。東の二宮川流域・七尾市側では矢田丸山古墳（円墳）等となる。古墳時代中期になると有力首長層とみなされる古墳分布は西の羽咋市側、邑知地溝帯の中央部、東の二宮川流域・七尾市側に分立する傾向がうかがわれる。

古墳時代後期・終末期の大型古墳は大幅に減少する。しかし、小数ではあるが大規模な横穴式石室をもつ古墳がみられる。羽咋郡志雄町の散田金谷古墳（後期）と院内勅使塚古墳（終末期方墳）・須曾蝦夷穴古墳（終末期方墳）等である。散田金谷古墳は畿内で多くみられる家形石棺の存在で知られている。須曾蝦夷穴古墳は双室墳、棺台状施設、ドーム形天井と隅三角持ち送り技法という他地域からの影響を受けている構造・技法をもつ。これら大型横穴石室を持つ古墳の出自系譜が注目される。

このような古墳時代の有力首長層とみなされる古墳の動向をみると、古墳時代前期の地域統合的政治勢力者の台頭、中期の政治勢力者の分立、後期・終末期の政治勢力の収束という現象がみえる。

邑知地溝帯では上記のとおり、首長墓とみられる古墳が多くきづかれるが、二宮川流域では前期の大



第3図 周辺の古墳群 (1/2万5千)

槻1号墳、川田ソウ山1号墳（ともに前方後方墳）を除いて築かれていない。但し、この周辺は分布調査が進んでいることもあって、古墳密度が高いところである。垣吉・七尾市満仁地区の古墳群と鳥屋・高階古墳群で600基近い古墳の存在が確認されている。弥生期墳墓の系譜を引くとみられる方墳から後期の円墳まで連綿として築造されている。これら古墳群の性格は地縁集団の累世的墳墓とされている。広域首長階層に従属した在地首長層の存在を示すものであろう。田鶴浜町内にも有力首長層とみなされるような古墳は築かれなかった。町内における古墳の分布域をみると二宮川流域、大津、三引であるが、大津、三引の古墳数は合計でも20基に満たない小規模なものであり、町内の古墳の大部分は二宮川流域に存在する。大津の古墳の7基中6基が横穴石室を有するものであり、そのうちの大津1号墳は長さ3.7m、幅1.8m程度の玄室に長さ2.3mばかりの羨道をもつ横穴石室墳である。その石室からは直刀、鉄鏃、耳環、須恵器が出土している。当時の海岸線は現在の大津集落まで来ていると思われるので、海を見渡す位置に古墳があったと推定される。また大津小学校遺跡より棒状脚タイプの製塩土器が出土している。大津の古墳はおそらく海に関する在地首長の存在を表すものであろう。垣吉の半兵衛塚の石碑も横穴式石室の石材を利用したものだとしている。その石室からは須恵器が出土している。

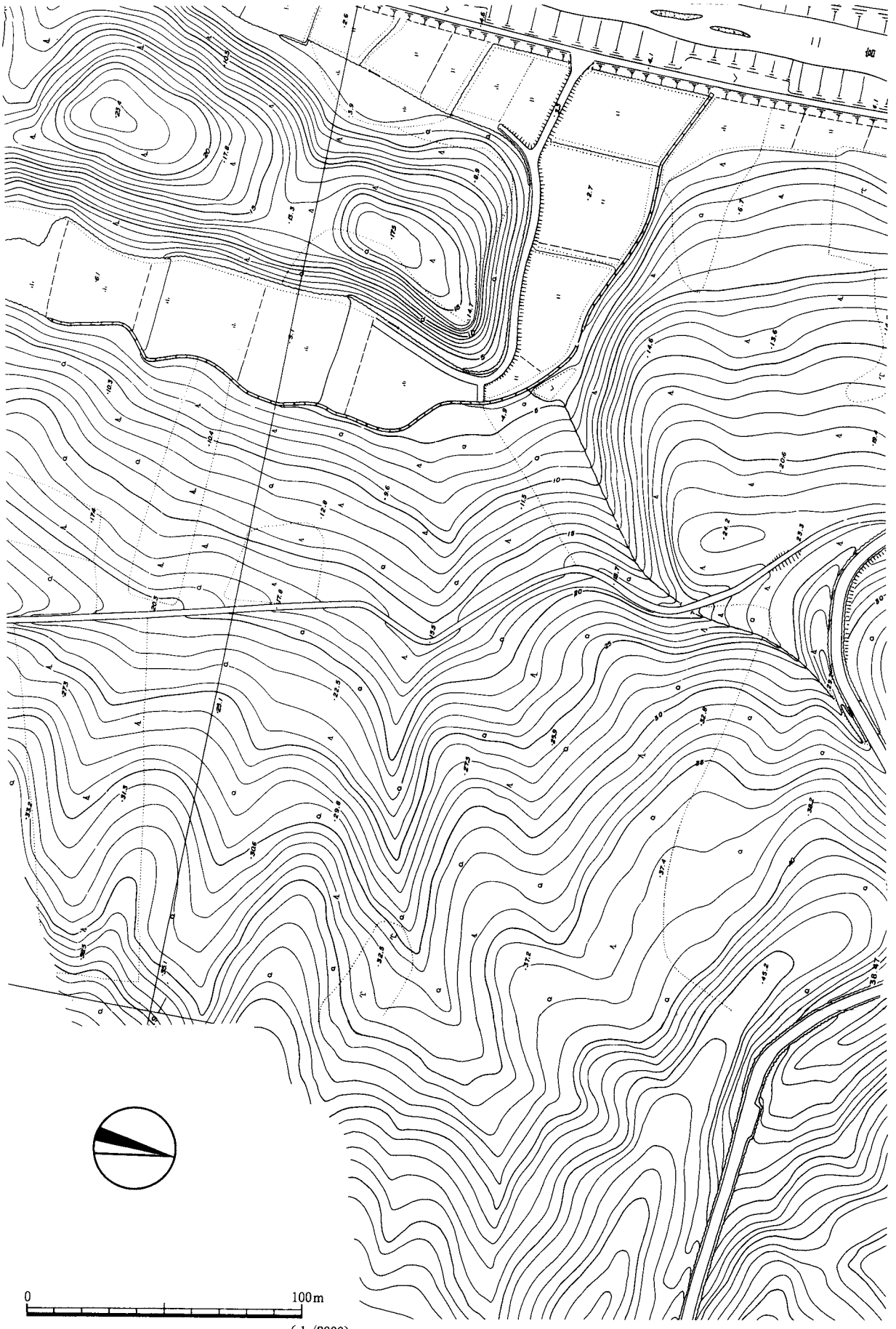
当遺跡の垣吉遺跡群は古墳数70余基の規模を持つ。その垣吉古墳群はA～Eの五つの古墳群からなり、各古墳群は墳形や群構成、断片的な出土遺物等から、前述のような一定の集団の累世的な墳墓群と考えられている。垣吉A古墳群のA29号墳は発掘調査が行われており、5世紀末～6世紀初頭のもものとされている。主体部は木棺直葬であったが、副葬品は出土しなかった。垣吉D3号墳は、円墳であり、時期は中期前半～中頃と思われる。主体部は組合せ式箱形木棺であるが、副葬品は出土しなかった。垣吉B22号墳は前方後方墳であり、時期は前期前半と思われる。全長約19mである。主体部は木棺直葬であるが、副葬品は出土しなかった。

奈良・平安時代 養老二年(718)越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡が分かれて、能登国が成立した。その後天平十三年(741)に越中国に併合されたが、再び天平勝宝九年(757)に分国される。この能登国の独立の背景には、律令体制草創期の版図拡大と東北制圧政策があったとされている。文献資料より当該期の七尾西・南湾の特質として、「造船集団の存在」と「調としての海産物の生産」が挙げられている。

また考古資料からは、この時期における製塩産業の隆盛が指摘されている。尚、能登半島における初期の土器製塩は、古式土師器を伴う大型土器が七尾西湾・南湾に分布の中心を持つので、この地域で開始されたとされている。その土器製塩遺跡の能登沿岸部に所在する総数は225か所余であり、そのうち内浦沿岸に192遺跡余が所在する。時期的考慮を除外すれば、特に七尾湾岸に集中するようである。製塩業は遺跡数で見れば、7～8世紀が一つの盛期だったようである。このように七尾西湾・南湾では、当該期も海との関係が深い生産活動が営まれている。

田鶴浜町においても往時は海との関係が深かったと思われるが、確かな資料は少ない。しかし、近年の発掘調査により、当時の様相が分かりつつある。大津ロクベエ遺跡では8世紀後半に比定される道状遺構が検出された。道幅はおおよそ3m以上あったと思われ、「大津往来」の可能性も指摘されよう。大津くろだの森遺跡からの平野をはさんだ丘陵部分では、掘立柱建物が3棟以上確認されている。地床炉を持つ建物跡もあり、その内の一棟からは、鉄滓が出土している。通称「クロダ」と呼ばれる水田地帯を中心とした活動空間が想定される。三引遺跡からは、8～10世紀の土器・木製品が出土している。

中世 当時期の能登国は七尾城を中心として展開する。七尾城は明徳2年(1391年)に能登国守護職に任ぜられた畠山氏によって拡張・整備された。戦国時代の七尾城は大局的にみれば織田信長勢と上杉謙信勢との争いの舞台となる。最終的には織田勢の勝利となり、能登には前田利家が入国し、鹿島半郡



0 100m
 (1/2000)

第5図 周辺の地形

は長連龍の領有となった。田鶴浜町にも当時の遺構として曲松城（36）、幾保比城（29）、高田館（16）がある。赤蔵寺（44）は鹿島町の石動山天平寺、輪島市の岩倉寺と共に能登における靈山信仰の拠点として栄えており、南北朝内乱期には、一大勢力を形成していたとされている。「観応の擾乱」と天正4～5年の畠山勢と上杉謙信勢との戦いでは赤蔵寺も戦場となっている。その天正の兵乱の後、赤蔵寺が再び再興されるのは、鹿島半郡を領有した長氏によってである。

当期における田鶴浜町の考古資料も少ないが、発掘調査の及んでいる範囲で主なものを挙げる。垣吉マツサキ山中世墓（3）の調査が行われている。配石墓から火葬骨埋納穴、珠洲焼の蔵骨器、五輪塔の空輪輪・火輪等が出土している。年代は15世紀後半のものとしてされている。杉森テラアト遺跡（17）からは蔵骨器として利用された珠洲焼片、五輪塔水輪・空風輪等が出土している。三引遺跡でも配石墓が検出され、珠洲焼きの蔵骨器、石仏等が出土している。

近世 七尾西瀧は中世の残像ともいえる政治体制をのこしたまま、近世をむかえた。前田家に領有されるのではなく、長氏の領地として残されていたのである。これが名実ともに幕藩体制に組み込まれるのは、寛文6年(1667)の浦野騒動を契機としてである。

長氏の田鶴浜館跡には現在得源寺が建てられているが、当時の土累の一部が残っている。

引用・参考文献

- 橋本澄夫・戸淵幹夫 「石川」『日本土器製塩研究』近藤義郎編 青木書店 1994
- 田鶴浜町史編纂委員会 『田鶴浜町史』 田鶴浜町役場 1974
- 唐川明史 「徳田古墳群略報」『石川考古』第178号 石川考古学研究会 1987
- 土屋宣雄・木立雅朗 『大津ロクベエ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1993
- 石井由美・北野博司 『大津ロクベエ遺跡Ⅱ』 石川県立埋蔵文化財センター 1993
- 中島俊一・川端誠・本田秀生 『大津遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1995
- 北野博司 『垣吉A29・30号墳 垣吉マツサキ山中世墓』 石川県立埋蔵文化財センター 1992
- 石川考古学研究会 「鳥屋・高階古墳群分布調査報告書」『石川考古学研究会々誌』第20号 昭和52年
- 石川考古学研究会 「鳥屋町良川北古墳群を中心とする分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第27号 昭和59年
- 石川考古学研究会 「鳥屋町末坂古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第28号 昭和60年
- 橋本澄夫 「加賀・能登の前方後円（方）墳」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌 第32号 石川考古学研究会 1989
- 伊藤雅文 「石川県における前期古墳概観」『北陸の考古学Ⅱ』 石川考古学研究会々誌 第32号 石川考古学研究会 1989
- 伊藤雅文 「能登半島の古墳の研究－海の手前の古墳の理解をめぐる－」『石川考古学研究会々誌』第39号 1996
- 伊藤雅文 「横穴式石室の地域性 北陸地方」『季刊考古学 第45集 特集横穴式石室の世界』雄山閣
- 立原秀明 「大津くろだの森遺跡」『石川県立埋蔵文化財センター年報 第16号』 石川県立埋蔵文化財センター 1996
- 金山哲哉 『三引遺跡 調査の概要』 石川県立埋蔵文化財センター 1996
- 三浦純夫 『杉森テラアト遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1991
- 鹿島町史編纂専門委員会 『鹿島町史 通史民俗編』 1985
- 七尾市史編纂専門委員会 『七尾市史』 1974

- 金子拓男・高岡徹・橋本澄夫 『日本城郭体系 第7巻 新潟・富山・石川』 新人物往来社 1980
- 藤 則雄 『石川県の地形・地質案内』 1985
- 若林喜三郎・高沢裕一 監修『石川県の地名』 1991 平凡社
- 『角川日本知名大辞典 17 石川県』 1981 角川書店
- 高澤裕一編 『図説 石川県の歴史』 1988 河出書房新社
- 木越祐馨・森田喜久男・東四柳史明・石田文一 「中島町史資料編上巻」『中島町史』 1995
- 高橋浩二「北陸における古墳出現期の社会構造—土器の計量的分析と古墳から—」『考古学雑誌』第80巻 第3号 1995
- 甘粕 健 「東日本における古墳の出現 —みちのくをめざして—」『東日本の古墳出現』甘粕 健・春日真実編 山川出版社 1994
- 川村浩司 「北陸北東部の古墳出現期の様相」『東日本の古墳の出現』 甘粕 健・春日真実編 山川出版社 1994
- 田嶋明人 「北陸南西部の古墳確立期の様相」『東日本の古墳の出現』 甘粕 健・春日真実編 山川出版社 1994

第2章 調査の経緯と経過

第1節 経緯

一般国道249号は七尾市を起点とし、能登半島を周遊して金沢市に至る全長222kmの幹線道路である。この路線のうち七尾市から田鶴浜町の区間は和倉温泉、能登有料道路と連絡していることから交通量が多く慢性的な交通渋滞となっている。また歩道も幅1mと狭く沿線住民の日常生活にも大きな支障をきたしている。このため建設省と県土木部は昭和60年度より国道改良事業として山側にバイパス（七尾田鶴浜バイパス）建設を着手した。

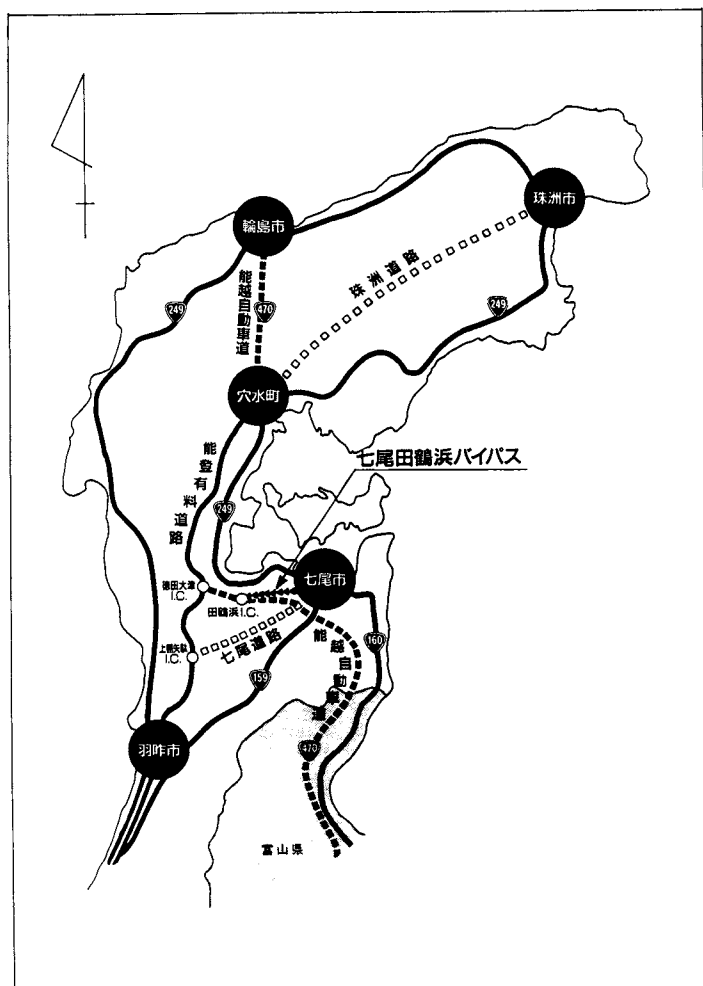
このバイパスは、七尾市小島町を起点として鹿島郡田鶴浜町高田までを結ぶ全長5.8kmである。一般国道470号（能越自動車道）と直結し、また和倉温泉へ至る主要地方道七尾能登島公園線の延進区間とも接続する予定である。このバイパスの完成により七尾市周辺の渋滞を緩和し利便性が更に高まり、広域的な地域のアクセスが可能となる。また七尾市を中能登拠点都市とする地域振興を支援していく上で大きな効果が期待される。七尾田鶴浜バイパスの一部七尾市小島町から直津町の約2.2kmの区間が平成6年4月に供用開始されており、平成8年度中に全線開通の予定である。

この事業に関する垣吉遺跡群の発掘調査として平成3年度に第1次調査、平成6年度に第2次調査を実施した。また、平成5・6年度には七尾市教育委員会により七尾市奥原峠遺跡の発掘調査が実施された。

第2節 調査と経過

第1次調査は平成3年8月19日から12月20日まで垣吉B遺跡（イシナザカ地区）及び、垣吉D3号墳の発掘調査、垣吉B22号墳の平版測量を行った。イシナザカ地区は垣吉B遺跡の東側上部にあたり、縄文時代の遺物が少量出土したが遺構は確認されなかった。垣吉D3号墳は時期は不明であるが、主体部は木棺直葬であった。

第2次調査は平成6年6月1日から10月24日まで垣吉B遺跡、垣吉B22号墳の調査を行った。垣吉B遺跡は古墳時代後期の集落遺跡であった。B22号墳は前方後方墳と弥生時代後期後半～終末期の集落遺跡であった。



第6図 能登地区幹線道路計画図

平成3年度調査日誌

垣吉D3号墳、イシナザカ遺跡、B22号墳調査

8月7日 七尾土木事務所担当者と現地打合せ
8月19～9月2日 D3号墳、B22号墳平板測量、杭打ち
8月20日 プレハブ設営
9月2日 イシナザカ遺跡表土除去
9月3日～9月9日 D3号墳々丘清掃
9月9日 D3号墳全景撮影、B22号墳清掃開始
9月1日 2B22号墳清掃完了、イシナザカ遺跡掘削開始
9月20日 イシナザカ遺跡精査谷埋没部分（SX01）掘削開始
9月25日 SX01掘削完了
9月30日 台風19号被害からの復旧作業
12月2日 D3号墳棺内掘削、東側流土掘削
12月4日 D3号墳全景撮影
12月5日 D3号墳平板測量
12月6日～12月16日 D3号墳盛土除去
12月17日 盛土除去後の全体撮影
12月18日 土層断面図作成
12月20日 資材搬送

平成6年度調査日誌

垣吉B遺跡、垣吉B22号墳調査

5月18日 プレハブ設営
5月25日 器材搬送入
6月1日 調査区草刈り
6月7日 垣吉B遺跡遺構検出開始
6月8日 1号～4号竪穴住居検出開始
6月27日 垣吉B遺跡バックホーにより拡張
6月28日 2号～3号土坑検出
6月30日 2号～3号土坑実測
7月11日 古墳丘陵バックホーにより表土除去
7月15日 人力による古墳表土除去開始
7月25日 古墳墳丘検出開始
8月2日 丘陵部バックホーにより拡張
8月3日 丘陵部遺構検出開始
8月9日 古墳墳丘清掃
8月10日 周溝検出状況のラジコン撮影
8月17日 丘陵拡張区遺構検出開始
8月22日 周溝掘下げ開始
9月8日 クビレ部土器出土状況撮影
9月9日 周溝断面実測
9月16日 主体部掘下げ開始
9月20日 航空測量
9月22日 清掃、写真撮影
9月26日 丘陵拡張区遺構掘下げ
10月3日 主体部断面はずし、写真撮影
10月11日 主体部清掃、写真撮影
10月13日 ラジコンによる航空測量
10月24日 器材整理、搬送

第3章 平成3年度の調査

第1節 調査の概要

平成3年度は、8月19日から12月20日まで現地での発掘調査をおこなった。9月27日夜には甚大な被害をもたらした台風19号が通過するという自然災害があり、そして調査担当者の疾病による入院、さらに記録資料の紛失といういくつかのアクシデントに見舞われた。したがって、細かい調査をおこないながら報告書の中で活かせることができなかった。本当に残念である。本書中では、撮影した写真を解説するように記述するという報告書としたい。

本年度は、垣吉D3号墳・垣吉C9号地点近く・垣吉B22号墳の発掘調査を予定し、それぞれA・B・C地区とした。しかし前述による調査の中断のために垣吉B22号墳の発掘までできなかった。しかし、来年度以降B22号墳の調査がいつでも再開できるように、レーダー探査などの事前調査をおこなった。また、垣吉B遺跡もまたすぐに調査にとりかかれるように表土除去をおこない、D地区とした。

調査日誌

8月19日 本日より現地調査に入る。まずD3号墳の平板測量を実施する。

8月20日 平板測量を継続する。プレバブ設営。

8月22日 平板測量の継続。下草の除去をしながらの測量なので、なかなか進まない。

8月23日 平板測量の継続。

8月26日 平板測量の継続。

8月27日 平板測量の継続。

8月28日 B22号墳の下草除去。

8月29日 B22号墳の平板測量をおこなう。

8月30日 平板測量の継続。

9月2日 B地区約300㎡を重機によって表土を除去する。

9月3日 D3号墳の下草整理。B22号墳の測量が終わる。

9月4日 下草整理。



写真1 インナザカ地区からB22号墳を見る



写真2 D3号墳より南を見る

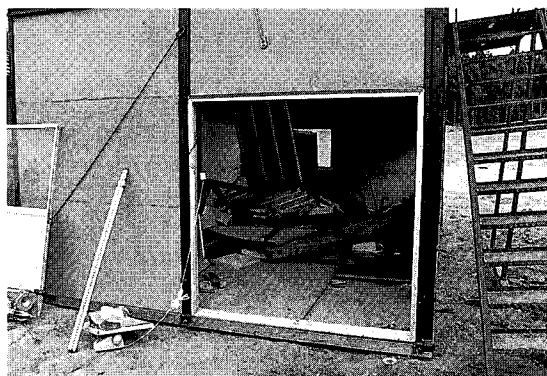


写真3 台風19号の被害

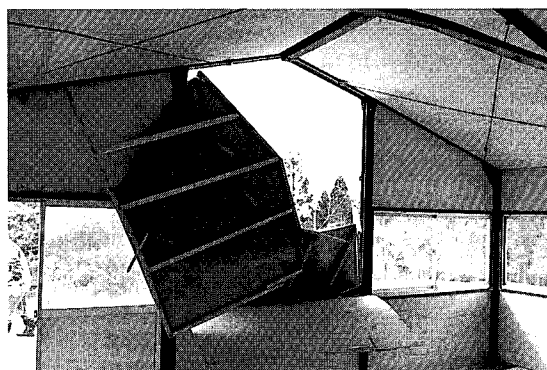


写真4 台風19号の被害

9月5日 下草整理。
9月6日 下草整理。
9月9日 D3号墳調査前全景写真。B22号墳下草整理。
9月10日 B22号墳下草整理。
9月11日 B22号墳下草整理終了。
9月12日 B地区の掘削にとりかかる。字名が「イシナザカ」といい、垣吉B遺跡イシナザカ地区とする。壁面をきれいにする。
9月17日 抜根作業。
9月18日 抜根作業。
9月20日 谷の埋土を確認し、SX01とする。掘削開始。
9月24日 SX01第1層（黒色土除去）。
9月25日 SX01第2・3層。
9月26日 D3号墳頂の下部の処理。
10月2日 レーダー探査前日下見。B地区SX01西側掘削。
10月3日 レーダー・電気探査。B地区SX01西側掘削。
10月4日 レーダー・電気探査完了。B地区SX01西側掘削完了・写真撮影。
10月7日 D3号墳墓前祭。
10月28日 D3号墳の表土除去開始。D地区の重機による表土除去開始。
10月29日 D3号墳の表土除去。D地区の重機による表土除去。
10月30日 D3号墳の表土除去。D地区の重機による表土除去。
10月31日 D3号墳の表土除去。D地区の重機による表土除去。
11月1日 D3号墳の墓坑検出精査。D地区の重機による表土除去。
11月5日 D3号墳の墓坑検出精査。D地区の重機による表土除去。
11月6日 D3号墳の墓坑検出精査。D地区の重機による表土除去。
11月7日 D3号墳の墓坑検出精査。D地区の重機による表土除去。
11月8日 D地区重機による表土除去。
11月11日 D地区重機による表土除去完了。
11月13日 D3号墳の墳頂のアゼを半分にして墓坑をさがす。土が難しくなかなか見つからない。
11月15日 周溝北東部分の掘削。
11月18日 D3号墳南の緩斜面に重機で試掘をおこなう。
11月19日 周溝北東部掘削。墓坑がわからないので、断ち割りを入れる。
11月21日 周溝北東部掘削。断ち割り継続。
11月22日 墳頂断ち割りの壁面精査の結果、埋葬施設を確認する。
11月26日 埋葬施設上面の写真撮影をおこない、掘削を開始する。
11月27日 埋葬施設掘削。
11月29日 木棺上面を確認。写真をとる。
12月2日 木棺内掘削。墳丘東側流土掘削。
12月3日 D3号墳墳丘測量。東側流土除去。
12月4日 全体写真。
12月5日 墳丘断ち割り。



写真5 調査前全景



写真7 慰霊祭の風景



写真6 調査前全景



写真8 作業風景



写真9 作業風景



写真10 周溝堀削風景



写真11 盛土除去作業



写真12 盛土除去作業

- 12月6日 盛土除去。
- 12月9日 盛土除去。
- 12月10日 盛土除去。
- 12月16日 盛土除去。
- 12月17日 盛土除去。全体写真。
- 12月18日 墳丘土層図作成。
- 12月20日 発掘資材を戻して現地調査を終了する。



写真13 平板測量風景



写真14 実測風景



写真15 アゼの設定



写真16 墓坑検出状況



写真17 盛土の平面的状況(1)

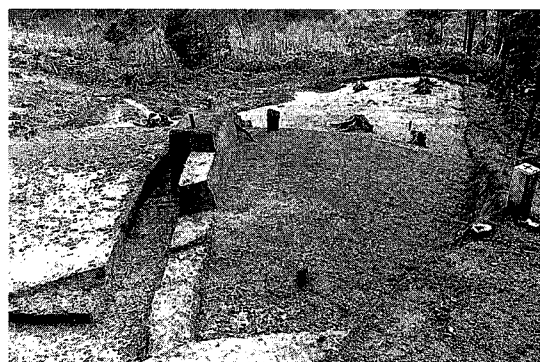


写真18 盛土の平面的状況(2)

第2節 垣吉D3号墳の調査

1. 立地

D3号墳は、垣吉古墳群D支群を構成する1古墳である。D支群は、平野部から約250m程はいった標高47m付近の丘陵尾根上にあり、平地からの比高差は45mである。南北方向に伸びている丘陵から北西方向に伸びる緩やかにさがる支尾根に3基が築かれ、発掘調査を実施した3号墳は最も山側（南側）に位置している。そこからは、西に流れる二宮川流域を一望することができる。しかし、狭い谷を隔てて眼前に尾根があることから、北側（七尾湾）への眺望は極めて悪い。したがって、山奥にある古墳として、平野から隔絶されたような観がある。

D支群は3基から構成され、北から1・2・3号墳となっている。3号墳までは、非常に緩やかな尾根筋となっているが、それから南側はやや傾斜が強くなっている。しかし、古墳を作ることができないほどの急斜面でもなく、瘦せた尾根筋でもない。この部分に古墳状隆起はみられず、試掘をおこなった結果でも削平された古墳も検出できなかったばかりか、遺構・遺物を確認することもできなかった。したがって、3号墳より南には、古墳や集落遺跡が分布しないことがわかった。



写真19 墳丘全景



写真20 周溝



写真21 墳丘全景

2. 墳丘

墳丘の基本的な作り方は、山側に周溝を掘り、谷側に墳丘裾を削り出し、それらの土で盛り上げている。周溝は良好に遺存し、調査前でも溝状の浅い落ち込みとなって確認することができた。山側の周溝は、墳丘にそって円く作られているが、南側で谷に接するあたりで墳丘の削り出しがはじまるためにやや広がり、必ずしも墳丘相似形に作られているわけではない（写真23矢印）。周溝の掘削角度も緩く、墳丘裾と周溝下端の識別が不明瞭である。墳丘の直径は、南北約20m、東西約18mとやや楕円形気味である。これは尾根筋方向を優先させた墳丘構築によるものである。墳丘はきれいな形を呈し、その他高まりも明瞭である。墳丘の盛土が上から3分の1にしか及んでおらず、構築の多くを地山削り出しによっているためである。しかも、地山土が雨などにも流れにくい粘質土であることから、墳丘が良好に遺存したものと考えられる。盛土もそれを用いていることから、墳丘頂部の流失も少なかったようである。

墳丘盛土下からは、暗灰褐色の旧表土層を確認することができた。この旧表土と墳丘南側の地山の高さがほぼ同じであることから、旧地形は緩やかに下る尾根筋になる。しかし、調査区内で旧表土の下がりを確認することができなかった。調査区外に伸びる3号墳の墳丘北斜面は一気に下っているので、緩やかな尾根筋が墳丘北斜面付近で急激に傾斜が変わる可能性が高い。すなわち、尾根の傾斜変換点際を利用して作られた古墳であることがわかる。

周溝は、尾根筋にあたる墳丘南東側を中心に掘削されている。先に述べた墳丘盛土に使われた土質の特徴から周溝への第一次流入土量は非常に少ない。反対に、暗灰褐色砂質土や黒褐色砂質土の表土系の土が主たる堆積である。この土は周溝のみ堆積し、谷側の墳丘裾にはみられないのは、谷側の墳丘削り出しによる平坦面が、腐植物が堆積するほどの広いものではなく、常に流れ落ちる状態で安定した表土層の形成が見られないためである。

墳丘盛土は旧表土の上に施工し、平野に面する西側に多く積まれている。そして、地山は赤褐色粘土から粘質土、あるいは黄白色系の粘土・粘質土であり、盛



写真22 周溝の状況



写真23 墳丘裾の状況

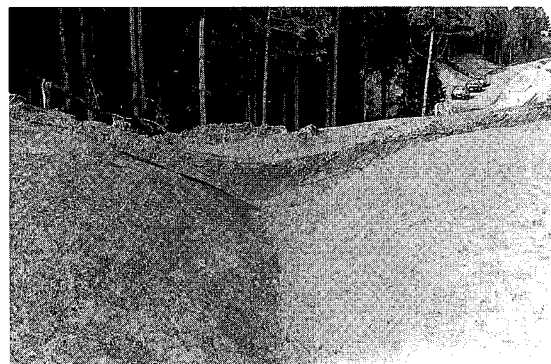


写真24 周溝推積状況



写真25 墓坑検出状況

土に使われている土も同系の土であるので、周囲を削平掘削した土をそれに用いていることがわかる。盛土は、色調・土質ばかだけでなく、地山の黄白色のブロックの入り方によって層を区分した。

傾斜をもっている旧地形をまず平坦な形状にするために、低い方から水平に薄く土をもりあげ、墓坑底面付近まで及んでいる〔盛土第1段階〕。そして、円墳として形を整えるために盛土第1段階の外側に外から斜方向に堆積する盛土を施す〔盛土第2段階〕。これによって、墳丘下部を完成させている。ここで注意を要するのは、旧表土に近い状態の層が盛土第2段階の上面にあることである。墳丘に残した4本のアゼで確認されたこのような旧表土のな土はほぼ平坦であり、盛土施工後一定期間地表面として機能していたことを示すものであろう。そして、墳丘上部の盛土は、外から内側に向かって傾斜する堆積で、墳丘構築でよく見られる技法である。この土は、墳丘下部よりも赤味の強い土を主体とし、両者の様相を異にしている。この点からも、墳丘の上部と下部が異質なものであり、施工の時間的な違いと認識できよう。

このように考えると、生前に墓を作るいわゆる「寿墓」と認識できる。

3. 埋葬施設

墳頂部中央に、南北軸から30°ほど東西に振っている木棺直葬の痕跡を確認した。墓坑長約3.5m、同幅約1.4m、で、南東側に斜の張り出しがある。地表面からの現状の深さは約60cmを測る。盛土に作られた木棺直葬とあって、墓坑・木棺の検出が非常に遅れてしまった。木棺は、棺底近くでかろうじて検出することができた。

木棺は、組合わせ式箱形木棺で木棺幅約50cmである。小口板および側板は、土層断面で確認する限りにおいて、15~20cm程度の低い痕跡しか検出できなかった。しかし、棺蓋の腐朽にともなって落ち込んだ痕跡と考えられる木棺内への土砂の流入と墓坑上面で確認した表土系土の存在とも考え合わせ、木棺は、それなりの高さをもっていたと考えられる。なお木棺底は、墳丘下部上面にある旧表土に接している。

4. 出土遺物

出土遺物は皆無であった。したがって、築造時期を知る直接的な手がかりはない。



写真26 埋葬施設全景



写真27 埋葬施設全景

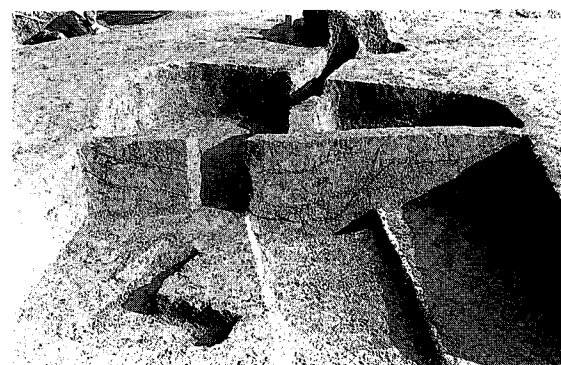


写真28 墓坑壁面



写真29 墓坑壁面



写真30 墓坑壁面



写真31 盛土除去後全景



写真32 墳丘土層



写真33 墳丘土層



写真34 墳丘土層

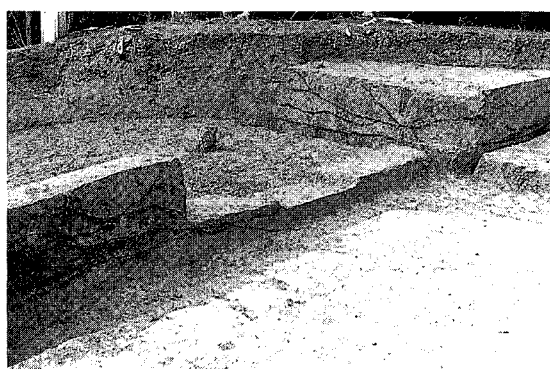


写真35 墳丘土層

第3節 垣吉B遺跡イシナサカ地区の調査

本調査地点は、平成6年度調査区域よりも山側にあたる。路線が垣吉C9号地点（古墳状隆起）の脇を通ることから、古墳の周溝がかかるかもしれないということで発掘調査を実施し、幅10m、長さ30mのトレンチを設定した。また、垣吉C9号地点としての古墳状隆起は、現状でほとんど確認できなかったため、それを認定することは不可能であった。

トレンチでは小さな谷の流路を検出し、SX01とした。上面には黒色砂質土があり、谷の最終段階には水が流れず植物が繁る安定した状態であったと考えられる。この層から縄文土器の細片が出土している。それより下層には、拳大の石から一抱えもあるような石まで無数の石が堆積している。これらの石を包含する層は、暗黄褐色系の粘質土であるが、かなり砂分が強い。出水に伴って石もまた同時に動くような大きな流水状態と思われる。すなわち、大雨などによる水の流れであろう。検出遺構はSX01のみで、古墳の周溝は全くみられなかった。目に見える古墳状隆起が存在しないことや周溝がなかったことから、C9号地点の古墳は存在しないことがわかる。

出土遺物は先に述べた縄文中期と思われる土器細片と磨石のみである。遺跡地図上にはドットされていないが、周囲に存在すると予想される縄文遺跡からの流れ込みと考えられる。



写真36 B22号墳よりイシナサイ遺跡を見る



写真37 調査区全景



写真38 SX01全景

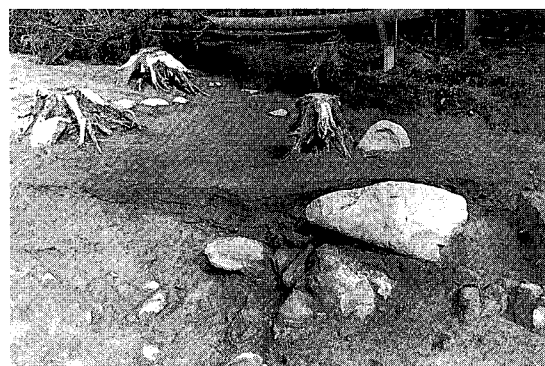


写真39 SX01全景

第4節 小結

平成3年度の発掘調査は、古墳2ヶ所（B22号墳・D3号墳）と古墳状隆起（C9号地点）近く1ヶ所を対象にしておこなった。そのうち、B22号墳は、掘削前の墳丘測量図を作成して調査を終了し、新たに分布調査で確認された垣吉B遺跡イナサカ地区の表土除去もおこなった。

C9号地点は、周溝を確認することを主目的にトレンチを設定した。調査前の踏査で古墳状隆起を確認できなかったため、古墳の可能性が低いことが予想された。調査によっても、自然地形としての小さな谷状の落ち込みを確認したのみで、周溝などの遺構を検出することができなかった。したがって、古墳でないことを確認した。

D3号墳は、直径約15m、高さ約2mを測る円墳で、木棺直葬を内蔵する。墳丘上部は盛土によって構築されており、被葬者の生前に古墳をある程度作っていたことを推定した。「寿墓」としての好例であろう。また副葬品は皆無で、供献された土器すら出土しなかった。A29号墳やB22号墳の埋葬施設でも副葬品がなかったため、棺内あるいは墓坑内に遺物を入れることが少ない古墳群である。別な見方をすれば、古墳祭式をどの程度理解して執行されていたか興味あるところである。

A26号墳で須恵器杯蓋が採集されており、6世紀を前後する時期のものである。土器供献が見られないことは、それ以前に作られたものであることを示す。さらに、墳丘が円形を呈することから、古墳時代前期まで遡る可能性は低い。したがって、古墳時代中期前半から中頃にかけて作られた古墳であると考えられる。



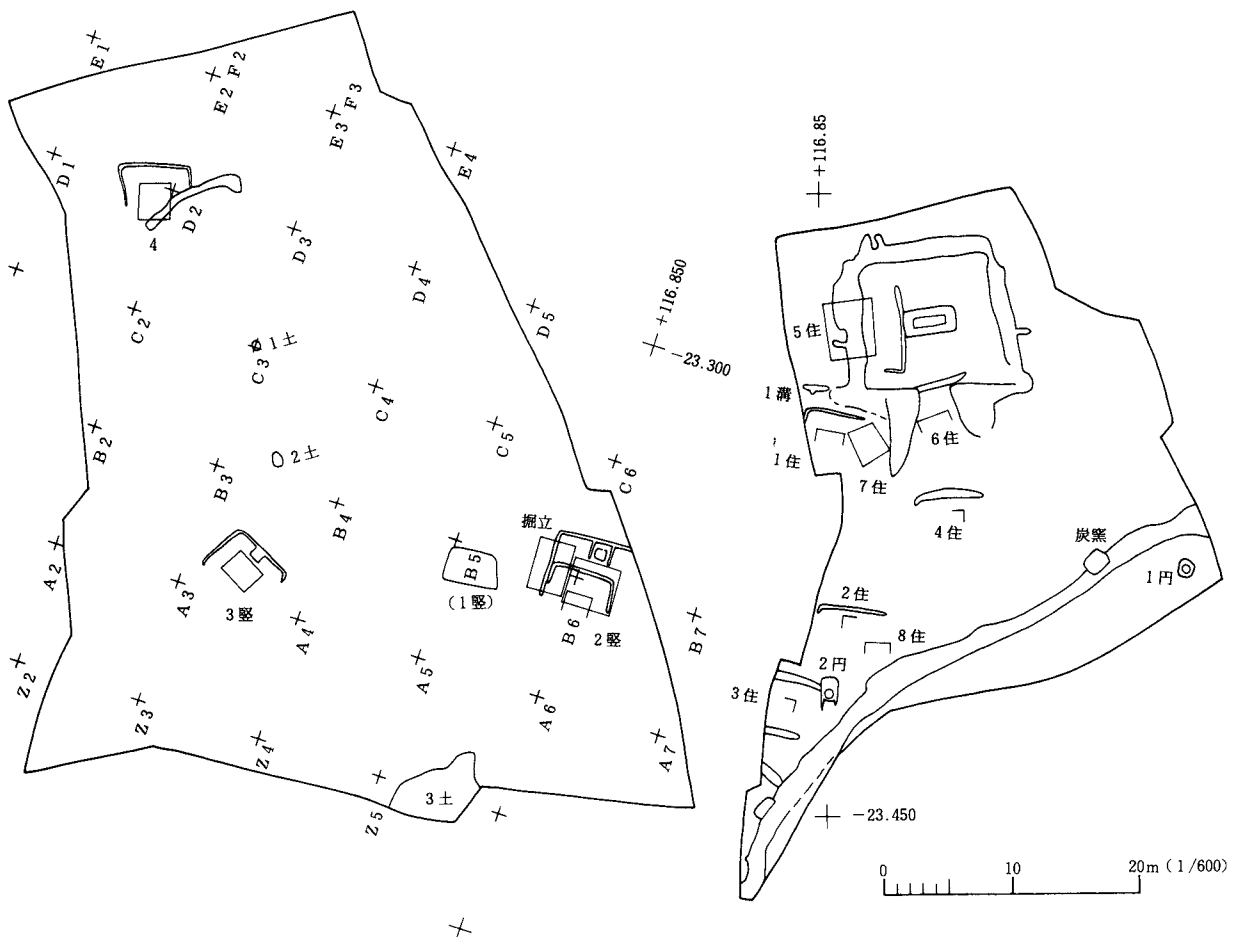
写真40 D3号墳完掘状況

第4章 平成6年度の調査

第1節 調査の概要

垣吉遺跡群は二宮川に面した丘陵の西端に位置する（第4図）。丘陵西端には小さな谷が入っており小丘陵が形成され、そこに垣吉B古墳群（24基）が存在する。調査区（第4図左側）は通称フクベ山と呼ばれており、古墳が1基確認されていた。発掘調査の結果、垣吉B22号墳は全長約19mの前方後方墳であり、主体部は木棺直葬と想定される。当初古墳だけと思われたが、他の時期の遺構が頂上付近と西斜面の下側に存在した。弥生時代後期の竪穴住居8棟、円筒土坑2基、溝などや時期は不明であるが環壕状遺構、木炭窯が検出された。

フクベ山遺跡の東側には小さな谷が入り込んでおり、水田として利用されていた（第5図）。重機による試掘を実施したが遺構遺物は検出されなかった。その東側の丘陵斜面に垣吉B遺跡は存在する。平成3年度には林道上側の発掘調査と林道下側の表土除去を実施し、平成6年度は表土除去された部分と南側を一部拡張した範囲（第4図右側）を発掘調査した。古墳時代中期～平安時代の土器が主に出土し、遺構は高所と中段に集中する（第8図）。竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟、土坑、鞍部2箇所などを検出した。調査区内にはE3杭北側からC3区中央をってA4・5区、Z5区第3号土坑（鞍部）に続く谷があり、C5区からB5区第1号竪穴（鞍部）をって合流している。



第7図 主要遺構配置図

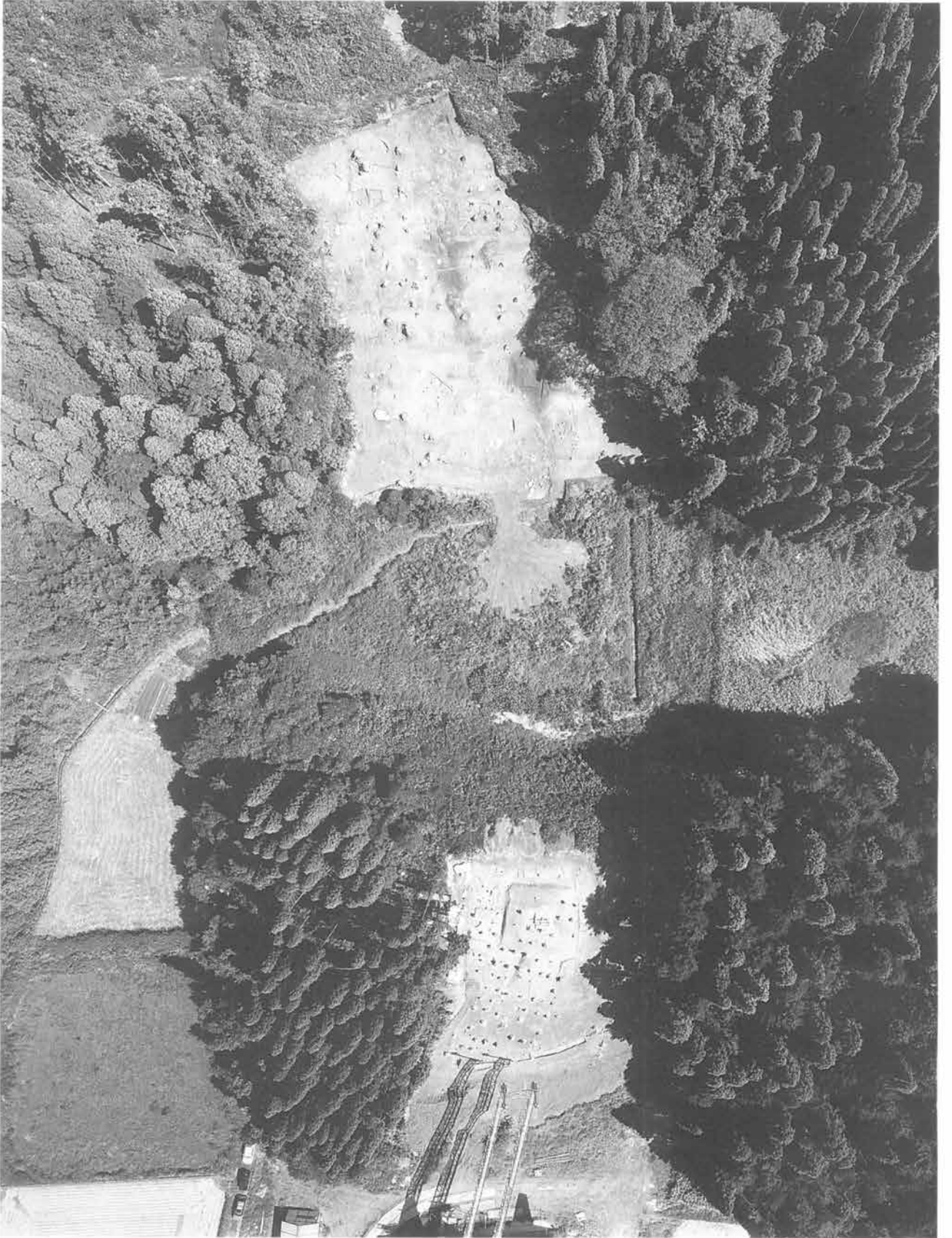


写真41 平成6年度調査区全景

垣吉遺跡 平面図



石川県立埋蔵文化財センター

第8図 垣吉B遺跡実測図 (1/300)



写真42 垣吉B遺跡全景

第2節 垣吉B遺跡の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

第2号竪穴住居跡（第9図、写真44・45）

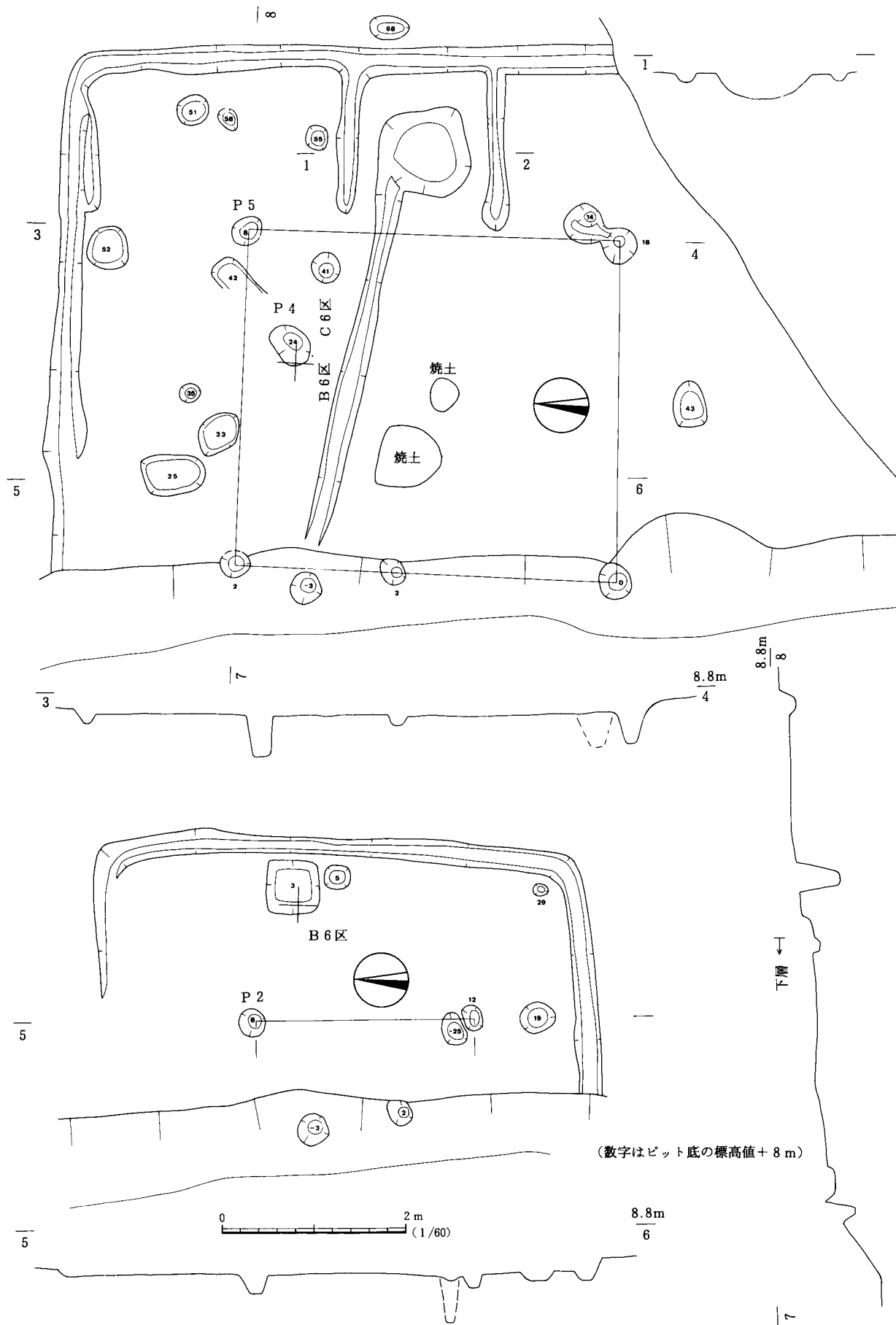
B～C 5・6区に位置し、標高は約8.2～8.6mである。南側と西側は攪乱を受けているので全体像は不明である。下層にも竪穴住居が存在し、その覆土上面に焼土が2箇所したので、上層の竪穴住居のほうが新しい。時期は古墳時代中～後期であり、プランは方形、長さ東西（5.6）m、南北（8）m、深さ20cmである。床面の標高約8.4～8.6mであり、西側が低くなっている。主柱穴は4本であり、南北幅4m、東西幅3.7m、深さ40cmを測る。主柱穴の間には床面には2箇所の焼土（70cm、30×40cm）がある。東側には2本の溝（長さ1.6、1.7m、深さ10cm）に囲まれた特殊ピットがあり、それから西側方向に深さ10cmの溝が続く。特殊ピットはやや不整形な方形（1×1m）であるが、底はやや楕円形を呈す。第11図1～4が出土した。北側の壁溝には10cm程度の白色の粘土が存在した（写真45）。

下層（第9図下段）も西側が存在しないが、方形プランと思われる。長さは南北5.3m、東西（3）m、深さ10～20cmである。床面の標高は8.2～8.3mであり、西側が低くなっている。主柱穴は4本と思われるが、浅すぎるために不確定である。柱間は2.4m、深さ20cmである。東壁の横に方形の特殊ピット（一辺60cm、深さ28cm）と思われる遺構が存在するが、上層には不整形なピットがあるので、確実に下層に伴うかは不明確である。

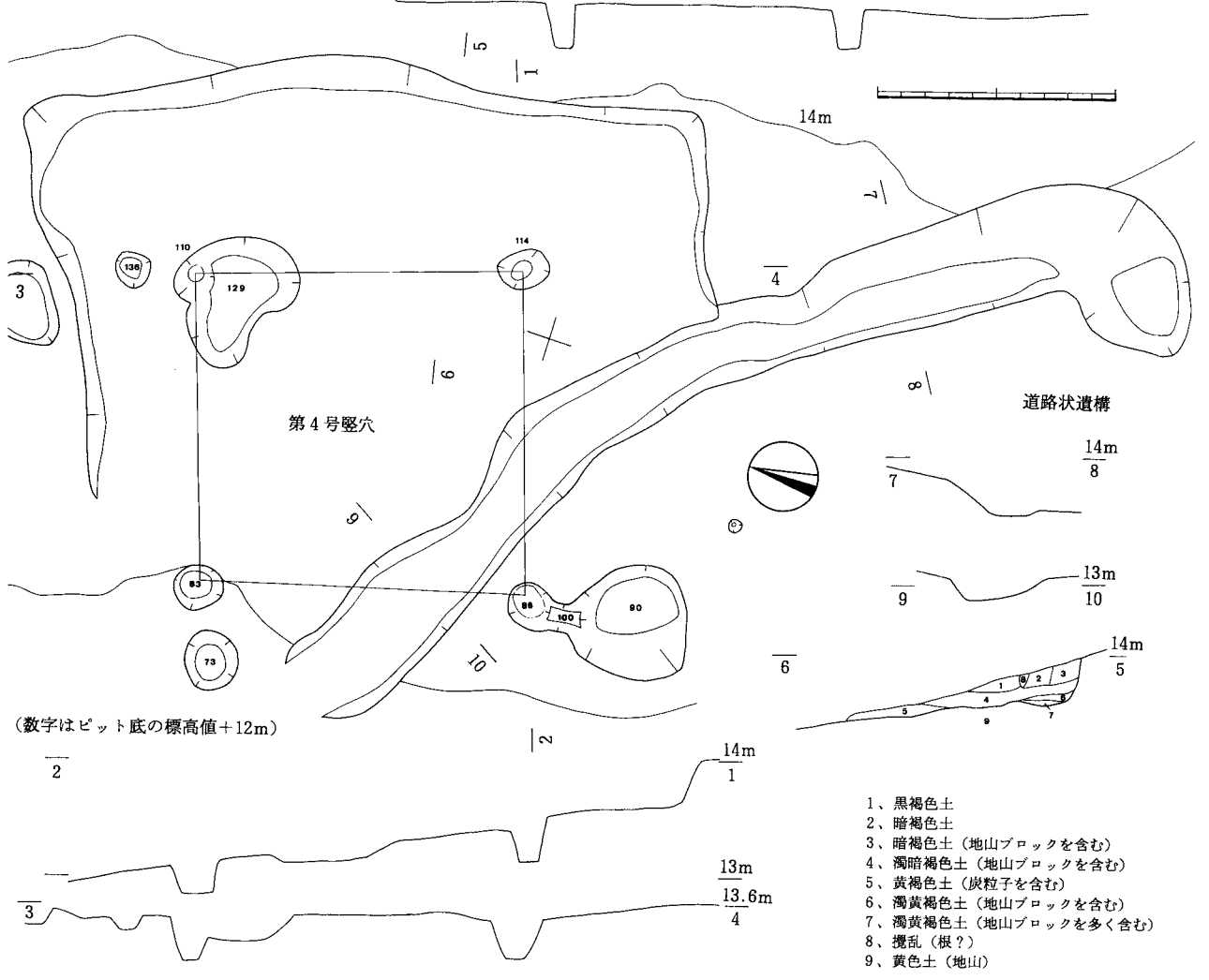
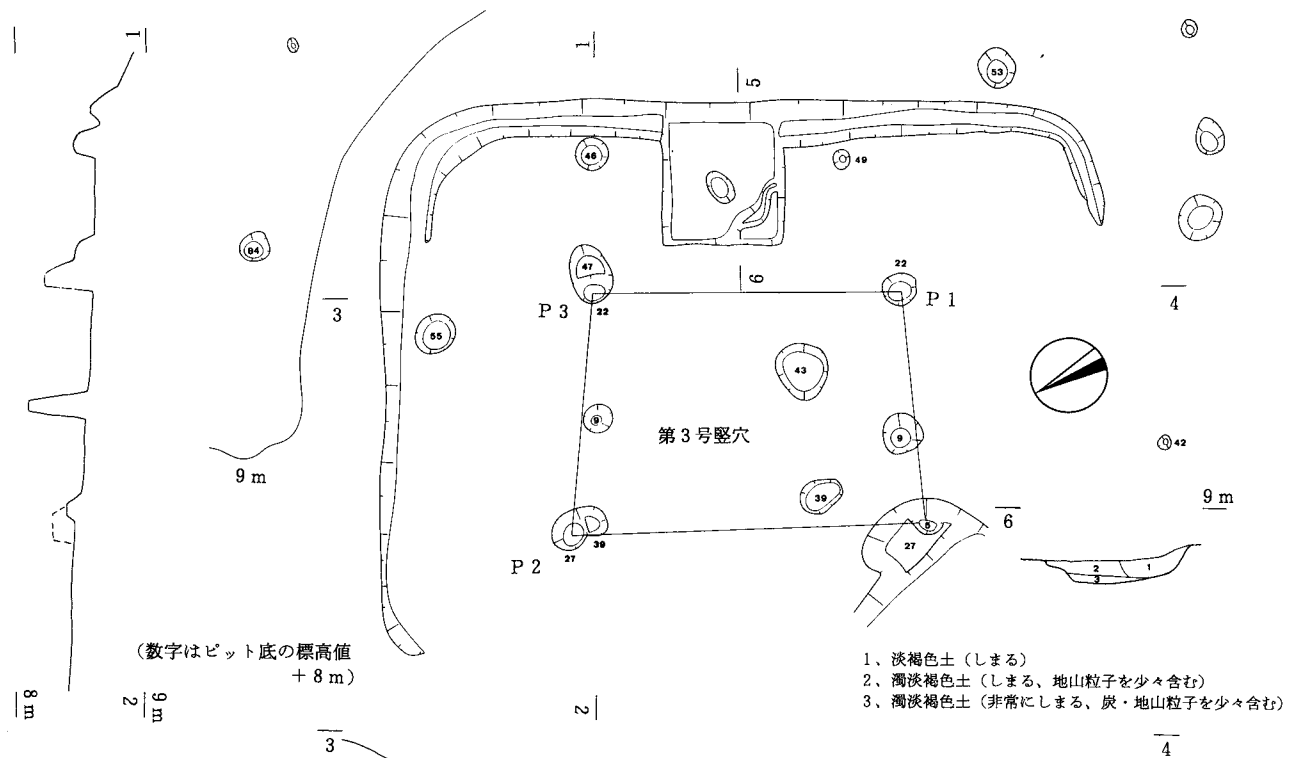
第11図1～17が出土した（写真51）。1～4は特殊ピット出土である。1は有段口縁を持つ壺であり、口径17.6cmである。色調は黄白色であり、胎土には1～2mm大の砂粒を多く含む。2は小型の碗と思われる。全体に荒れており、調整は不明である。口径9.6cm、器高6.6cmである。色調は暗い赤褐色であり、胎土には1～4mm大の砂粒を多く含む、海綿骨針を微量含む。3は坏部に鋭い稜を持つ高坏である。稜は張り付けで表現され、ナデ調整がされる。口径19.2cm、受部径13.2cmである。色調は淡い橙色～黄褐色であり、胎土には1～2mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。5は軽石であり、鉄器の痕跡が残っている。6はくの字甕であり、口径20cm、頸部径16.2cmである。にぶい橙色であり、1～3mm大の砂粒を多く含む。7は鉢形土器である。外面にススが付着する。外面はにぶい橙色、内面は褐色である。8は下層から出土した。壺の底部と思われる、底径6cmである。色調は橙色であり、1～2mm大の砂粒、海綿骨針を多く含む。9は坏部に鋭い稜を持つ高坏であるが、稜は接合と調整により造り出している。10は坏部に弱い稜を持つ高坏であり、色調はにぶい橙色であり、1～2mm大の砂粒、海綿骨針を含む。11は色調はにぶい橙色であり、1～2mm大の砂粒を含む。12は小型高坏であり、外面ミガキ、内面ナデ調整である。外面明赤褐色、内面橙色であり、砂粒は少ない。海綿骨針を含む。13はやや歪みがあるようである。口径17cm、受部径10cmであり、受部下半には砂粒が動いた痕が数箇所存在する。色調は橙色であり、胎土には0.5～3mm大の砂粒を多く、海綿骨針と雲母を微量含む。14は橙色であり、0.5～2mm大の砂粒を多く、海綿骨針を少々含む。15は砂粒を多く、海綿骨針と雲母を少々含む。16は赤彩痕がある。17はナデ調整である。18は弥生時代後期後半の有段脚と思われる、外面はナデ調整が入る。色調は橙色であり、胎土には0.5～2mm大の砂粒をやや多く含む。雲母を少々含む。

第3号竪穴住居跡（第10図上段、写真46）

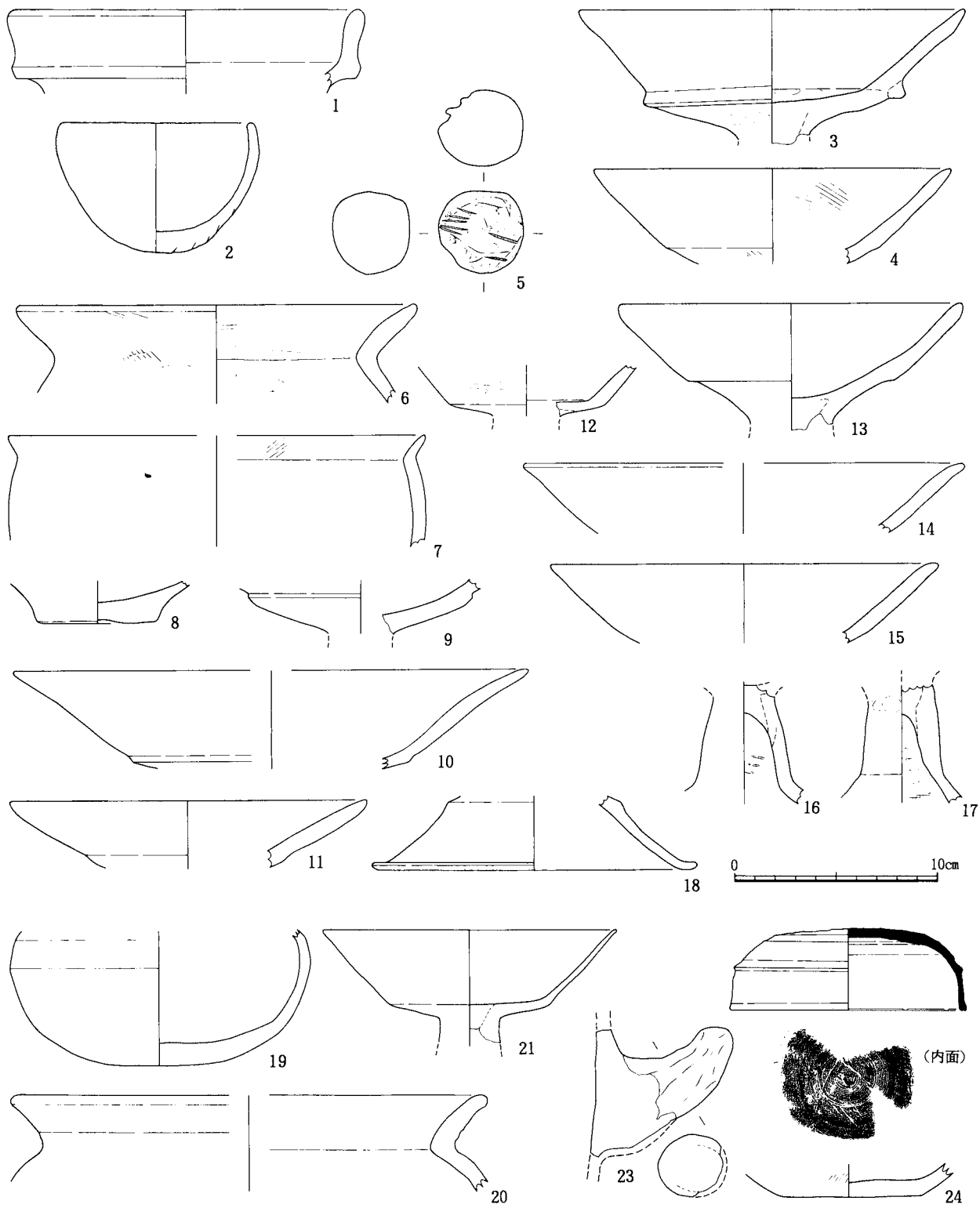
B 3区に位置し、標高は8.4～8.8mである。北西側と南側の壁が攪乱により、存在しない。時期は古墳時代中～後期であり、隅円方形のプランと思われる、南北（5.8）m、東西（4.5）mである。床面の標高は8.4～8.6mであり、北東コーナー部分が一番深くて20cmである。北壁に特殊ピットが存在し、一辺1mの方形である。西側は2段に成るようだが、深さは20cmである。主柱穴は4本であり、深さ20～40cm



第9図 第2号竖穴実測図 (1/60)



第10図 第3号・4号竪穴実測図



第11图 竖穴出土遺物

である。柱間は東西方向1.9m、南北方向2.5mと2.8mである。

第11図19～21が出土した（写真51）。19は丸底の壺であり、胴部径15.2cmである。表面はやや荒れており、2次加熱を受けているようである。色調は灰白色であるが、外面には橙色の部分もある。20は甕であり、0.5～1mm大の砂粒、海綿骨針を多く含む。色調はにぶい黄橙色である。21は高坏であるが、表面が剝離している。口径15cm、受部径8.4cmである。2mm大の砂粒と海綿骨針を少々含む。色調はにぶい橙色である。

第4号竪穴住居跡（第10図下段、写真47）

E～D1・2区に位置し、標高は12.8～14.1mである。西側半分以上が攪乱により存在しない。道路状遺構と思われる溝が存在し、竪穴より新しいものと思われる。時期は古墳時代後期である。方形のプランであるが北側には試掘調査のトレンチが縦断していたり、東側（山側）が少し崩れているためにやや不整形である。南北方向5.8mである。床面の標高は東壁下で13.6mであり、覆土の存在した地点（第10図下段ポイント6）の標高は13.4mである。それより西側は攪乱ないし流れによって存在しない。主柱穴は4本であり、柱間は約2.8m、深さ35cmである。

第11図22～24が出土した（写真51）。22は須恵器である。口径11.6cm、器高4.2cmである。天井部外面を回転ヘラケズリ調整を行い、内面はカキ目のちナデ調整であるが、中央部はカキ目を残している。色調は淡い灰色であるが、天井部には薄く降灰が見られる。砂粒は少ないが、3mm大の石が1点入る。TK47と思われる。23は甌の把手である。24は坏と思われ、内面には赤彩される。

2. 掘立柱建物跡

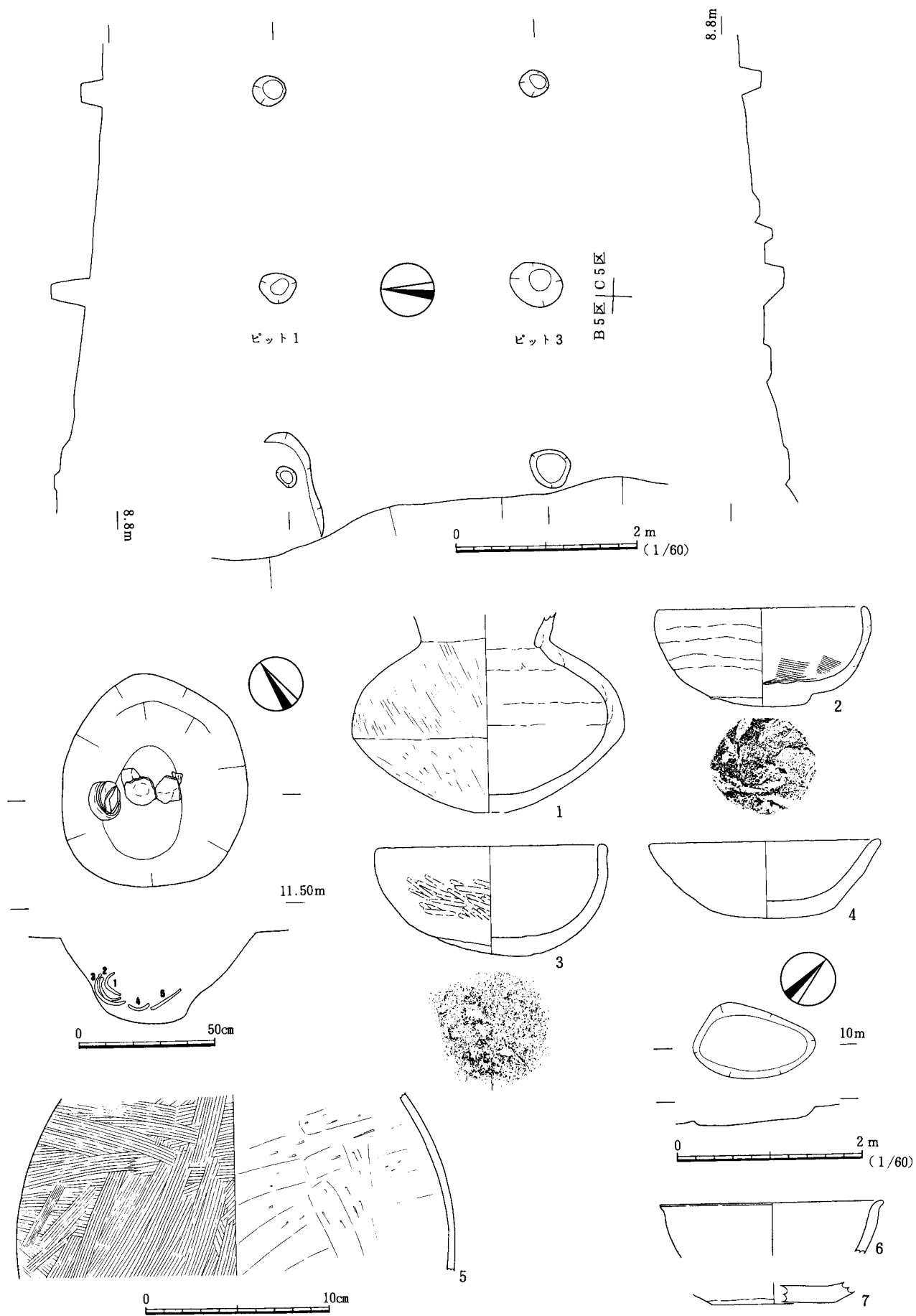
B～C5・6区に位置し、標高は8.1～8.7mである。ピット1、3からは古墳時代中・後期の土器が出土しているので、時期は古墳時代中・後期以降である。第2号竪穴住居跡との切り合い関係は明確ではないが、掘立柱建物跡の方が新しいと思われる（写真44）。1×2間であるが西側が攪乱のため存在しないので、延びるかどうかは不確定である。3.2m×4.6mであり、床面積は14.8㎡である。主軸はW-4°-Sである。柱の深さは最深40cmであり、東側（山側）の柱の底レベルはやや浅いが、他の柱底レベルは8.1m付近に集中する。柱間は2.9m、2.2mである。

3. 土坑

第1号土坑（第12図、写真49・50）

C3区の杭付近に位置し、標高は11.3～11.5mである。楕円形（79×69cm）であり、深さ35cmである。土坑の中央で底から5cm浮いた状態で土器と石が出土した。北西側から滑り落ちた状態が伺われた（写真49）。第12図3の腕の中に小さい腕（2）がすっぽり入っていた。その腕の内側に壺（第12図1）が底部を上にして、頸部を腕の内側に入っていた（写真50）。

第12図1は胴部に稜を持つ小型壺である。底部はケズリによりやや尖底風になっている。胴部上半はハケ調整のち一部ケズリが入る。体部上半と胴部にはススが付着する。内面はナデ調整であるが、胴部に軽い輪積み痕が2箇所、頸部には明瞭な輪積み痕が2箇所ある。胎土には0.5～2mm大の砂粒を多く含む、角閃石と海綿骨針を少々含む。色調は外面暗い赤橙色、内面赤橙色である。2は底径5.6cm、口径10.6×11.2cmの碗である。底部の高まりをケズリ調整、外面をナデ調整するが、輪積み痕を消してはいない。胎土には0.5～1mm大の砂粒、海綿骨針を多く含む。色調は淡い肌色であり、一部淡い灰褐色にくすむ。3は口径12.6cm、底径5.6cmの碗である。2同様底部を削っているが、丁寧なために丸底化している。内面はナデ、外面はミガキ調整であり、調整は丁寧である。胎土には0.5～1mm大の砂粒、海綿骨針を非常に多く含む。色調は淡い肌色であり、一部淡い灰褐色にくすむ。内外面に黒斑を持つ。4は口径12.2cm、底径6cmの碗である。外面はヨコナデのち一部縦方向のナデ（軽いケズリか）が入る。5は甕



第12図 遺構・遺物実測図

であり、外面にススが多く付着する。胎土には0.5～2mm大の砂粒を非常に多く含む。

第2号土坑（第12図）

C3区西側に位置し、標高は9.7～9.9mである。楕円形（132×84cm）であり、深さ10cmである。

第12図6は椀であり、口縁部を短く外に摘み出す。内外面に赤彩痕がある。1mm大の砂粒とシャーモットを少々含む。7は底部であり、磨耗が激しい。

4. その他の遺構

道路状遺構（第10図、写真48）

D1～E2区に位置し、第4号堅穴住居を切っているようである。標高13～14mに位置し、幅54～78cm、深さ10～30cmである。北西から南東方向にやや弓形になっており、南東の先端側は斜面側にやや曲っている。遺物は出土しなかったため、時期は不明であるが、古墳時代中・後期以降と思われる。

鞍部・第1号堅穴（第8図、写真42）

B5区に位置し、遺構検出を実施する前から黒色の落ち込みと土器が見えていた。よって第1号堅穴と呼称し、掘り下げた。土器は上面で多数出土したが、途中から出土しなくなったため途中から断ち割りを入れた。その結果鞍部と判断した。

鞍部・第3号土坑（第8図、写真42）

Z・A5区に位置する。土坑と判断して掘り下げたが、途中からZ区側（谷側）に広がり始めたため重機で調査区を拡張した。大きな石が多数存在し、人為的なものではなかった。第1号堅穴から続く自然の谷・鞍部である。

溝群（第8図）

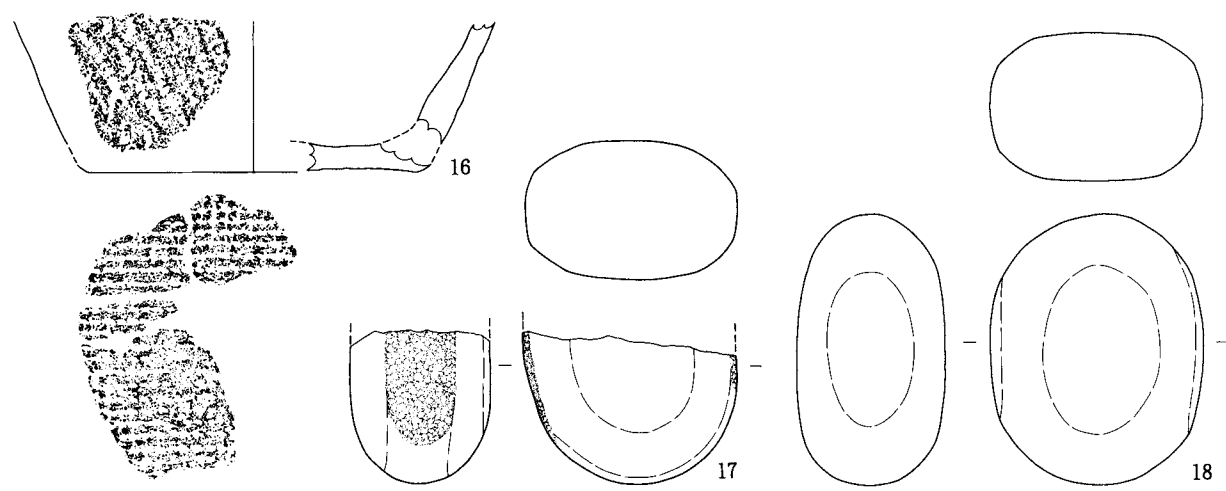
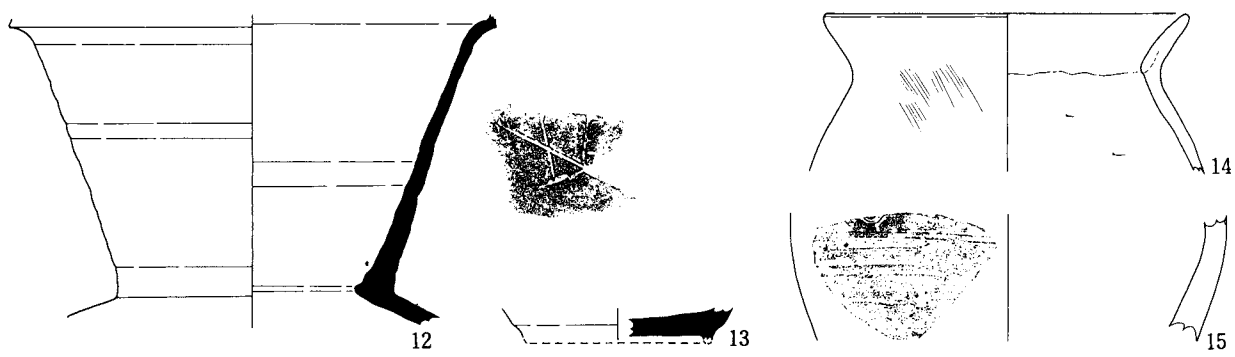
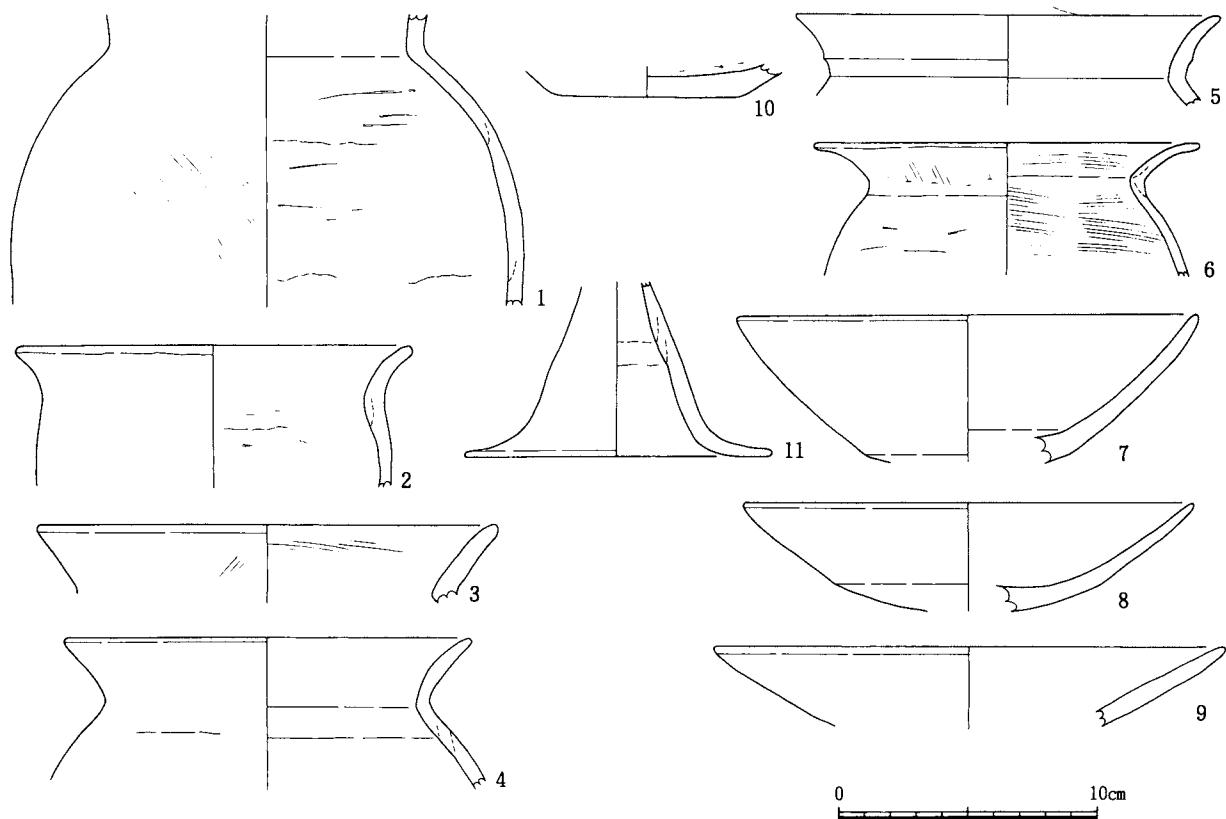
調査区の中段付近に存在し、中央部に縦に存在する谷に対してほぼ直角に交わっている。遺物が出土した溝は少なく、しかも少量しか出土していない。

5. 包含層出土遺物

1～9はB5区に位置する第1号堅穴住居跡（鞍部）から出土した（写真52）。器壁は荒れており、調整が不明なものが多い。1は甕の胴部であり、浅い赤橙色、浅い黄橙色である。2は頸部のくびれが弱い甕であり、口径15.4cm、頸部径13.6cmである。胎土には0.5～1mm大の砂粒を多く含み、色調はくすんだ灰褐色である。3は甕であり、色調は灰褐色、浅い肌色である。4は甕であり、口径15.8cm、頸部径12.8cmである。胎土には2～4mm大の砂粒を多く含む。色調は浅い黄橙色である。5は外面にススが付着している。淡い茶褐色であり、0.5～2mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。6は内面をハケ調整する甕であり、口径15cm、頸部径10.8cmである。器壁は2～3mmと薄い。色調は外面くすんだ黄橙色、内面灰色である。胎土には2～3mmの砂粒と海綿骨針を含む。7～9は高坏である。7は口径17.8cmである。胎土には0.5～2mm大の砂粒を多く含み、色調は赤橙色である。8は口径17.4cmである。色調は黄橙色、受部は浅い肌色である。胎土には2～3mmの砂粒を含む。10は底部である。内面ケズリ調整がなされ、外面赤橙色、内面灰褐色である。胎土には2～3mmの砂粒を多く含む。11は高坏の脚部であり、脚部径12.2cmである。色調は黄橙色であり、0.5～1mm大の砂粒を多く含む。

12～15はA・Z5区に位置する第3号土坑（鞍部）から出土した。12は古代の双耳瓶の頸部と思われ、頸部径11cmである。頸部にヘラ記号かと思われるものを持つ。13は底径8.4cmの有台坏である。15は珠洲焼の壺の胴部片であり、波状文を持つようだ。

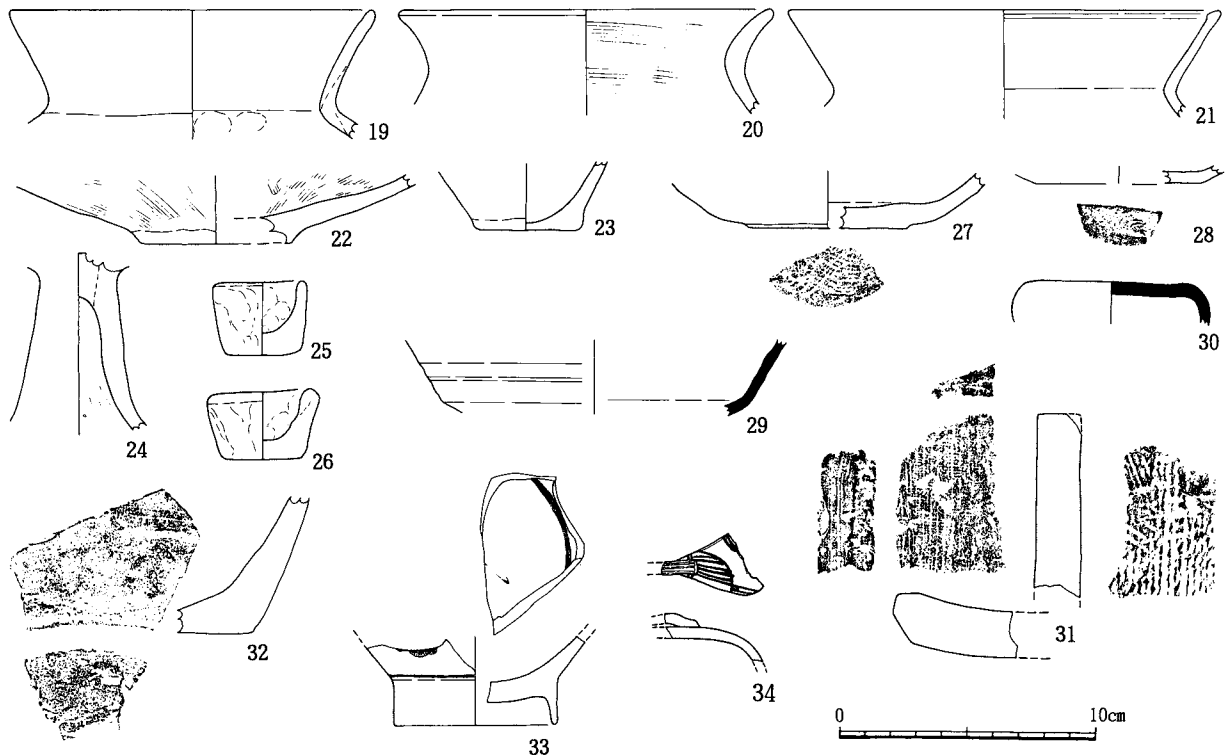
16は縄文土器の底部であり、すだれ状圧痕を持つ。底径約14cmであり、縦糸間隔4mm、横糸間隔3mmである。色調は淡い赤橙色である。17・18は林道上の調査区（91年調査）から出土した縄文時代の石器である。17は磨石であり、側縁に敲打痕を持つ。石質は花崗岩であり、重量は(387)gである。18も磨石



第13図 包含層出土遺物(1)

であり、側縁部も使用したようだ。石質は安山岩であり、重量は793gである。

19はD3区西の溝から出土した。壺であり、口径14.4cmである。口縁部はヨコナデ調整がなされる。胎土には1mm大の砂粒を多く、海綿骨針を非常に多く含む。20は91年度表採である。甕であり、胎土には0.5～2mm大の砂粒を多く含む。色調は淡い茶褐色である。21は91年度包含層出土である。布留型甕であり、口径16.8cmである。色調は柿色である。1mm大の砂粒と海面骨針を含む。22は大型壺の底部と思われる。C5区から出土した。海綿骨針を非常に多く含む。23は平底の底部でありA5区出土である。底径は4.4cmである。24は高坏の脚部であり、色調は橙色である。25はC5区から出土した手付くね土器である。口径3.4cm、底径3cm、器高3cmである。26はA5区出土である。口径4cm、底径3cm、器高2.9cmである。27は2号堅穴付近（北側）出土である。ロクロ土師器の底部であり、底径6.2cmである。底部には回転糸切痕を残す。色調は黄橙色であり、外面はややくすむ。28は平安時代の土師器碗であり、底径6.4cmと思われる。底部に回転糸切痕を持つ。29は1号堅穴（鞍部）付近出土である。須恵器の坏体部と思われる。色調は淡茶褐色であり、砂粒を殆ど含まない。30はA5区から出土した。短頸壺の蓋と思われる。外面は灰白色、内面は灰色である。31は古代の平瓦であり、第3号土坑（鞍部）横のA6区包含層から出土した。表面には布目痕、裏面には燃糸の痕を持つ。色調は赤橙色であり、胎土にはシャモットのような赤色粒子を含む。山の反対側に立地する舟尾コウラ池瓦窯跡（第2図12）で焼かれた瓦の可能性が高い。32・33はA7区SX01（近世以降の攪乱）から出土し、他に須恵器の高坏脚部破片が1点出土した。32は珠洲焼の摺鉢の底部であり、内面は摩滅している。33は18世紀第4四半期～19世紀第1四半期ころの伊万里碗であり、貫入は入らない。34はA5区出土である。伊万里焼の蓋物の蓋であり、貫入が多く入る。



第14図 包含層出土遺物(2)



写真43 垣吉B遺跡調査終了



写真44 第2号竪穴住居跡



写真45 第2号竖穴住居跡



写真46 第3号竖穴住居跡



写真47 第4号竖穴住居跡



写真48 道路状遺構

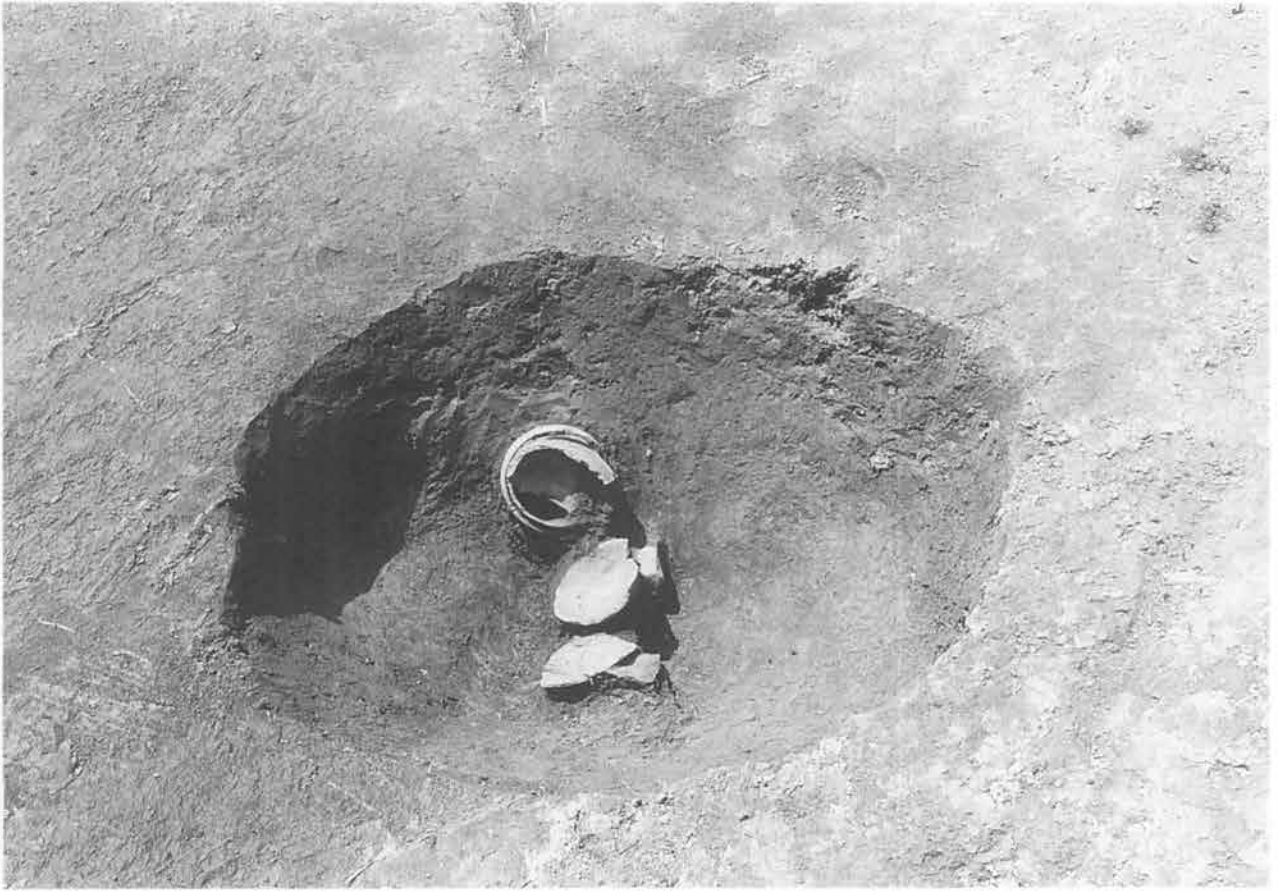


写真49 第1号土坑土器出土状況(1)



写真50 第1号土坑土器出土状況(2)

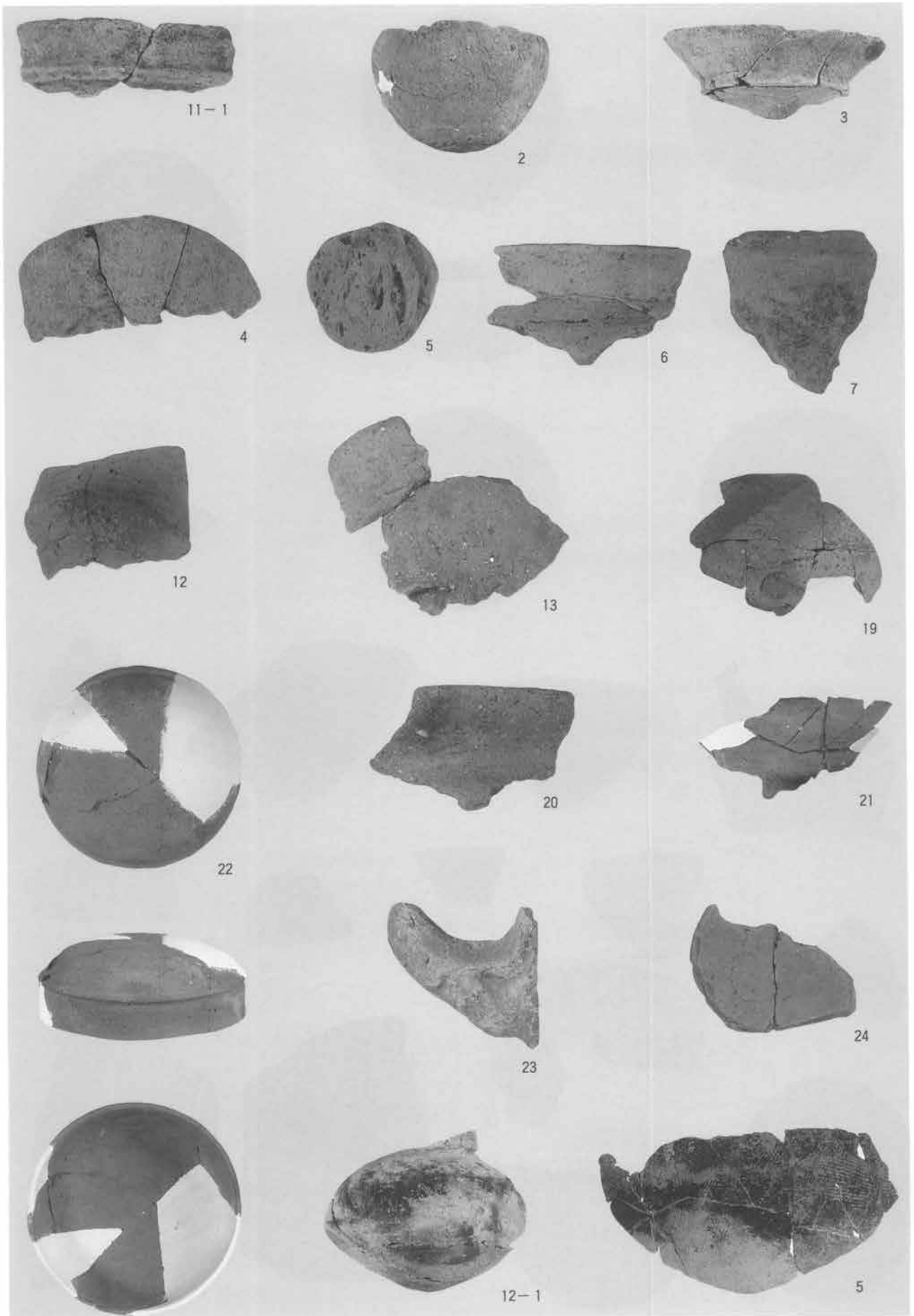


写真51 垣吉B遺跡出土遺物(1)

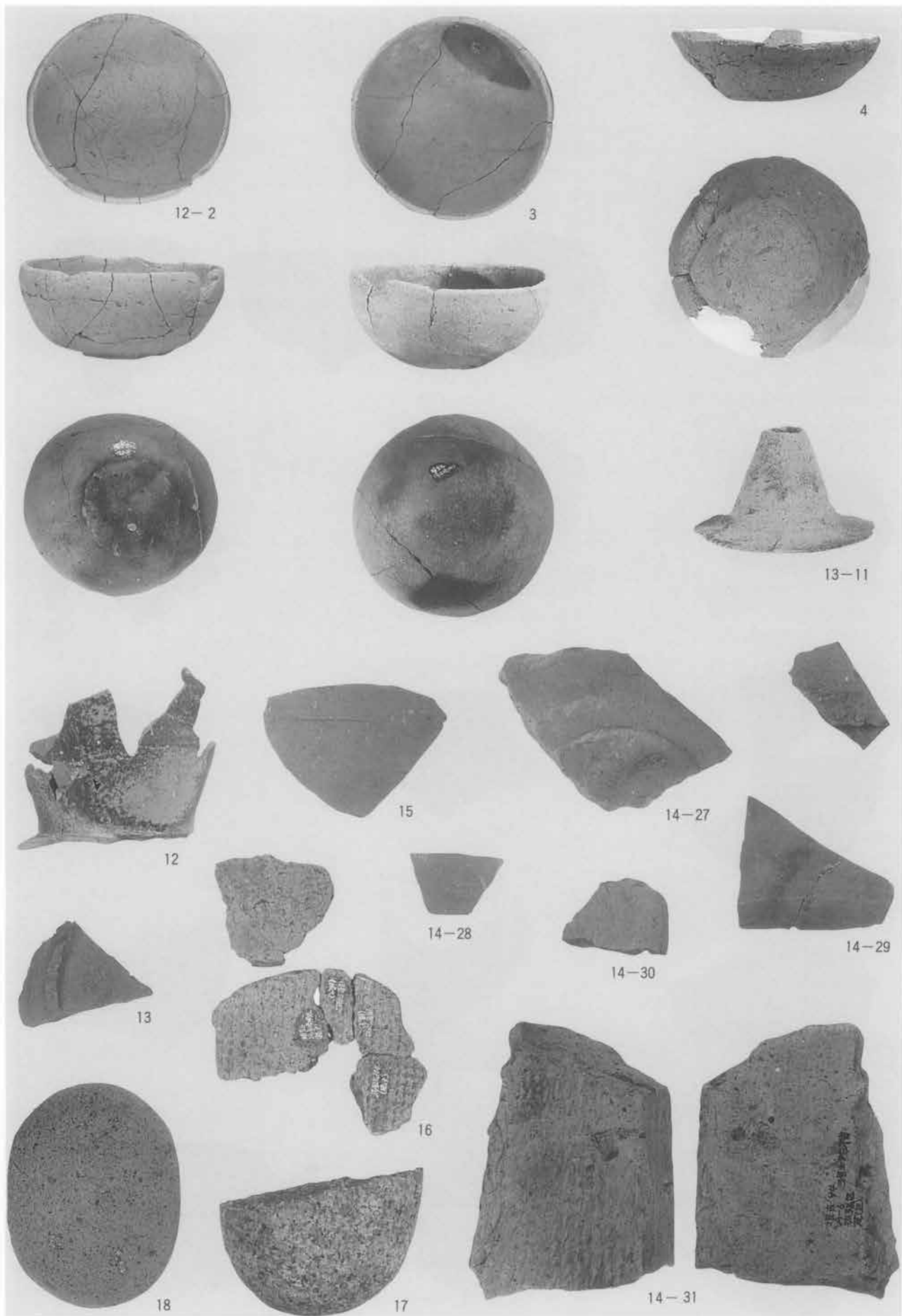
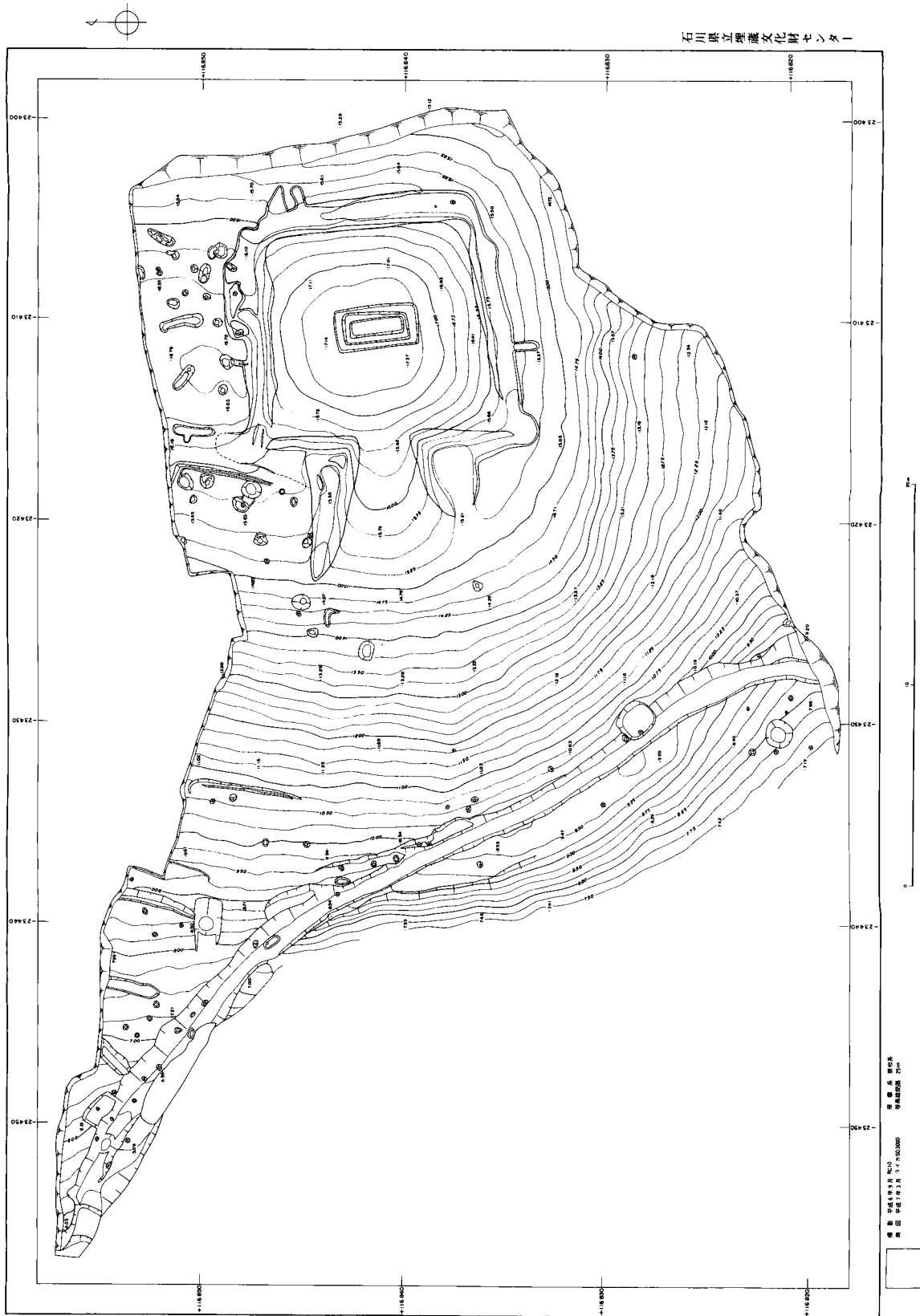


写真52 垣吉B遺跡出土遺物(2)

垣吉遺跡 平面図



第16図 垣吉フクベ山遺跡全体図 (1/300)



写真53 垣吉フクペ山遺跡全景

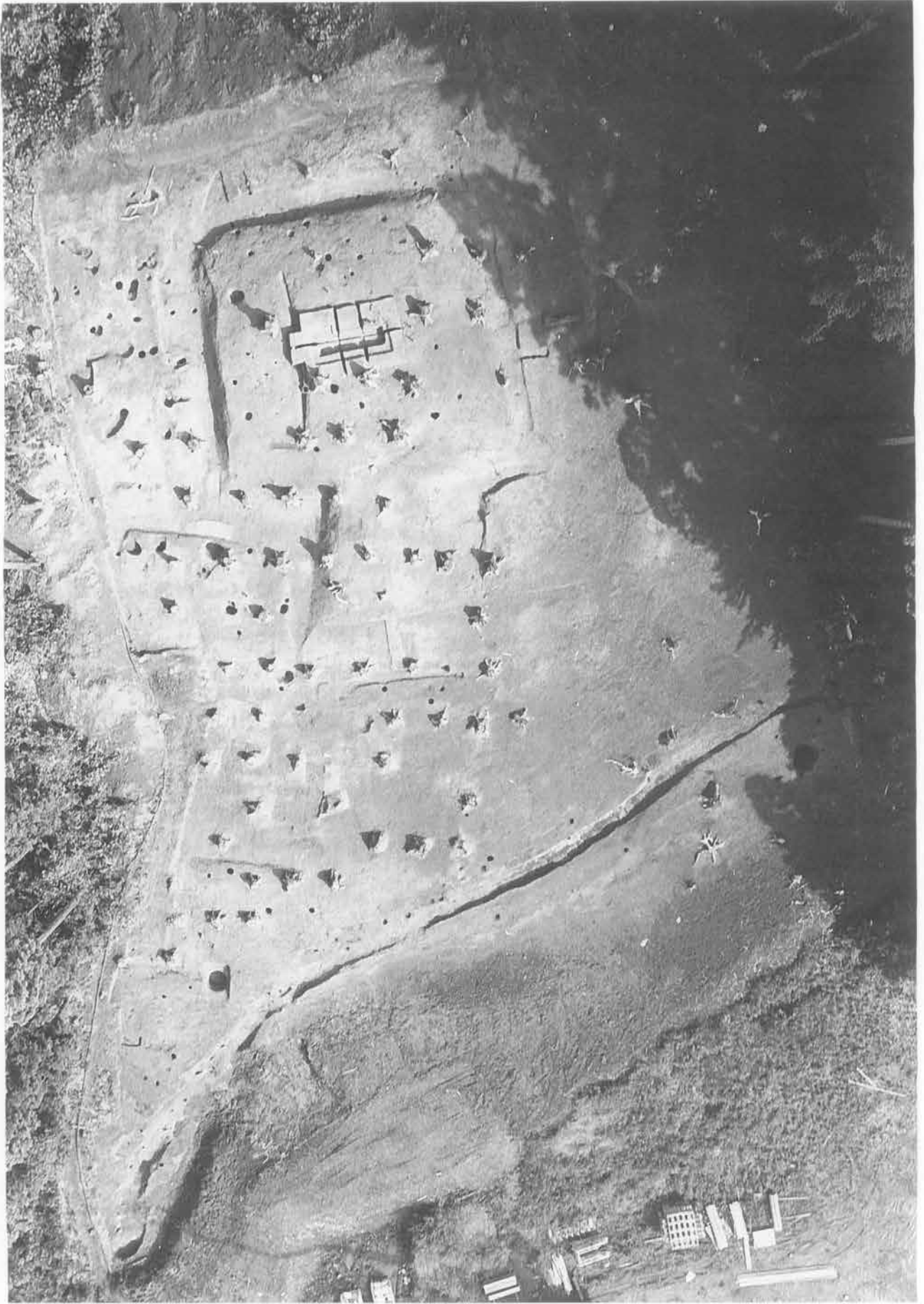


写真54 垣吉フクベ山遺跡下層全景

2. 竪穴式住居跡

第1号住居跡（第17図、写真56）

古墳の前方部右側周溝の横（北側）に位置する。標高14.8～15.8mに立地し、方位マークの下から傾斜がややきつくなり。竪穴式住居であり、南北（5）m、東西（5.4）m、深さ30cmである。第7号住居跡との前後関係は不明である。床面は15.5～15.7m前後であり、4本支柱であったと推定される。柱穴は地山からは10～14cmと浅く、南西側は確認できなかった。柱間は東西方向2.2m、南北方向2.3～2.5mと思われる。東側（高所）には直径70～100cm、深さ10～25cmのピットが存在し、弥生後期の土器片と焼土ブロックが出土した。

第2号住居跡（第18図、写真58・59）

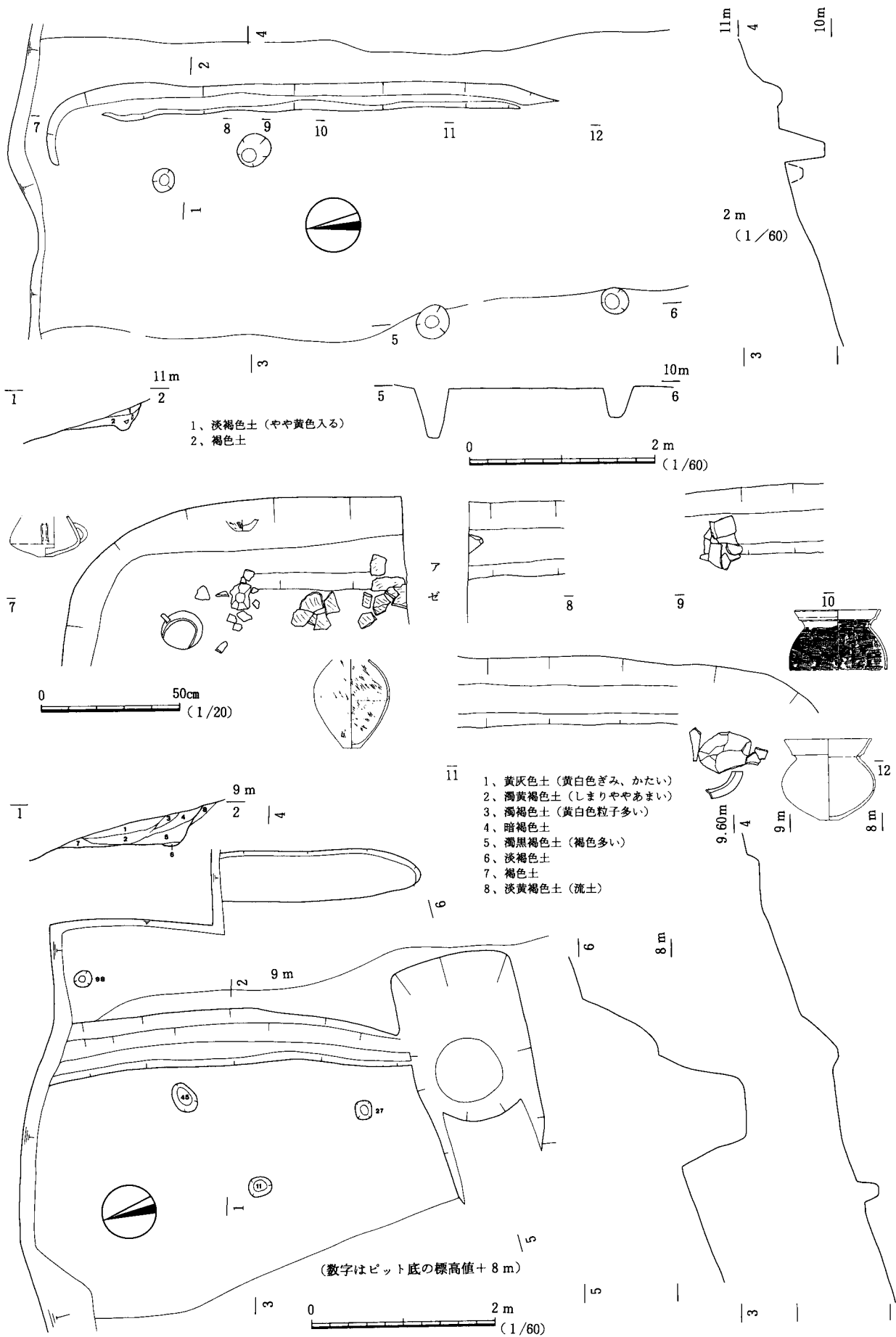
西側斜面に位置し、標高10～10.9mに立地する。竪穴式住居であり、4本支柱と思われる。東側は（5.7）mが確認され、深さは25cmである。床面の標高10.5mである。山側のみ遺構が存在し、大部分が流れている。北側のピットは深さ20cmであり、主柱穴と思われるピットは深さ58cmである。南側にも柱穴が存在すると思われるが、木の根が存在するために確認できなかった。南側には第8号住居跡が存在するが、前後関係は不明である。壁溝では土器が3ブロックにまとまって出土した（写真59）。4・5は南側ブロック、3・7・9は北側ブロックから出土した。

第19図3～11が出土した（写真68）。3は体部に赤化した痕があり、胴部最大径付近にススが付着する。胴部最大径16.6cm、底部径3.8cmである。胎土には0.5～1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。4は有段口縁を持つ壺であり、底部は平底である。口径18.8cm、頸部径13.8cm、胴部径20.2cm、底部径4.2cmである。外面と口縁部内面には赤彩痕がある。胎土には0.5～2mm大の砂粒と海綿骨針を含む。5は有段口縁を持つ甕であり、肩にハケによる刺突を持つ。口唇部を丸く仕上げしており、口径18.4cm、頸部径14.2cm、胴部径21.2cmである。胎土には海綿骨針を非常に多く含む。6は受部が丸い鉢である。口径21.8cm、受部径18cmである。色調は浅い赤橙色であり、胎土には0.5～1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。7は無頸壺と思われ、胴部に把手が付く。反対側には付かないようである。内面には一部赤彩痕が見られる。底径3.4cm、胴部径15.6cmであり、把手の長さ4.9cm、幅1.4cmである。色調は浅い肌色であり、胎土には0.5～1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。8は受部径9.8cmの小型高坏と思われる。外面に一部ススが付着する。色調は淡茶褐色であり、胎土には0.5～1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。9は甕の底部であり、底径3cmである。底面を工具で調整している。胎土には2mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。10は底径3.2cmであり、1mm大の砂粒を含む。11は甕の底部であり、底径3.8cmである。

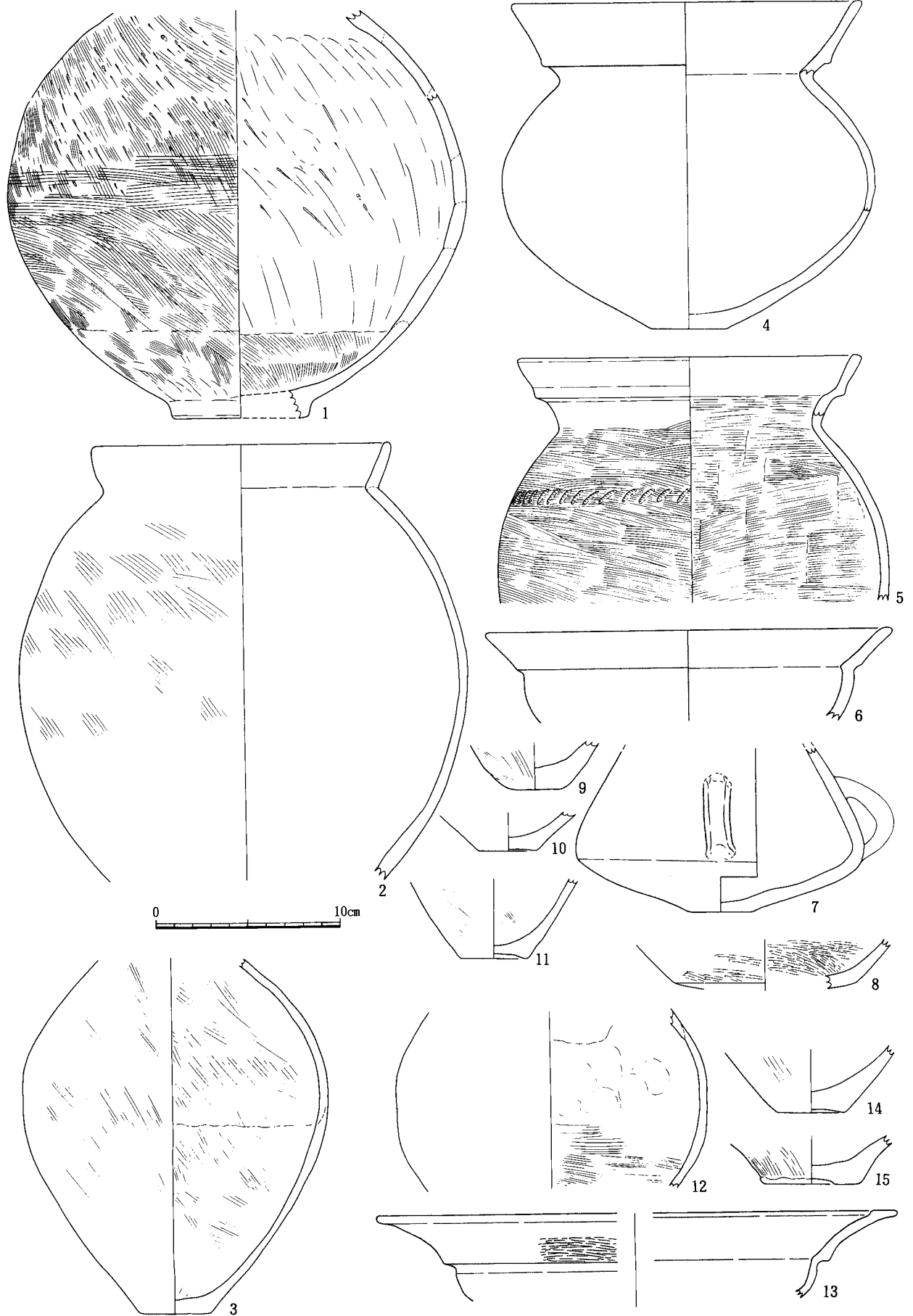
第3号住居跡（第18図、写真60）

丘陵西斜面の下側に位置し、一部は調査区外に存在する。標高は8～9mである。竪穴式住居であり、南・西側は存在しない。床面の標高は8.5mである。主柱穴は深さ24cmであり、他に深さ6cm（北側）、20cm（南側）のピットがある。上側には幅60cm、深さ15cmの溝状のテラスが存在する。テラスの下端から第3号住居の掘り方までは約1.2mの距離がある。

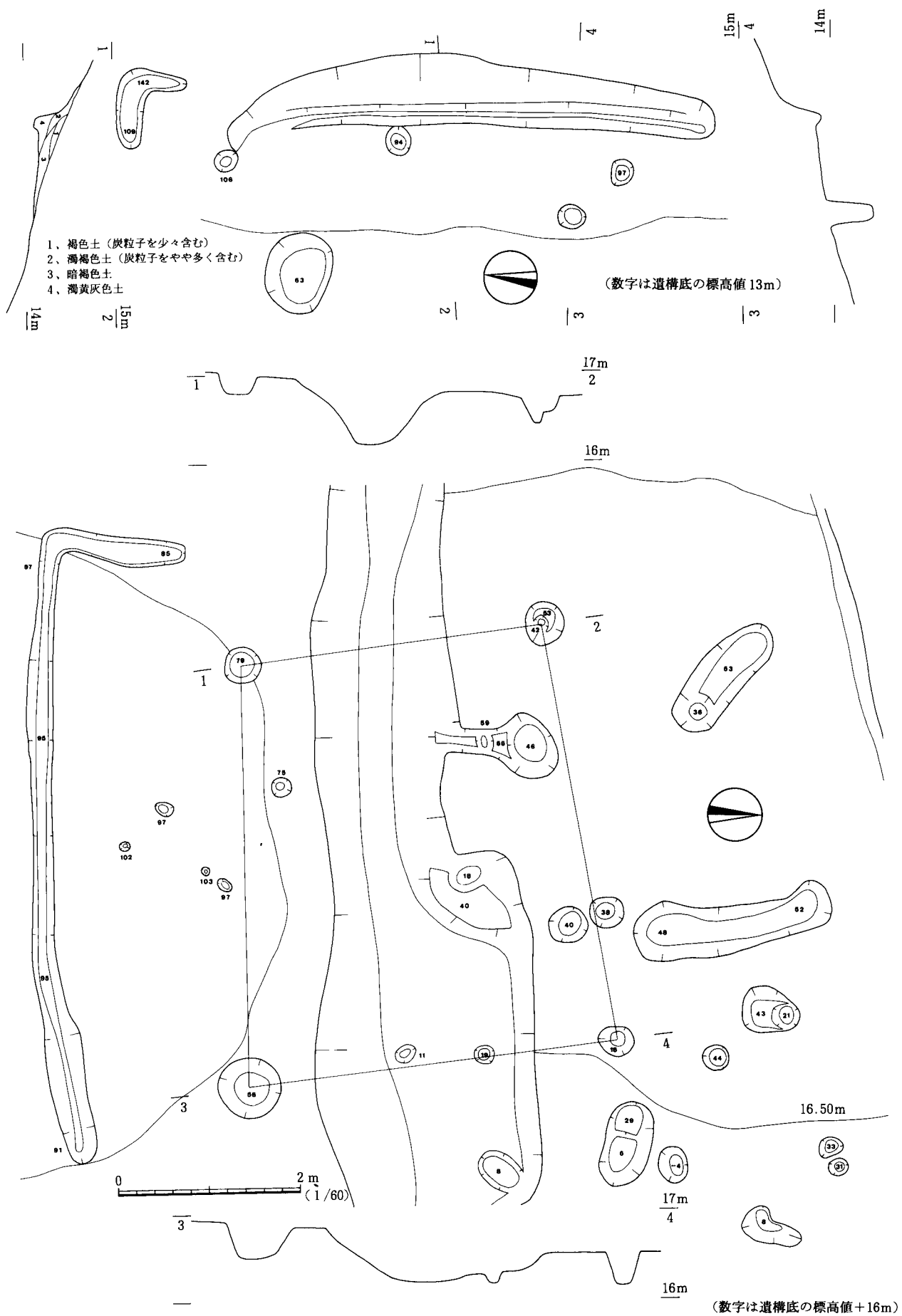
第23図16～21が出土した（写真68）。16は甕の口縁部と思われる。口径21.4cm、頸部径16.4cmである。色調はくすんだ黄橙色であり、胎土には0.5～1mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。17は有段口縁を持つ壺と思われる。内面は剝離しているが、段の上までは赤彩が確認される。胎土には1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。色調は黄橙色である。18は甕の口縁部であり、口径14.2cm、頸部径10.8cmである。2mm大の砂粒を含み、色調はくすんだ黄白色である。19～21は底部である。19は鉢の底部と思われ、底径2.6cmである。20は甕の底部であり、底径3.2cmである。21は体部上半にススが付着し、ほかは赤化しているで甕の底部である。凹底であり、底径3.6cm、深さ6mmである。胎土には0.5～2mm大の砂粒と海綿骨針



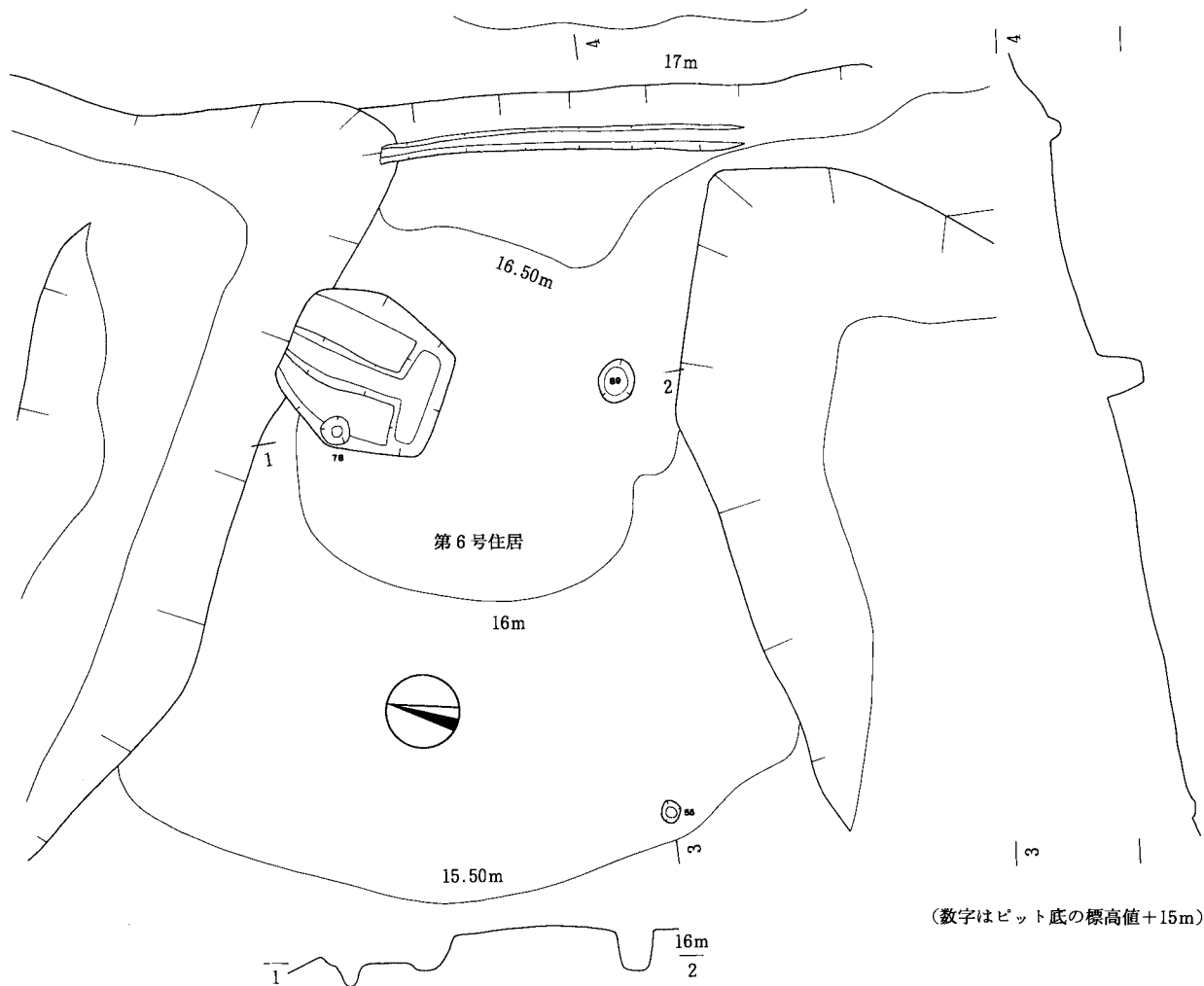
第18図 第2号・3号住居実測図



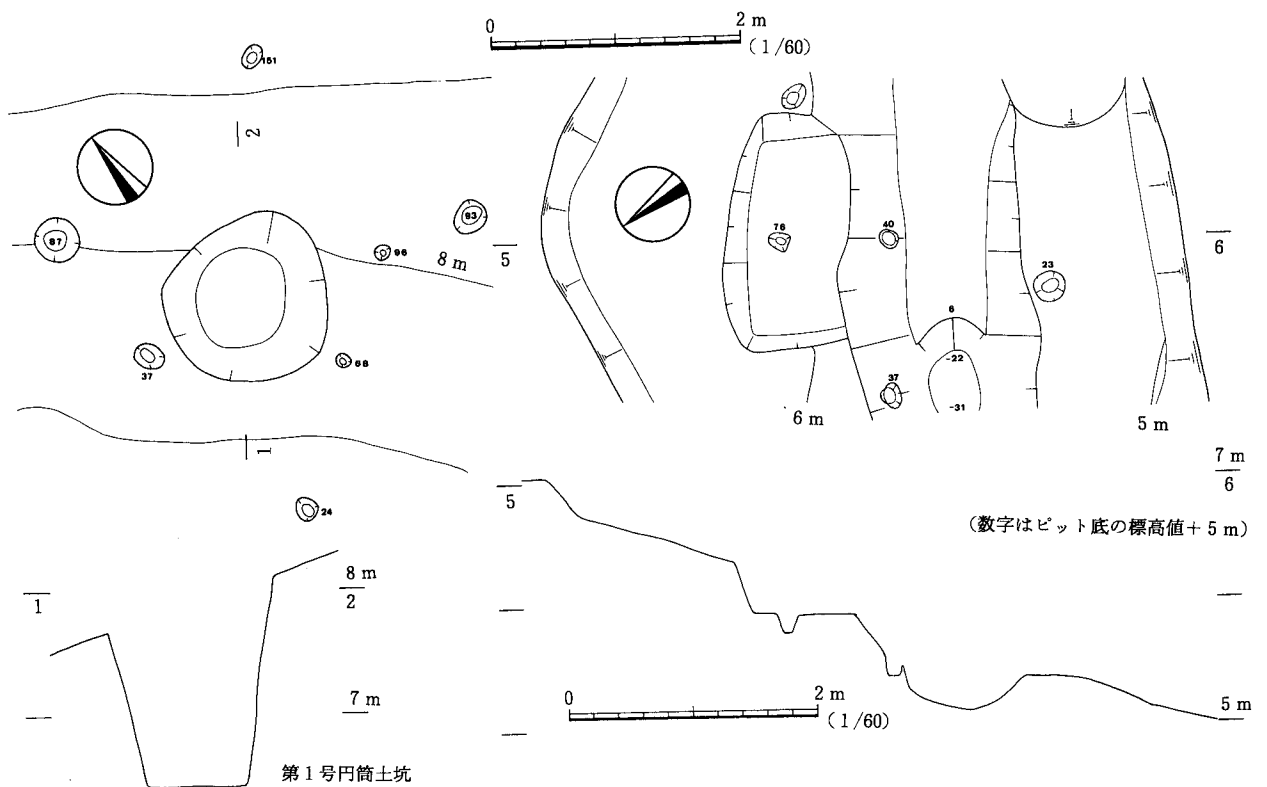
第19図 垣吉フクベ山遺跡出土遺物(1)



第20図 第4号・5号住居実測図



(数字はピット底の標高値+15m)



(数字はピット底の標高値+5m)

第21図 第6号住居・土坑実測図

を多く含む。

第4号住居跡（第20図、写真62）

丘陵尾根からの平坦面から斜面に変わる地点であり、前方部の先端から約1m西側に位置する。標高は13.5～14.8mである。竪穴式住居であり、西側と南側は存在しない。掘り方と壁溝は南北方向に（5.4）mが確認された。北側には深さ10cmの鍵状の溝が存在した。床面の標高は14mであり、支柱穴は深さ50cmであるが、ほかは深さ10cmのピットである。90×74cm、深さ40cmの土坑も存在し、焼土ブロックが少量出土した。第19図12～15が出土した（写真68）。12は胴部径17cmの破片であり、内面に粘土の被せがある。色調はくすんだ黄橙色であり、胎土には0.5mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。13は受部が球形となる大型高坏である。口唇部に幅広の面を持つ。内面はやや剝離しているが、内外面との赤彩する。色調は黄橙色であり、胎土には0.5～1mm大の砂粒と海綿骨針を少量含む。口径28.4cm、受部径19.8cmである。14は底径3.6cmであり、底面が若干凹む。くすんだ黄橙色であり、胎土には0.5～1mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。15は凹底であり、底径5.2cm、深さ3mmである。ハケ調整のち底面を調整したために、一部体部側に粘土がはみ出ている。

第5号住居跡（第20図、写真63）

丘陵の尾根上に立地し、後方部北側から以北に位置する。標高は16.3～17mである。壁溝は墳丘下に位置した南側のみ存在し、東西方向（7.2）m、深さ5～20cmである。4本支柱であり、柱間は東西方向4.7m、南北方向4.1mと3.4mである。第23図22～24が出土した（写真68）。22はやや外傾する頸部で口縁部を上方に伸ばした長頸壺である。色調は黄白色であり、1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。23は有段部に稜を持つ甕であり、口径14.8cm、頸部径11.8cmである。24は有段擬凹線を持つ甕である。擬凹線は最下以外は細くて浅い。破片が墳丘盛土内から出土した。

第6号住居跡（第21図、写真61）

頂上より少し下がった西斜面で古墳のくびれ部付近に位置する。標高は15.5～16.9mである。竪穴式住居であり、床面の標高は16.6mであったと思われる。周溝と近世以降と思われる遺構により壊されているが、東側に掘り方（4.2m）と壁溝（3m）が存在した。前方部に支柱穴と思われるピットが3個存在し、4本支柱と思われる。柱間は南北方向2.3m、東西方向3.6mである。第23図25は壺の口縁部と思われる。有段口縁であり、口径18.8cmである。

第7号住居跡（第17図、写真57）

古墳の前方部右側に位置し、第1号住居跡と前方部周溝の間に存在する。標高は15.3～15.7mである。竪穴式住居か掘立柱建物であるかは不明であり、第1号住居跡との前後関係も不明である。立て替えが想定される。柱穴から遺物は出土していない。柱間は東西方向3m、2.8mと2.6m、南北方向2.1mである。床面積は6.3㎡である。

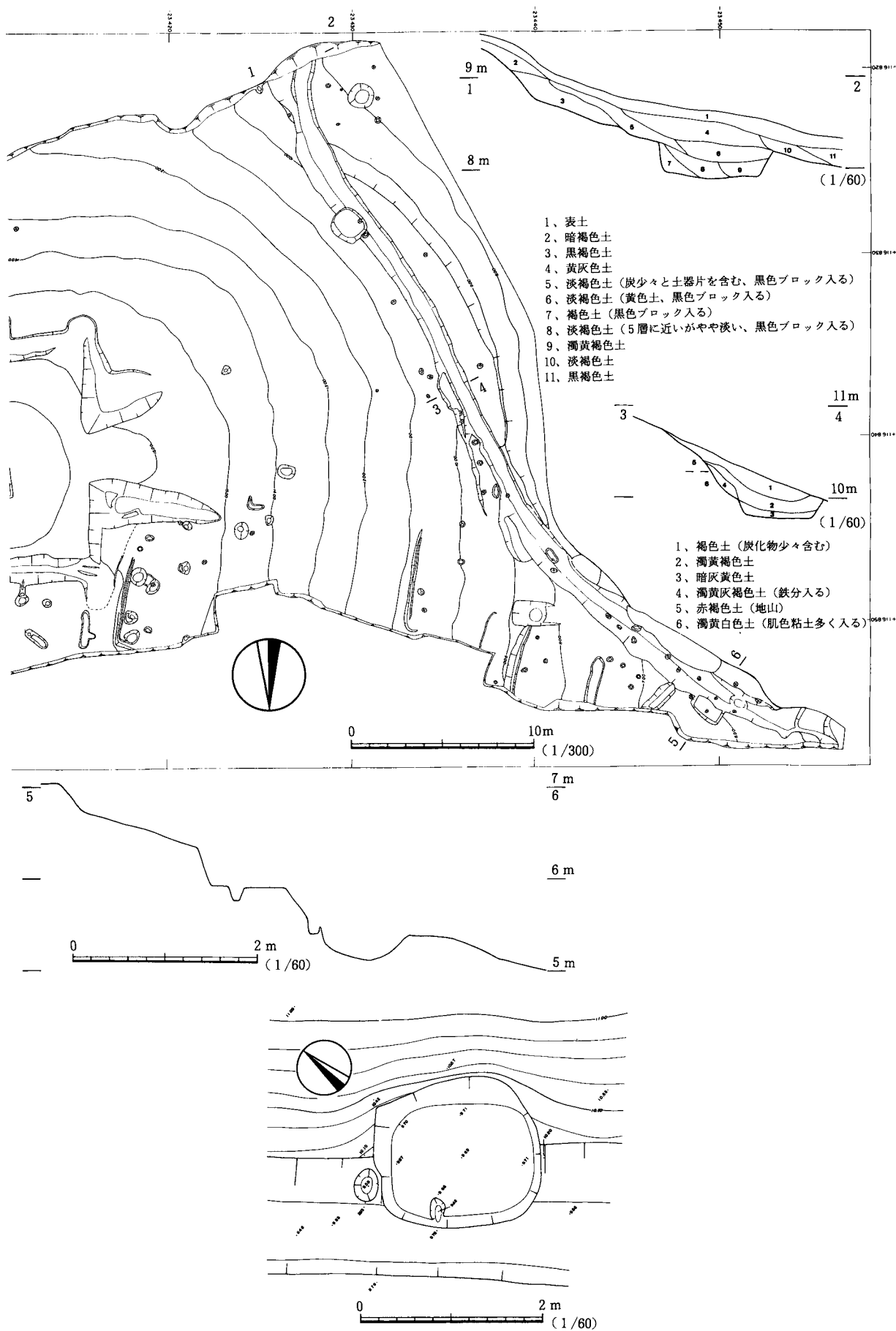
3. 土坑

第1号円筒土坑（第21図、写真67）

丘陵西斜面南側の下側に位置し、西斜面のなかでは傾斜がやや緩い地点である。標高は7.6～8.2mである。平面形は不整形であり、上場1.2～1.4m、下場70～80cm、深さ1.7mである。床面は平坦であり、溝などは巡らない。周辺には深さが10～40cmのピットが存在した。遺物は出土していないが、海綿の化石が出土した。

第2号円筒土坑（第18図、写真67）

丘陵西斜面北側の下側に位置し、緩いテラス状になっている地点に立地する。第3号住居の南側に位置し、標高8～9mである。長方形の上段部分と円筒形の下段部分に分かれる。上段は長さ3.6m、幅



第22図 環壕状遺構・木炭窯

1.3m、深さ0.8～1mであり、覆土は茶褐色土で土器がまとまって出土した。下段は上場直径1.3m、下場直径70cm、深さ92cmである。第23図27～29が出土した（写真69）。27は有段口縁を持つ壺であり、接合しなかったが肩部破片がある。外面に一部赤彩痕がある。ハケのちナデ調整である。口径19cm、頸部径11.6cmである。胎土には1～2mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。色調は肌色である。28はくの字甕である。口径20cm、頸部径15.6cm、胴部径27.2cmである。頸部を強くナデてやや丸く仕上げている。胎土には2～4mm大の砂粒を非常に多く含み、シャーモットと海綿骨針を含む。色調は体部灰褐色、胴部浅い黄褐色である。29は縄文土器の浅鉢ないし波状口縁の深鉢のどちらかと思われる。胎土には1mm大の砂粒を多く含む。色調は外面くすんだ淡褐色、内面暗褐色である。

第1号土坑（第21図、写真64）

丘陵西斜面の裾に位置し、第3号溝の西側に存在する。環壕状遺構に切られているが、長方形であったと思われる。長さ1.9m、幅（1）m、深さ40cmである。覆土は茶褐色土である。

4. その他の遺構

第1号溝（第17図、写真56）

丘陵尾根より少し下がった位置であり、第1号住居跡の上方約1.7mに位置する。くびれ部の周溝が北側に一部張りだした地点の横にあたり、古墳の周溝先端とは20cmしか離れていないので垣吉B22号墳に伴う可能性が高い。長さ2.1m、幅40～50cm、深さ14cmの溝であり、下側に約30cm短い溝が続く。北側に土器がまとまって出土した。第19図1・2が出土した（写真68）。1は壺であり、底径7.4cm、胴部径25.2cmである。球形の胴部を持ち、ハケ調整であるが、胴部上半にはケズリ調整がなされる。2はくの字甕であり、胴部下半側に最大径がある。口縁部は短く、先端を丸く仕上げている。ハケ調整であるが、4箇所ほど砂粒が動いた痕（ケズリ風な痕跡）がある。胎土には2～3mm大の砂粒を非常に多く含む。色調はくすんだ淡赤褐色である。

第2号溝（第22図、写真64）

第3号住居跡の西側に位置し、標高は7.4～7.7mである。長さ（2.6）m、幅70cm、深さ27cmである。覆土は茶褐色土であり、弥生土器が少量出土した。環壕状遺構との関係は不明である。

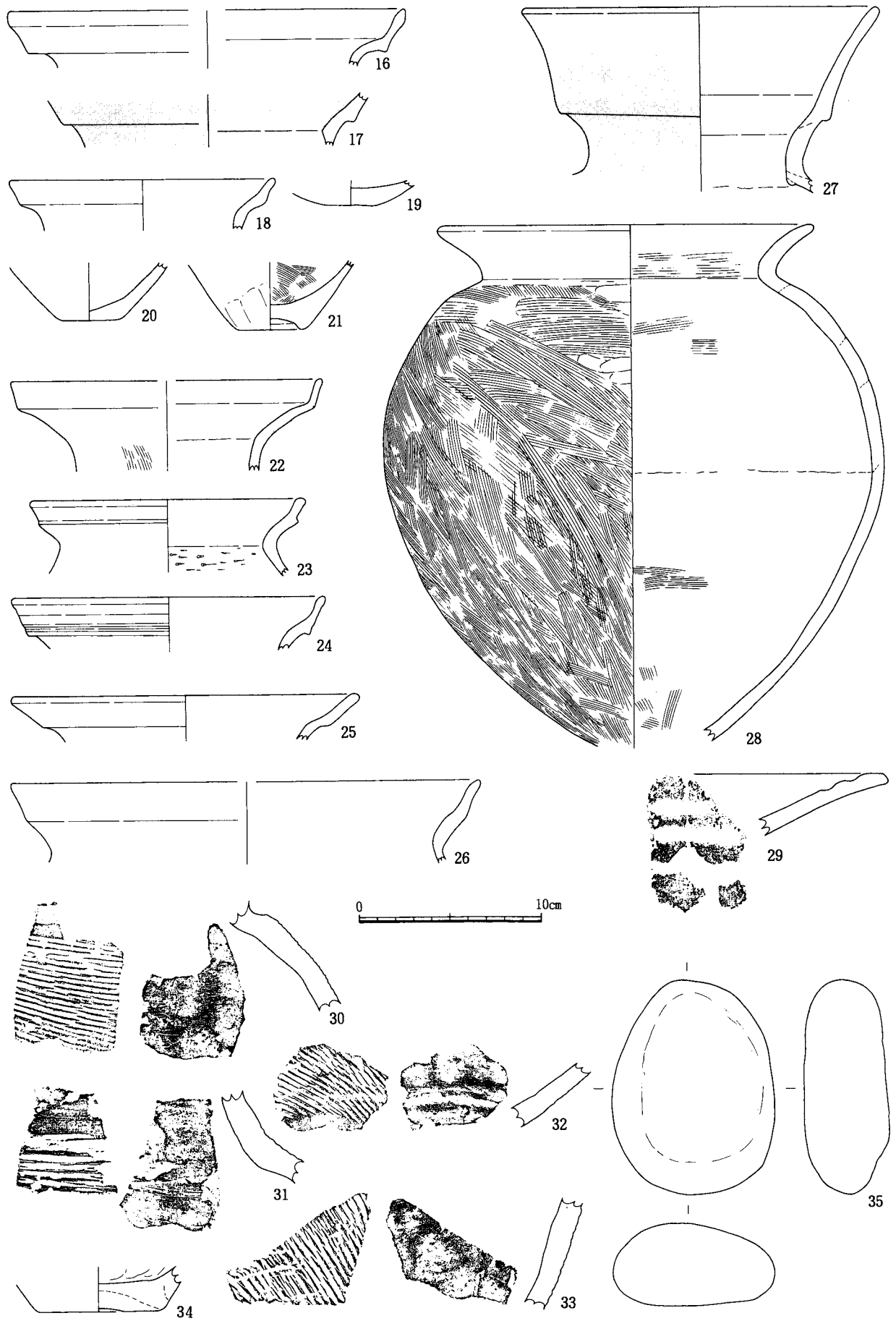
第3号溝（第22図、写真64）

第2号溝の西側に位置し、標高は6.5～7mである。長さ（2.2）m、幅80cm、深さ30cmである。覆土は茶褐色土であり、弥生土器が少量出土した。環壕状遺構との関係は不明である。

環壕状遺構（第22図、写真65・66）

丘陵西斜面の裾を縫うように巡っている。中央部の3～4ラインから木炭窯付近まではやや平坦であるが、両端にかけて低くなっている。北端は標高4.8（床面3.8m）、中央部は10.2m（9.5m）、南側は9m（7.9m）である。幅は1.3m前後であり、広い部分は1.7m前後である。第2号円筒土坑から南側では上側に0.7～1.3mほど広がるようである。床面は平坦であり、幅0.6～1.1mであり、北側には1.4×0.5m、深さ40cmの土坑を持つ。第2号円筒土坑の南側では上側に、北西側ではのり面と床面に深さ10～30cmのピットが存在する。遺物は上面から珠洲焼が出土し、覆土中や底からは弥生土器の破片が出土したが、構築時期を決定できるかどうかは不明である。

第23図30～35が出土した（写真69）。30～33は拡張区（第2号円筒土坑より西側）で出土した珠洲焼である。30は上層出土である。甕の肩部であり、頸部の近くまで叩きが入る。胎土には砂粒を殆ど含まず、黒色粒子が見られる。内面の押さえは親指によると思われる。色調は灰白色である。31は先端上層出土である。甕の体部片である。外面は叩き後下端にヨコナデが入る。内面の押さえは親指によるものと思われる。胎土には3mm大の砂粒が2個入っているが、しまった感じである。外面は暗灰色であり、内面



第23図 垣吉フクベ山遺跡出土遺物(2)

はくすんだ灰色である。31は中央北側出土であり、甕の肩部である。胎土には砂粒を微量含み、黒色粒子を含む。色調は暗灰白色であり、焼きはややあまい。32は甕の体部片である。33は北端出土である。甕の体部片である。34は弥生土器の底部であり、底径6.6cmである。

木炭窯（第22図、写真67）

丘陵西斜面の南西方面に位置し、標高9.7～10.5mである。草刈りを実施した段階で平坦面が確認され、環壕状遺構を切っていた。ほぼ等高線に平行して築かれており、北西側に煙り出しが存在した。隅円方形であり、長さ1.8m、幅1.7m、深さ約80cmである。覆土は炭を多量に含んだ褐色土であり、遺物は出土しなかった。

5. 包含層出土遺物

25は丘陵斜面出土である。甕の口縁部であるが、表面が剝離している。口径25.6cm、頸部径21.6cm wを測る大型甕と思われる（写真68）。



写真55 住居跡群全景

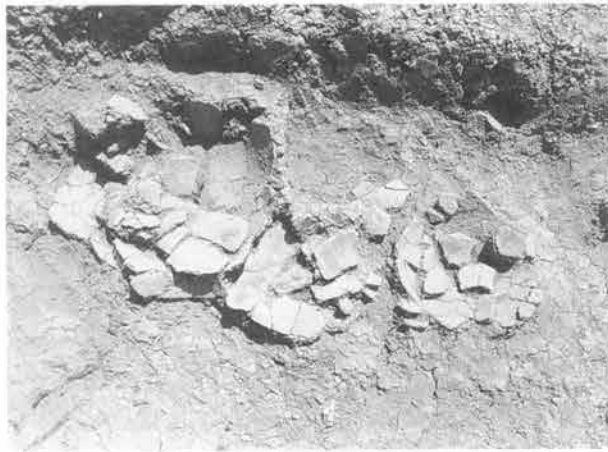


写真56 第1号溝・第1号住居跡



写真57 第7号住居跡



写真58 第2号住居跡



写真59 第2号住居跡土器出土状況



写真60 第3号住居跡



写真61 第6号住居跡



写真62 第4号住居跡（調査前・調査後）



写真63 第5号住居跡



写真64 その他の遺構（溝・土坑）



写真65 環壕状遺構



写真66 環塚状遺構（細部）

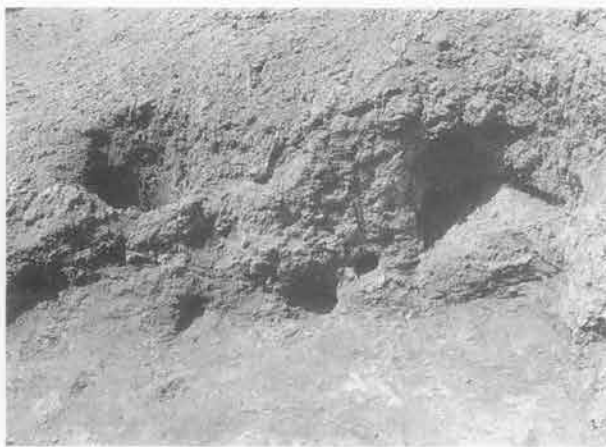


写真67 その他の遺構（円筒土坑・木炭窯）



写真68 垣吉フクベ山遺跡出土遺物(1)

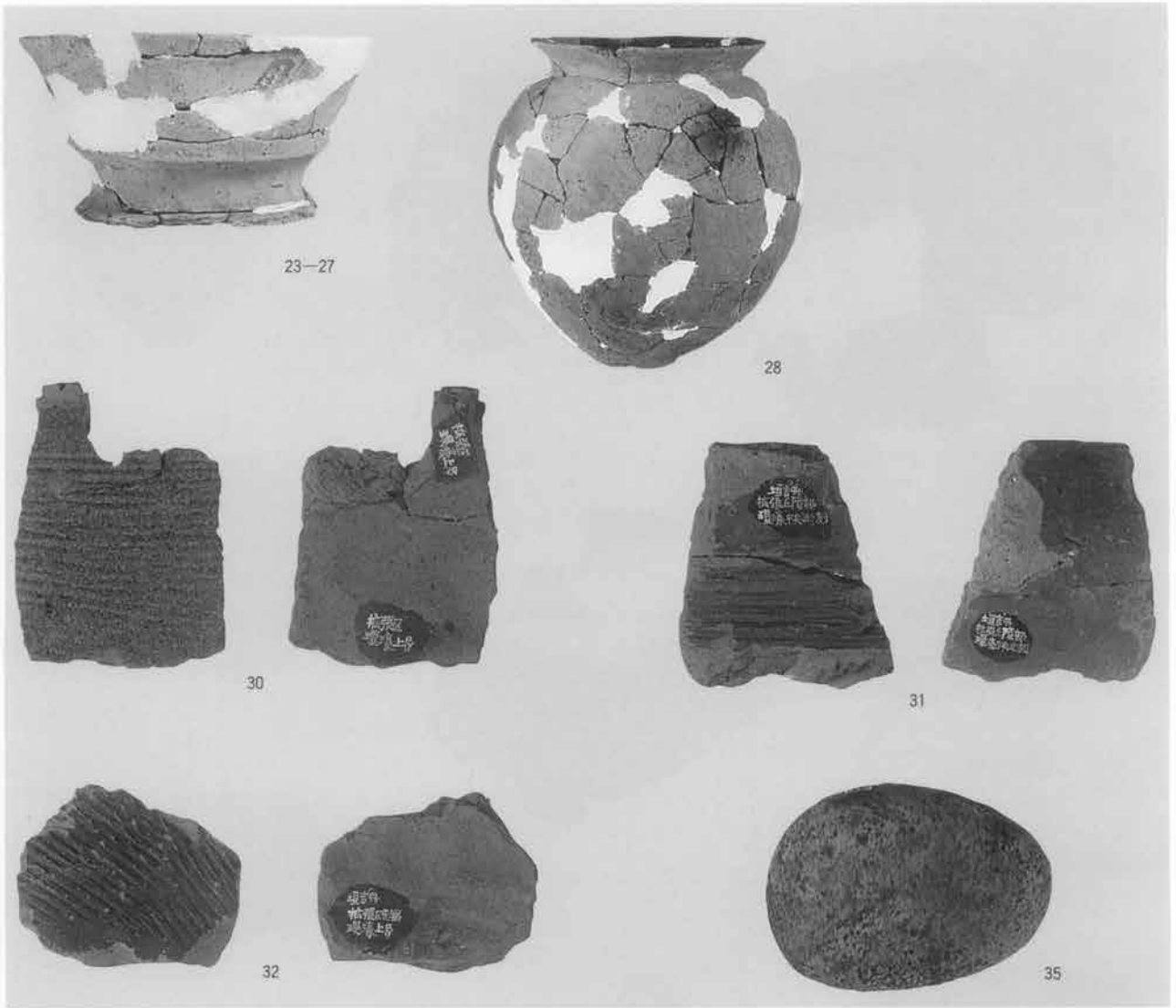


写真69 垣吉フクベ山遺跡出土遺物(2)

第4節 垣吉B22号墳

1. 現況

二宮川沿いに延びる小丘陵の先端部分に位置する（第5図）。垣吉B22号墳はこの先端部分の中央部からやや南側に立地する。丘陵の頂上部の標高は約17.5mであり、水田の標高は約2.5～2.7mであり、比高差は約10mを測る。北側斜面と東側斜面の下側はほ場整備事業に伴う工事で削られており、急傾斜となっている。この丘陵は所有者が戦後に開墾して畑地として利用していた。その後杉を植林したまま放置されていた。過去の踏査により直径約13m、高さ約1.5mの円墳とされていたが、下草刈り作業が行なわれた際に西側に前方部状の微隆起が認められた。また北側に続く尾根にも前方部状の張り出しのような部分が認められた。現況図（第24図上）の測量範囲を境にし、以下はやや傾斜がきつくなっている。西側では平坦面が北西側（8×8m）と南西側（7×7m）に存在する。西側平坦面の等高線の間隔（25cm）は1mあり、傾斜が緩くなっている。北側では等高線の間隔が3～5mあり、傾斜が殆どない。南側の15.5～16mラインは間隔がやや広く、幅2m程度の平坦面を持っており、以南は急激に落ちていた。

2. 墳丘

前方部側は先端が不明確であったが、全長17.5m（後方部周溝を含めると18.5m）である。古墳の主軸方位はE-3°-Nである。後方部は長さ11.5m、幅東側11mであるが、西側はやや広く12mである。高さは東側周溝底から2m、周溝上端から1mである。北側は周溝底から1.4m、周溝上端から0.6mである。南側は周溝底から2.1m、周溝上端から1.5mである。くびれ部は周溝底から北側2.2m、南側2.45mである。周溝は南側と南西側を深くしていることや後方部の西側の幅がやや広いことから、西側と南西側を意識して古墳は築かれたものと思われる。前方部は先端に溝が確認できなかったため、前方部北側の周溝先端までの長さはくびれ部周溝底から6m、くびれ部周溝上端から7mである。高さはくびれ部側では北側1m、南側1.3mである。前方部先端の幅は約8.5mと推定される。

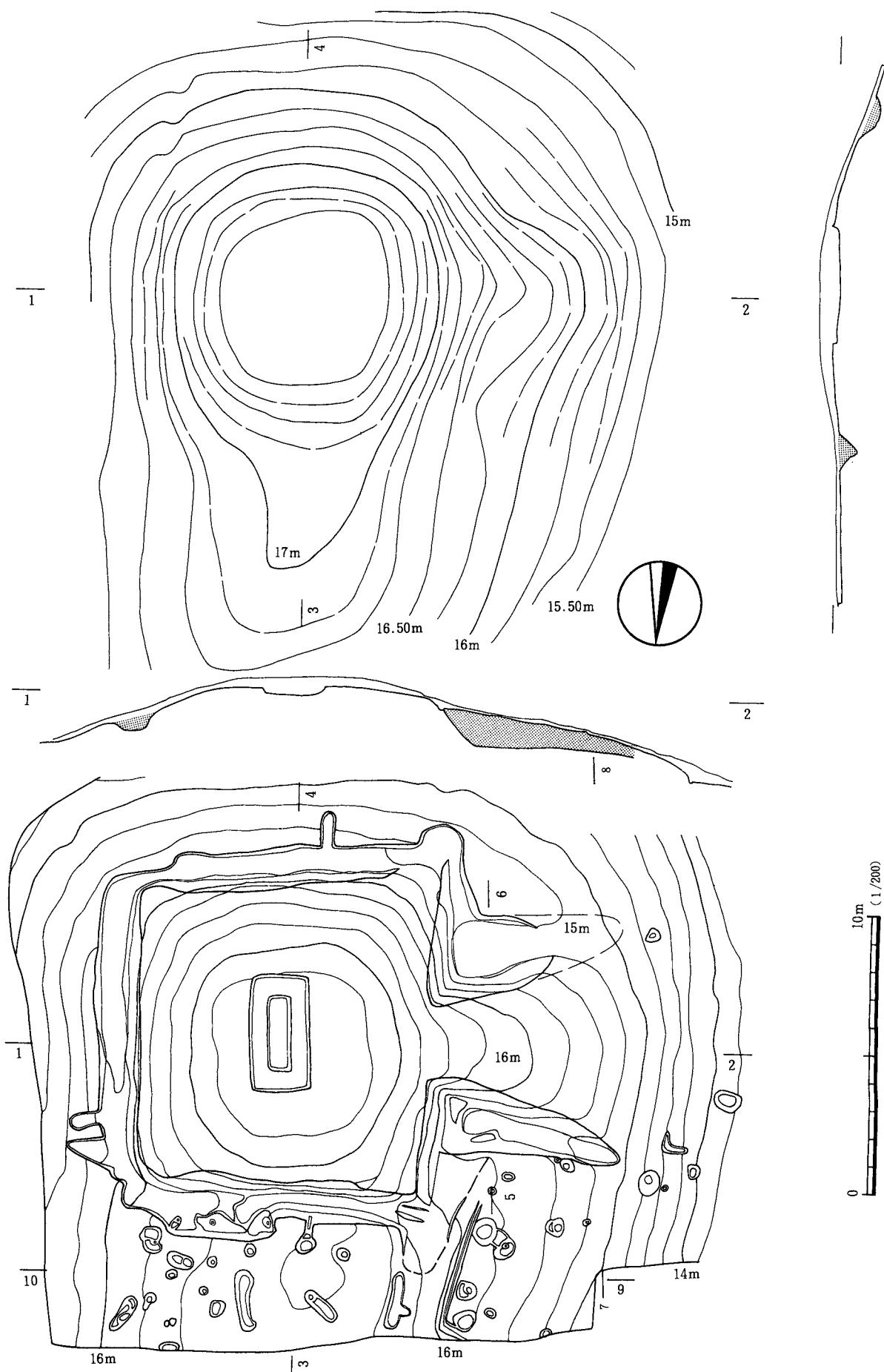
表土と流土内には多数の土器と焼土塊が存在し（第26図）、後方部東側と南西側に集中箇所が認められた。ほとんどが弥生時代後期の集落に伴う遺物と思われ、古墳に伴う土器はくびれ部南側に存在する一群（第27図）である。ほかに第1号溝は古墳に伴う可能性もあり、また前方部北側の周溝では須恵器の口縁部が1点（第29図5）出土している。

3. 盛土

周溝はほぼ完全に埋まっていたが、北側以外は少し痕跡が確認できた（写真71～74参照）。後方部では明確な盛土が存在し、中心部ほど厚く、周溝側では薄くなる。表土と流土を合わせた盛土の厚さは後方部北側では20～50cm、南側では15～50cm、東側では20～35cm、西側では20～40cmである。後方部中心にかけて厚く残っていた。表土と流土を取り除いた状態（第24図下段）では南側の等高線がやや中心に寄っているが墳丘の流失が南側では著しかったためであろう（地形的にも傾斜が強い）。前方部側では5～20cmの表土と流土しか存在せず、明確な盛土は確認できなかった。

4. 周溝

後方部東側周溝は幅1.3～1.5mであり、ほぼ一直線に掘られている。北西コーナーは葛の根（直径10cmが）数本存在したためか、やや形が歪であり、舌状の張り出しを2つ持つ。主軸ラインから南西コーナーにかけて一番深く（標高15.51m）になっており、北東コーナー付近は浅く（標高15.79m、15.91m）になっている。北側周溝はやや北側がやや不整形であり、南側もやや中心部側に約40cm程度食い込んでいる部分もある。幅は1.2～2.45mであり、一番幅の広いところでは北東側ではテラスを持つ。主体部の主



第24图 垣吉B22号填实测图

垣吉 B 2 2 号墳セクション層位 (南面・西面、第25図1～4ライン)

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 表土 | 31 褐色土 |
| 2 暗灰色土 (b やや淡い c やや黄色い) | 32 淡褐色土 |
| 3 暗灰色土 (2 より黒く、しまる) | 33 明褐色土 (やや肌色入る、焼土粒子を含む) |
| 4 赤黄褐色粘質土 (しまり良く、黒い濁りあり) | 34 暗灰色土 |
| 5 濁黄褐色粘質土 (黄色粒子を含む) | 35 黒褐色土 (黒が強くない) |
| 6 暗灰色土 (攪乱か) | 36 淡褐色土 |
| 7 暗黄褐色粘質土 | 37 褐色土 |
| 8 濁黄褐色粘質土 (5 に近い) | 38 暗褐色土 |
| 9 濁黒褐色土 (炭粒子含む、旧表土か) | 39 暗灰色土 (34 より黒い) |
| 10 黒褐色土 | 40 褐色土 (37 に近い) |
| 11 明褐色土 | 41 (黄) 褐色土 (ブロックか) |
| 12 淡褐色土 | 42 濁褐色土 (黄褐色粒子含む) |
| 13 明 (黄) 褐色土 (炭少々含む) | 43 濁黒褐色土 (黄褐色粒子含む) |
| 14 暗黄褐色土 | 44 濁暗褐色土 (黒色・黄褐色粒子含む) |
| 15 濁褐色土 | 45 濁褐色土 |
| 16 濁黒褐色土 | 46 濁褐色土 |
| 17 褐色土 | (黄色粒子を少々、黒色粒子を多量に含む) |
| 18 混黄褐色土 | 47 明褐色土 |
| 19 濁黄褐色土 (白色砂岩の粒子を含む) | 48 赤黄褐色土 |
| 20 濁茶褐色土 (地山か) | 49 墳丘盛土 |
| 21 淡黄褐色土 | 50 褐色土 (やや暗い) |
| 22 褐色土 | 51 濁褐色土 (炭粒子をやや多く含む) |
| 23 明褐色土 | 52 褐色土 (炭粒子を少々含む) |
| 24 淡褐色土 | 53 濁灰黄色土 |
| 25 淡褐色土 (24 より黄色強い) | 54 暗褐色土 |
| 26 濁 (黄) 褐色土 b やや黒い | 55 第6号住居覆土 |
| 27 濁黄褐色土 (白色粒子を多く含む) | |
| 28 濁黄褐色土 (黄色粒子を多く含む) | |
| 29 濁黄白褐色土 (白色粒子を多く含む) | |
| 30 淡黄褐色土 (黄色粒子を少々含む) | |

垣吉 B 2 2 号墳くびれ部セクション層位 (西面、第25図5～6ライン)

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 表土 | 11 黄灰色土 (白色粒子含む) |
| 2 淡灰色土 | 12 濁黄灰色土 |
| 3 黒褐色土 | 13 黄褐色土 (やや肌色入る) |
| 4 濁褐色土 (黄褐色粒子を含む) | 14 淡黄灰色土 (白色粒子多く含む) |
| 5 暗褐色土 (黄褐色粒子を少々含む) | 15 黒褐色土 (しまりなく、焼土を含む) |
| 6 暗褐色土 | 16 暗褐色土 (黄褐色土) |
| (5 より黒い、黄褐色粒子を微量含む) | 17 濁褐色土 (黄褐色粒子を多く含む) |
| 7 淡黒褐色土 | 18 淡褐色土 |
| 8 褐色土 | 19 淡褐色土 |
| 9 淡褐色土 (黄褐色がやや強い) | 20 濁黄褐色土 (褐色が入る) |
| 10 褐色土 (8 と同じか) | 21 濁灰褐色土 (黄色が強い) |

垣吉 B 2 2 号墳前方部南北セクション層位 (西面、第25図7～8ライン)

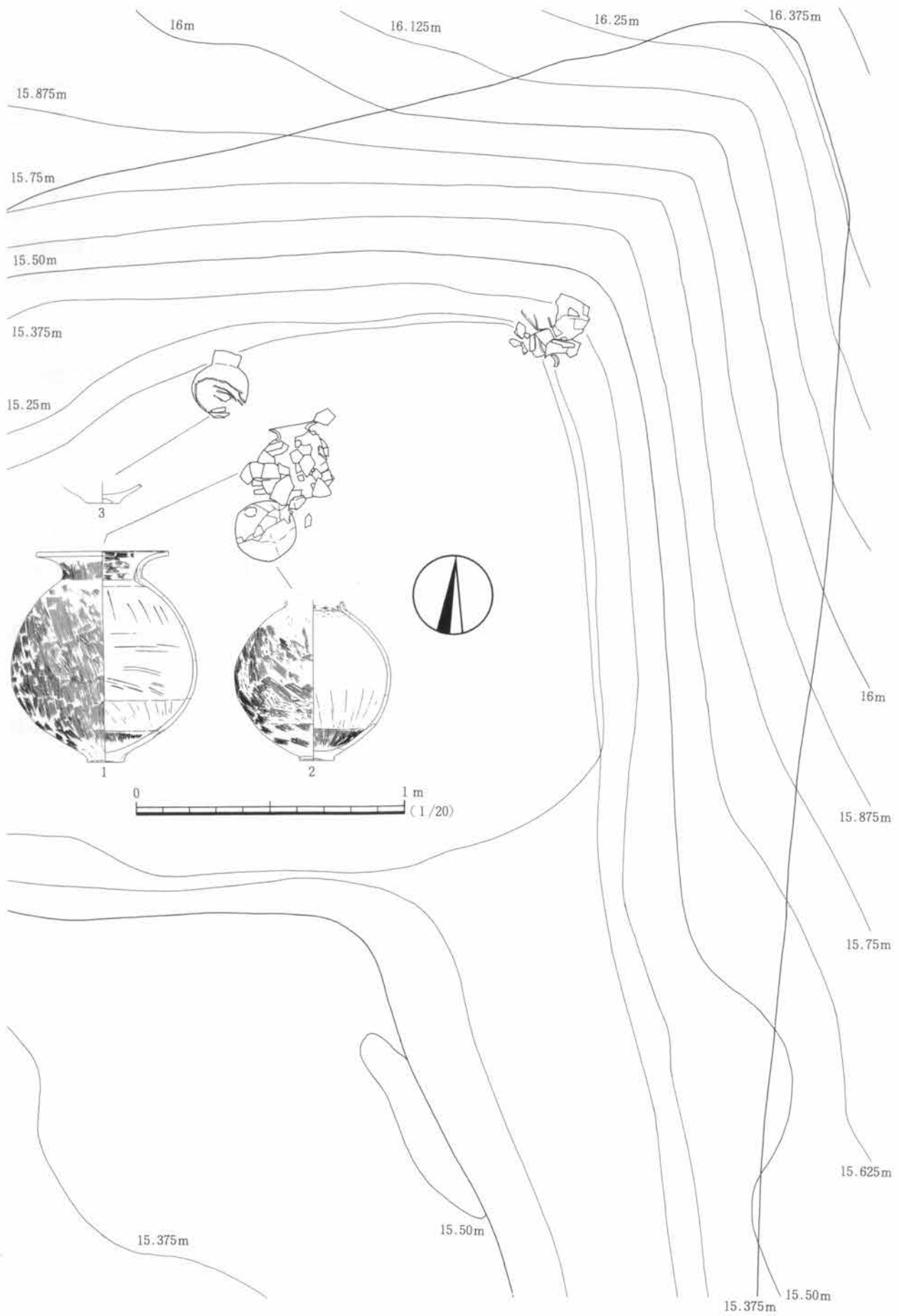
- | | |
|-------------------|------------------------------|
| 1 表土 | 6 (暗) 褐色土 (やや暗く、炭・黄褐色粒子少々含む) |
| 2 灰褐色土 (やや赤褐色入る) | 7 明褐色土 (黄褐色粒子多く、炭少々含む) |
| 3 暗灰褐色土 | 8 淡褐色土 |
| 4 明灰褐色土 (やや赤色入る) | 9 濁黄褐色土 |
| 5 褐色土 (赤褐色粒子少々含む) | 10 黄褐色土 (少し暗い) |

古墳丘陵東西断面層位 (南面、第25図9～10ライン)

- | | |
|---------|---------|
| 1 表土 | 4 濁暗褐色土 |
| 2 暗褐色土 | 5 暗灰色土 |
| 3 濁暗褐色土 | |



第26図 古墳出土遺物分布図



第27図 くびれ部土器出土状況

軸ラインよりやや西側には長さ1.2mの舌状の張り出しを持つ。深さは50~70cmであり、中央部が一番深い。北西コーナーでは北側に1.6m張り出している。南側周溝は南東コーナー部分はやや狭くなっているが、ほぼ一直線に延びている。周溝底の標高差は約20cmと少なく、南東コーナーから南西コーナーにかけて若干低くなっている。北側周溝とほぼ同じ地点に舌状の張り出し(1.1m)を持つ。南西コーナー部分は検出時を含めて周溝の形がやや不明確であったが、北西コーナー部分と同様に張り出し部(70cm)を持つ。前方部は先端側に向かうほど周溝の掘り方が不明確になっていった。特に南側周溝は木の根などにより判断が難しかった。しかし第25図7~8ラインでは北側周溝は幅1.1m、南側周溝は幅1.5mが存在した。南側周溝のくびれ部からは4個体の土器が出土し、上から流れ落ちた状況が伺えた。コーナー部分の2個体は風化が著しく、取り上げたが復元・図化は不可能であった。図化出来た個体全て壺であり、前方部側の周溝底から5cm程度底から浮いた状態で出土した。第29図1は墳丘側に口縁部を向け横たわっており、胴部の一部が下側に落ち込んでいた。2は頸部以上を欠いており、口縁部を下にしていた。胴部はほぼ崩れずに残っており、口縁部は墳丘の外側に向いていた。3は墳丘側に口縁部を向けており、胴部は下側に崩れていた。

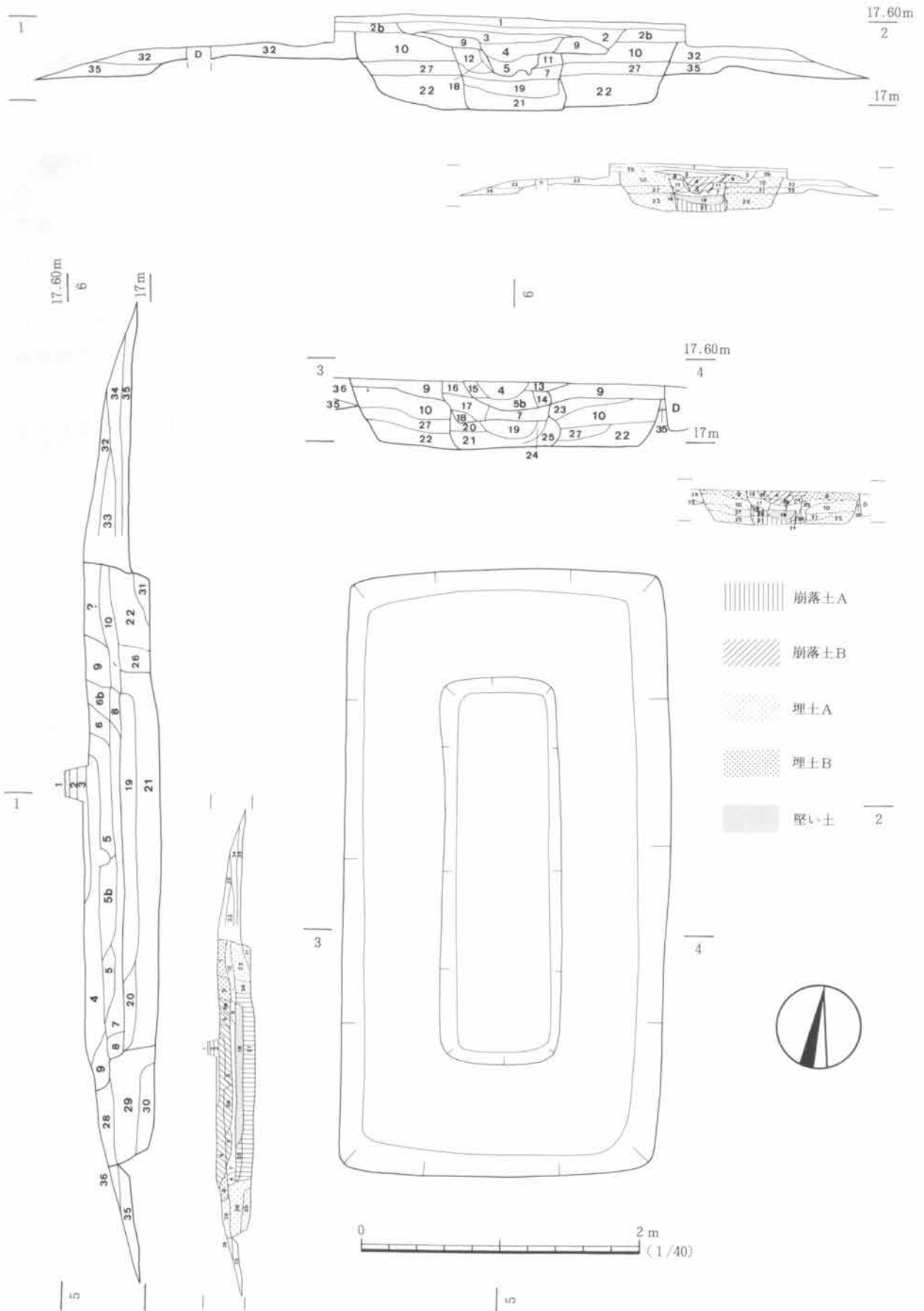
5. 主体部

後方部のはほぼ中央に位置し、古墳の主軸方向にはほぼ直角に造られていた。主体部の主軸方位はN-7°-Wである。隅がやや円いが、長方形の掘り方を持つ。長軸4.34m、短軸2.34mであり、棺設置場所の深さは表土から68cmである。掘り方の床面は棺の北側は8cm、南側は4cmほど棺底より浅くなっている。主体部は長さ2.68m、幅66cm、高さ40cmの木棺と想定され、直接埋葬されたものと思われる。主体部中には第29図4の破片が点在していたが、他には遺物や赤彩の痕跡などは確認されなかった。

掘り下げ途中に堅い面(表土から40cm下、19層)が存在したので棺底と思い、セクションを取り外して写真撮影を行なった(写真88上段)。しかし断ち割りを入れる(写真94)と、棺底が別にあることが判明した。また盛土を取り外していく途中に疑問を持ち、セクションを観察し直すと掘り方は検出したより(写真96最下段右側)は実際は大きかった。層位は検出時に黒色系の落ち込み(崩落土B)が存在し、棺の位置がほぼ特定できた(写真93)。埋土B(10・22・23・26~31層)は棺の裏込めと思われ、埋土A(9層)は棺の被覆土と思われる。掘り下げ途中に堅い面(19層、棺上の盛土か)が存在し、その下にはしまりのない土(21層、崩落土A)が存在した。21層は棺が腐食した間に落ち込んだ土と思われた。

6. 古墳出土土器

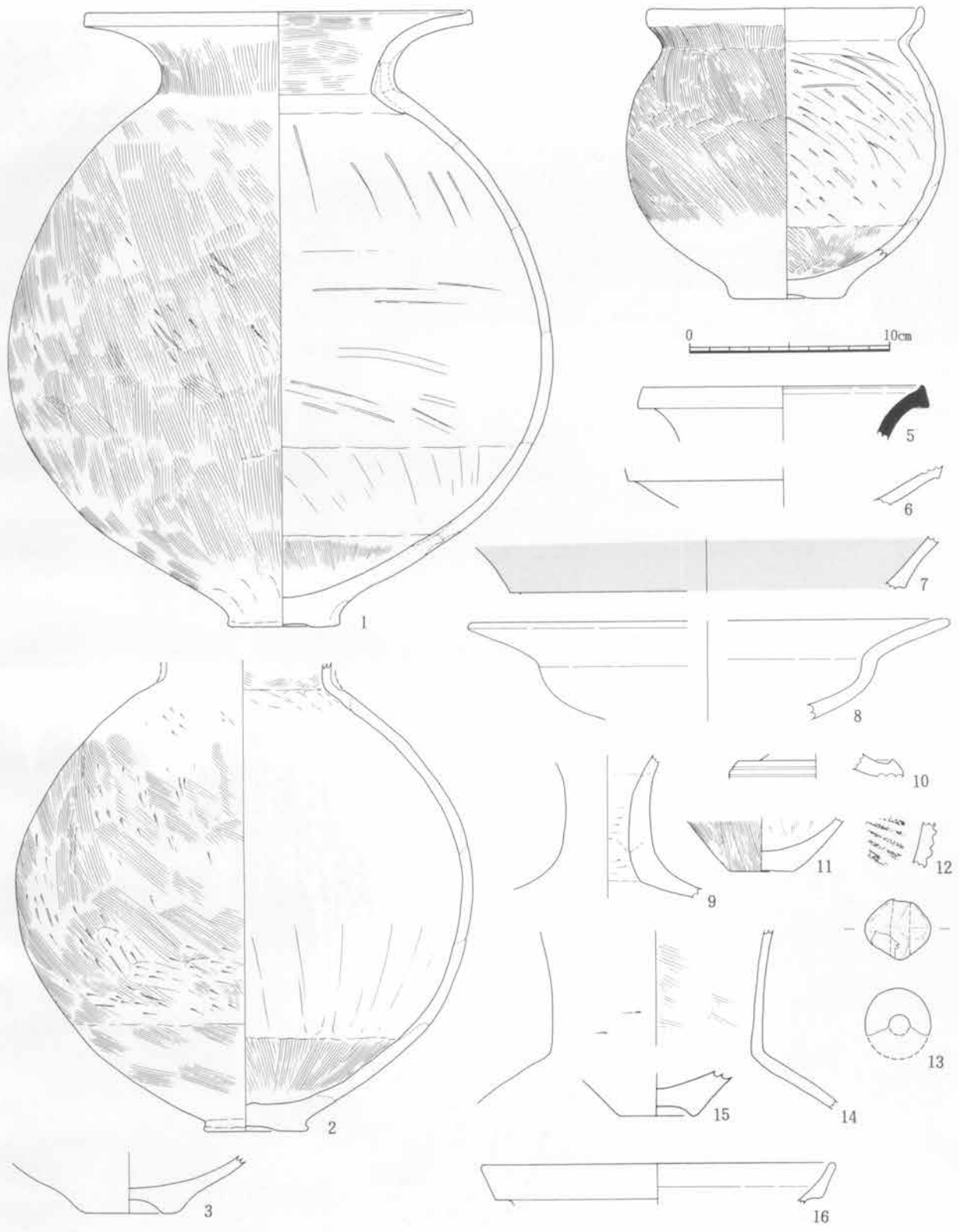
第29図1はくびれ部出土土器No.2である。口唇部内面を若干上に引き出している。ハケ調整の際に砂粒が動いた痕があり、ケズリ調整の痕跡のように見える。底部は若干凹む。口径19.6cm、頸部径11.8cm、胴部径27.9cm、底部径5.6cm、器高31.7cmである。胎土には1~3mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。色調は黄褐色である。2はくびれ部出土土器No.1である。壺であり、頸部より上を欠いている。ハケ調整の際に砂粒が動いてケズリ調整のような痕跡を持つ。底部は平底であり、やや凹む。頸部径(9)cm、胴部径23.4cm、底部径5.4cmである。胎土には1~2mm大の砂粒と海綿骨針を非常に多く含む。色調は黄褐色であり、胴部中央に黒斑がある。3はくびれ部出土土器No.12の底部である。壺は非常にもろかったために図化には至らなかったが、1と同じような壺と思われる(写真101-3参照)。大きく凹む底部であり、底径4.8cm、深さ6mmである。胎土には1~3mm大の砂粒と海綿骨針を非常に多く含む。色調は黄褐色であり、体部側に黒斑がある。4は破片1点以外は主体部内から出土した。受口状口縁を持つ甕であり、口径13.6cm、頸部径12.4cm、胴部径16cm、底径5.6cm、器高14.9cmである。底部は平底であり、中央部がやや凹む。底部付近は赤化しており、胴部にはススが附着する。外面はハケ調整であり、口縁部をヨコナデしてハケを消している。内面は体部下半ハケ調整、胴部はケズリ調整である。胎土には0.5~2mm大の砂粒を多く含



第28図 主体部実測図

む。海綿骨針を少量含む。色調は黄褐色である。くびれ部出土土器は古墳時代前期前半と思われる。

5～13は古墳表土出土である。5は前方部周溝上の表土から出土した須恵器である。生焼けぎみの須恵器であり、色調は淡茶褐色である。砂粒を殆ど含まないが、海綿骨針を微量含む。6は高坏・器台の受部と思われる。全体に荒れており、色調は赤橙色である。7は大型高坏の口縁部側である。内外面に赤彩痕がある。色調は黄橙色である。8は受部が球形の高坏である。口径24.2cm、受部径17cmである。内外面に赤彩された痕跡がある。胎土には0.5～1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。9は器台・高坏の脚部である。色調は赤橙色であり、胎土にはシャーモットを多く含む。10は器台の脚部であり、1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。色調は浅い赤橙色である。11は底部であり、底径3.4cmである。胎土には1～2mm大の砂粒を多く含む。12は縄文土器であり、外面にススが付着する。幅5mmの半截竹管で渦巻状文を描くと思われ、時期は前期後葉の福浦上層Ⅱ式と思われる。13は球状土錘であり、時期は弥生時代後期後半と思われる。1/3が欠けており、長さ31mm、幅33mm、孔径9mm、重量(12)gである。14・16は盛土内出土土器である。14は長頸壺であり、頸部径10.8cmである。胎土には0.5～1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。色調は淡黄褐色である。16は有段口縁である。口径18cmであり、色調は黄橙色であり、胎土には1mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。



第29図 古墳出土遺物



写真70 垣吉B22号墳調査前



写真71 前方部全景

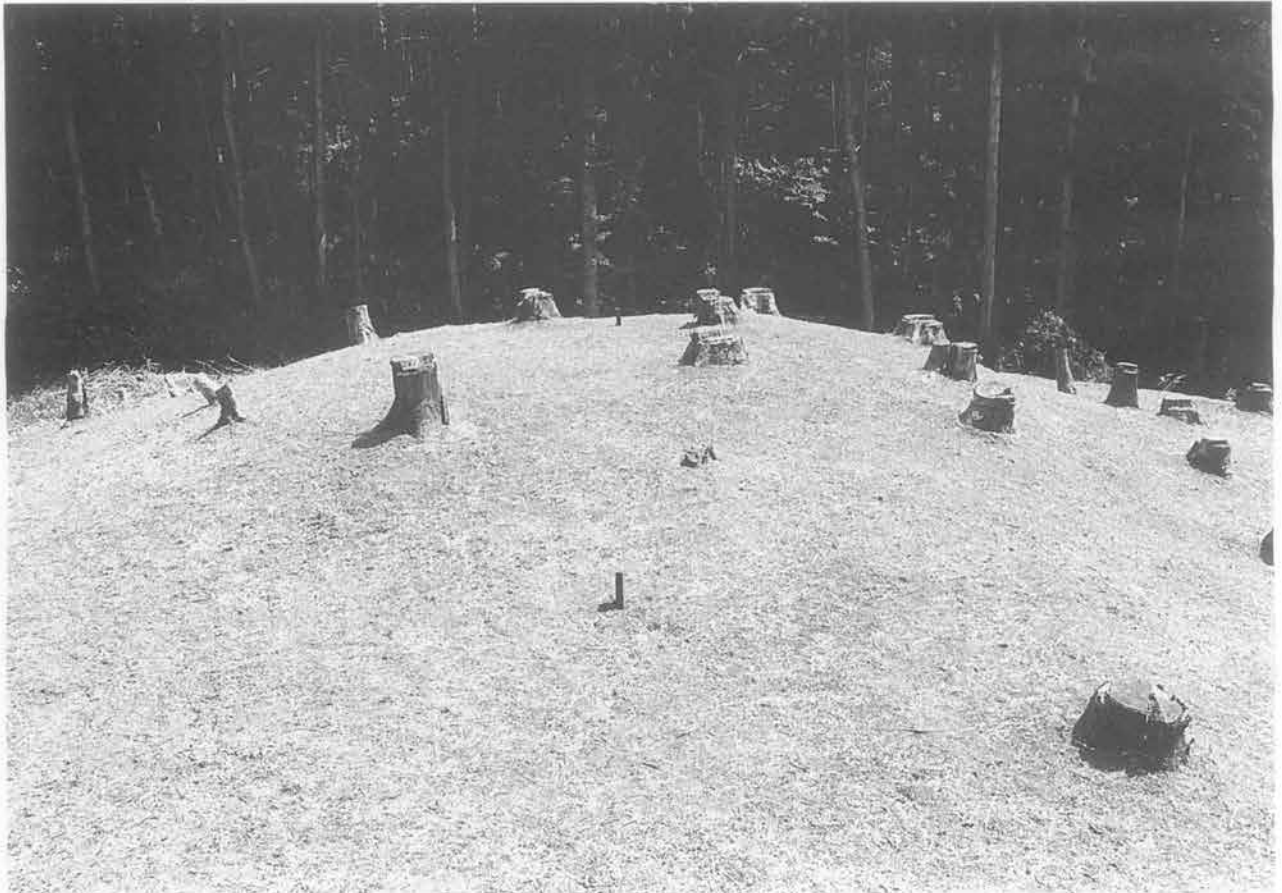


写真72 後方部全景



写真73 墳丘細部

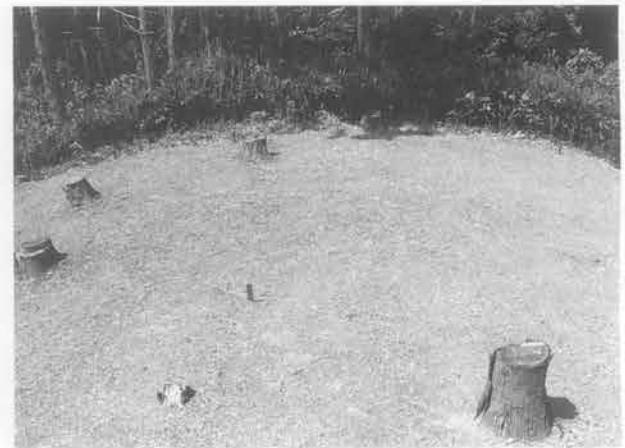


写真74 墳丘細部



写真75 前方部土層断面



写真76 前方部土層断面

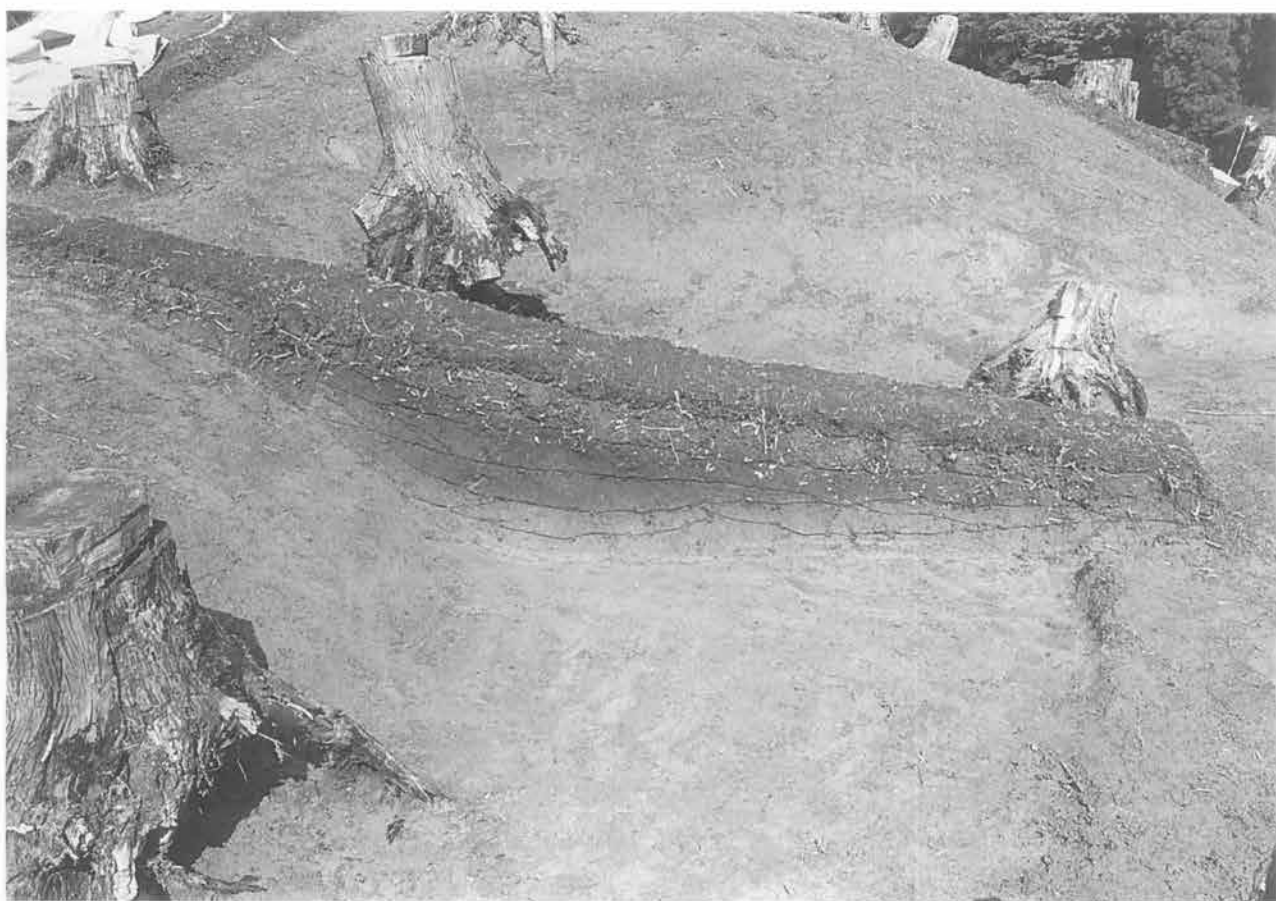
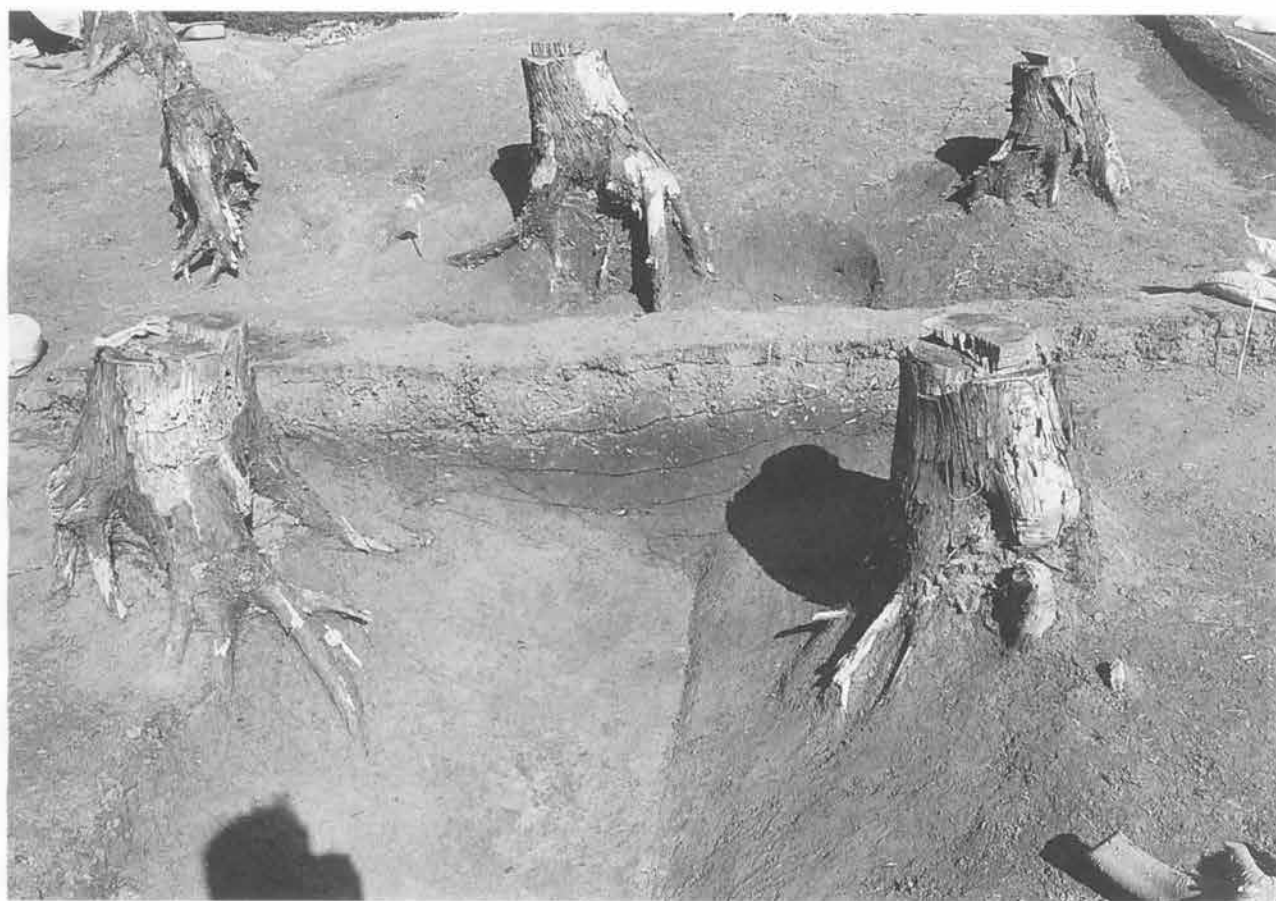


写真77 くびれ土層断面



写真78 後方部土層断面(南側)



写真79 後方部土層断面（北側）



写真80 後方部土層断面（東側）



写真81 後方部土層断面（東側）

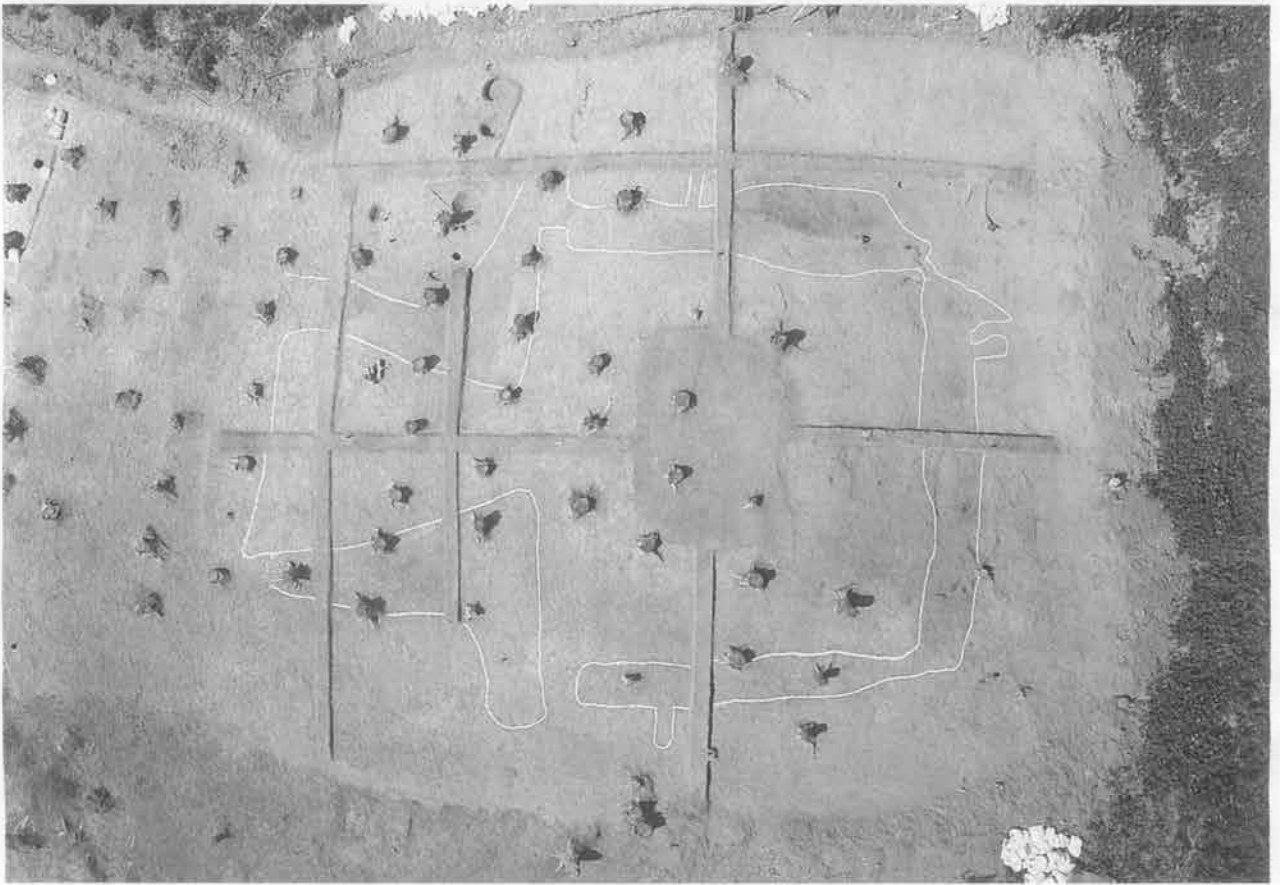
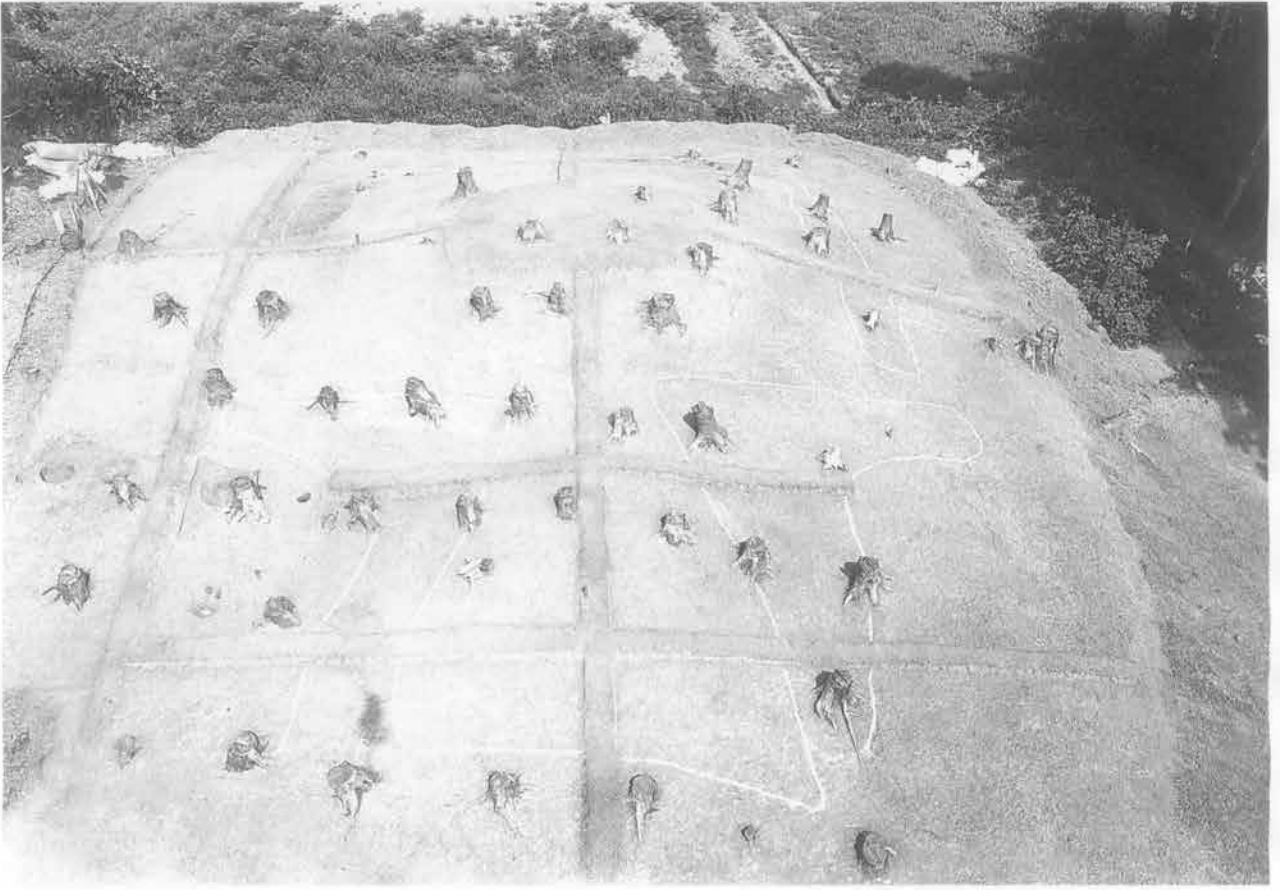


写真82 周溝検出状況

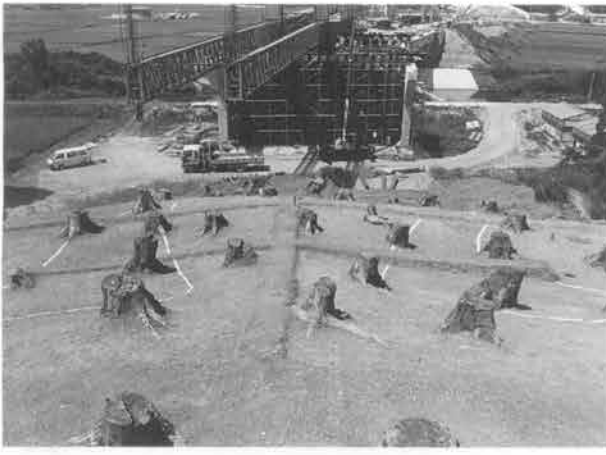


写真83 周溝検出状況（細部）

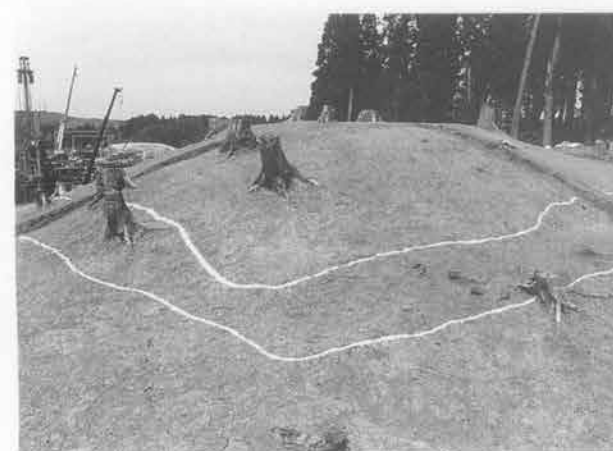
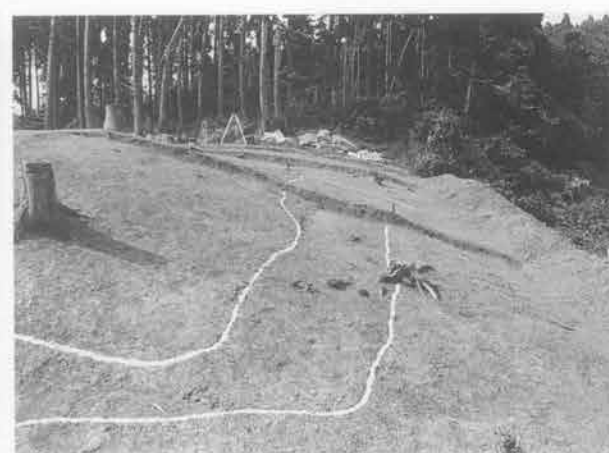
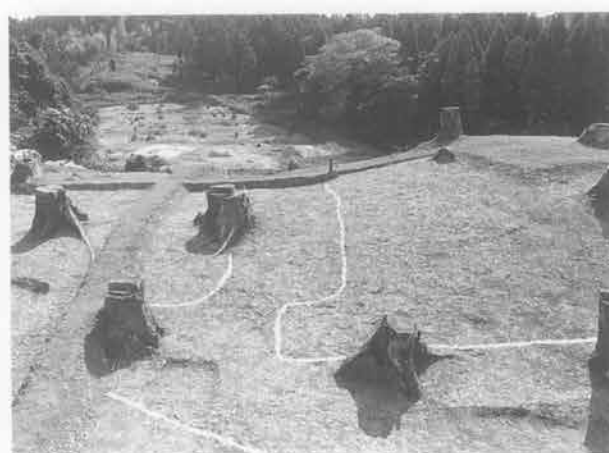
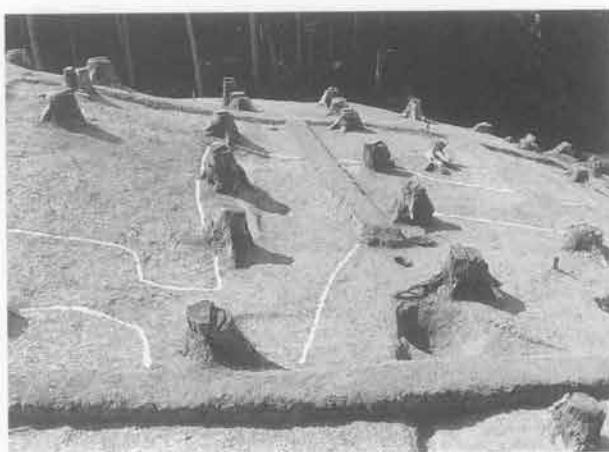


写真84 周溝検出状況(細部)



写真85 垣吉B22号墳全景



写真86 前方部全景



写真87 前方部全景(細部)



写真88 後方部全景



写真89 後方部周溝



写真90 後方部周溝

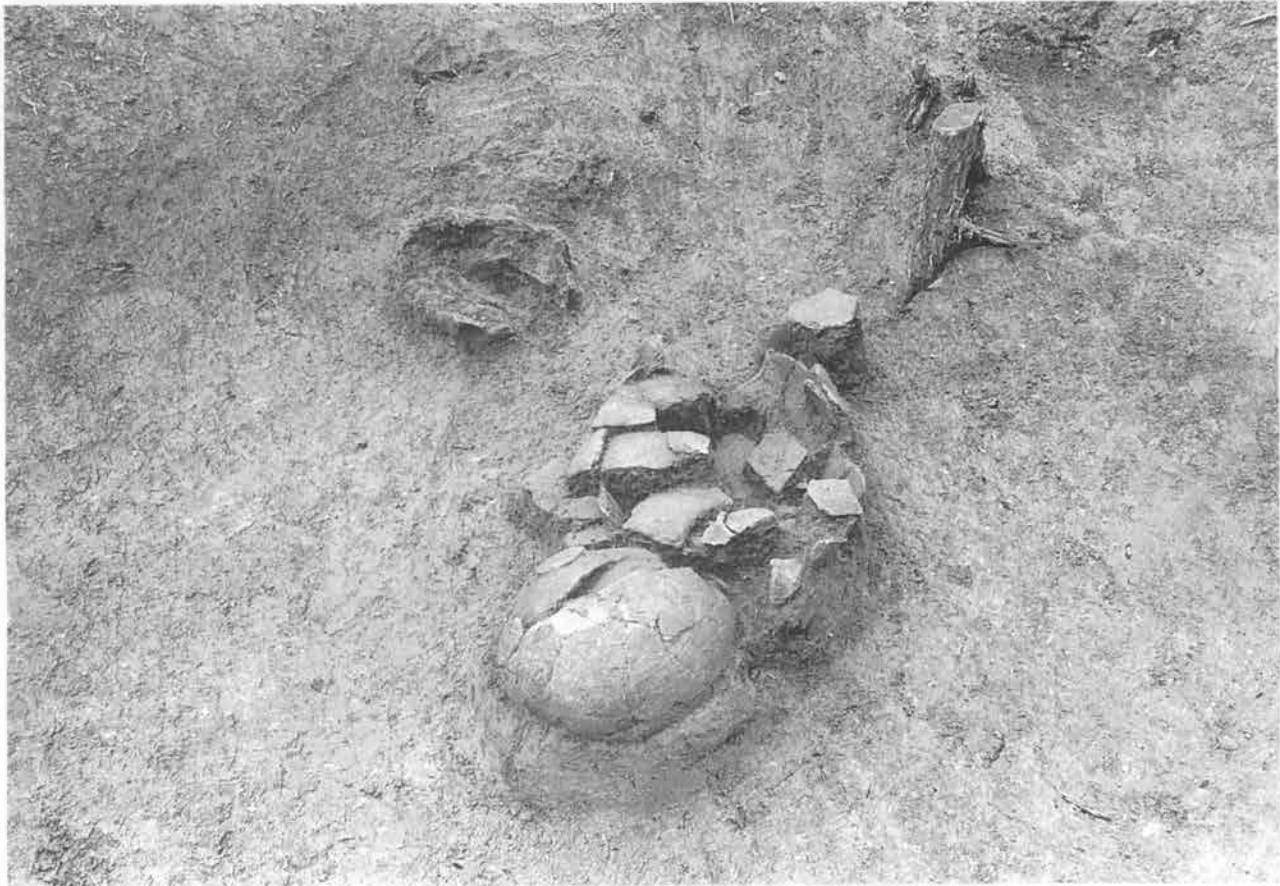


写真91 くびれ部土器出土状況



写真92 くびれ部土器出土状況（細部）



写真93 主体部検出状況

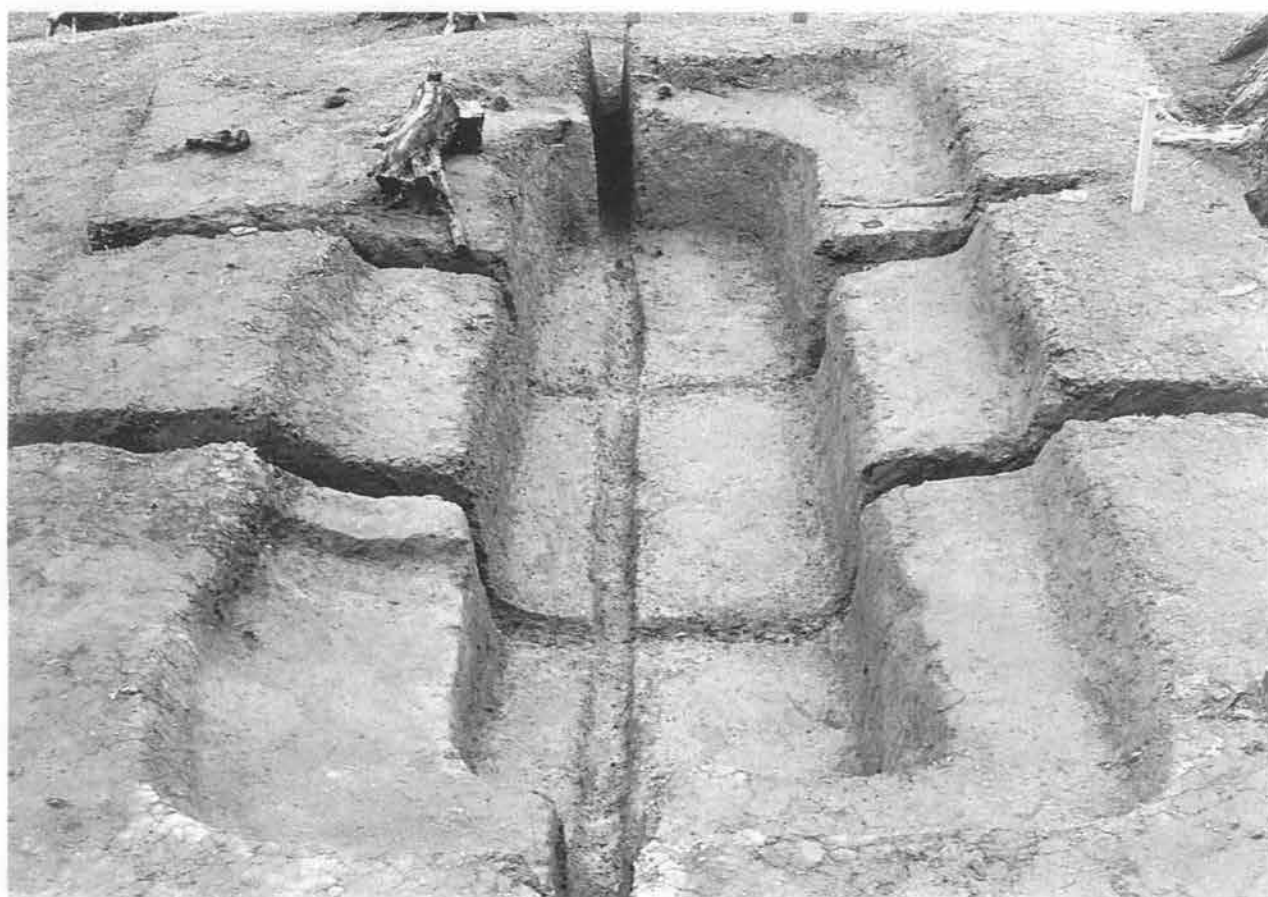


写真94 主体部完掘状況

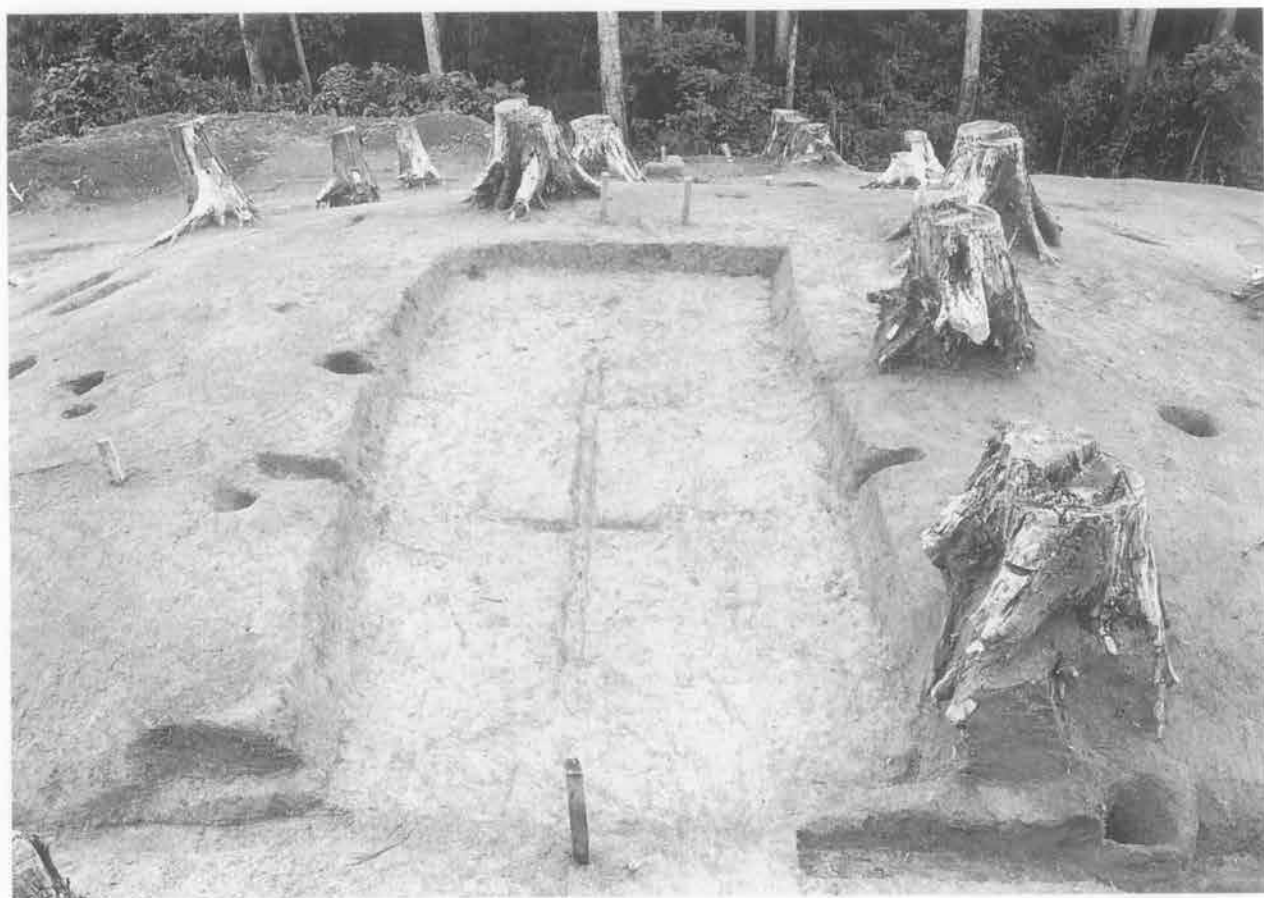


写真95 掘り方完掘状況

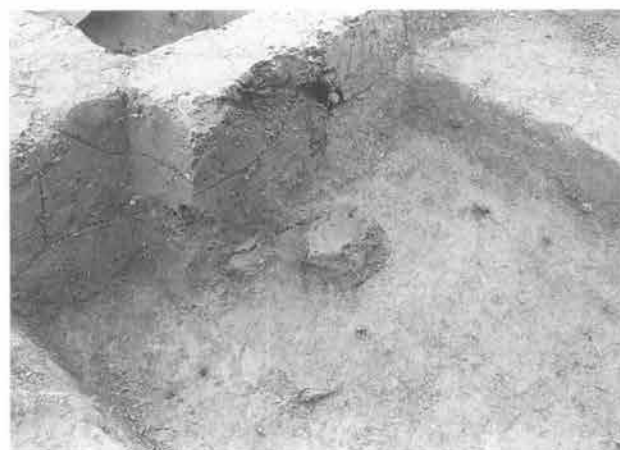
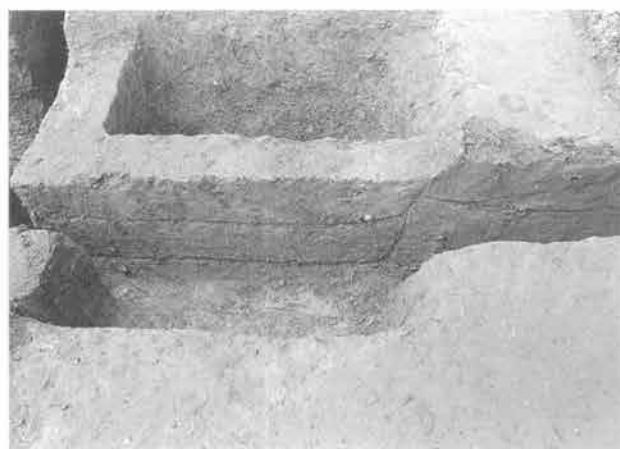


写真96 主体部土層断面（主軸方向）

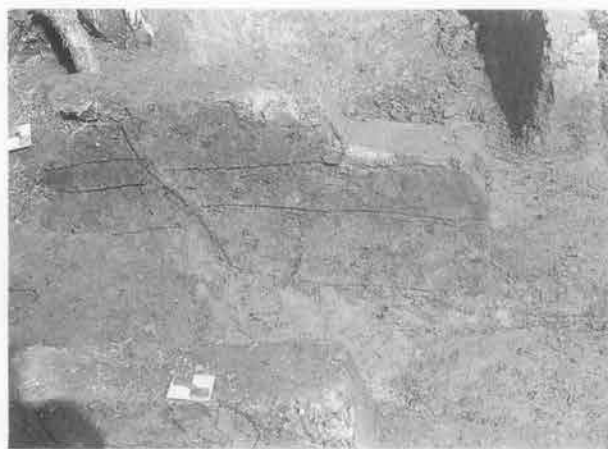
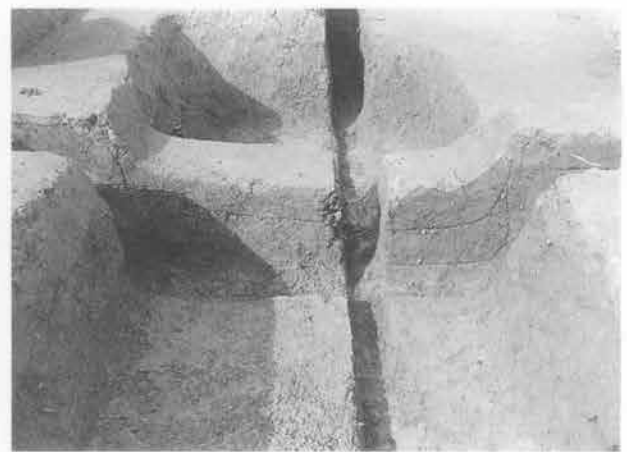


写真97 主体部土層断面（横軸方向）

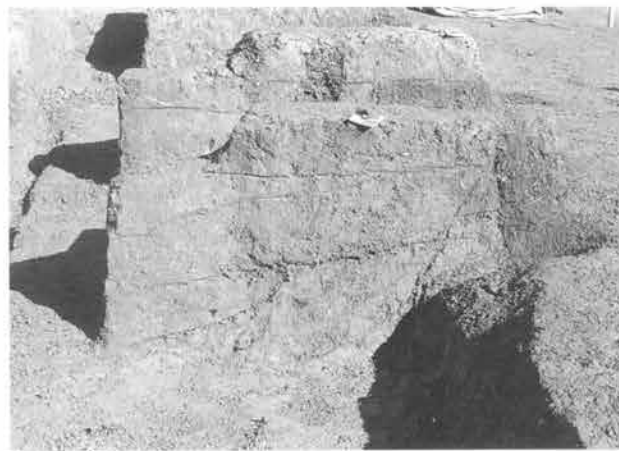


写真98 主体部土層断面（横軸方向）



写真99 墳丘盛土土層断面

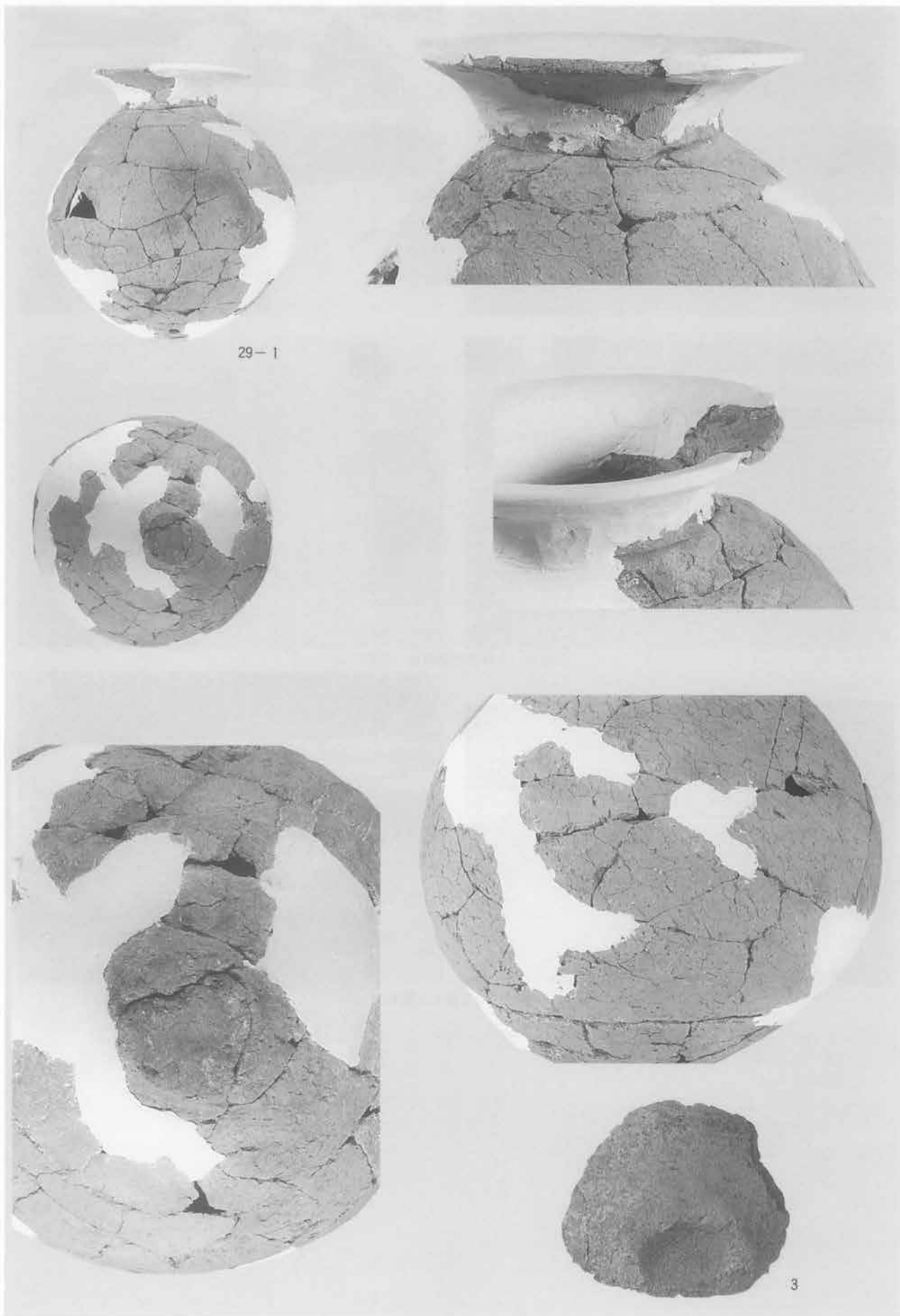


写真100 垣吉B22号墳出土遺物(1)

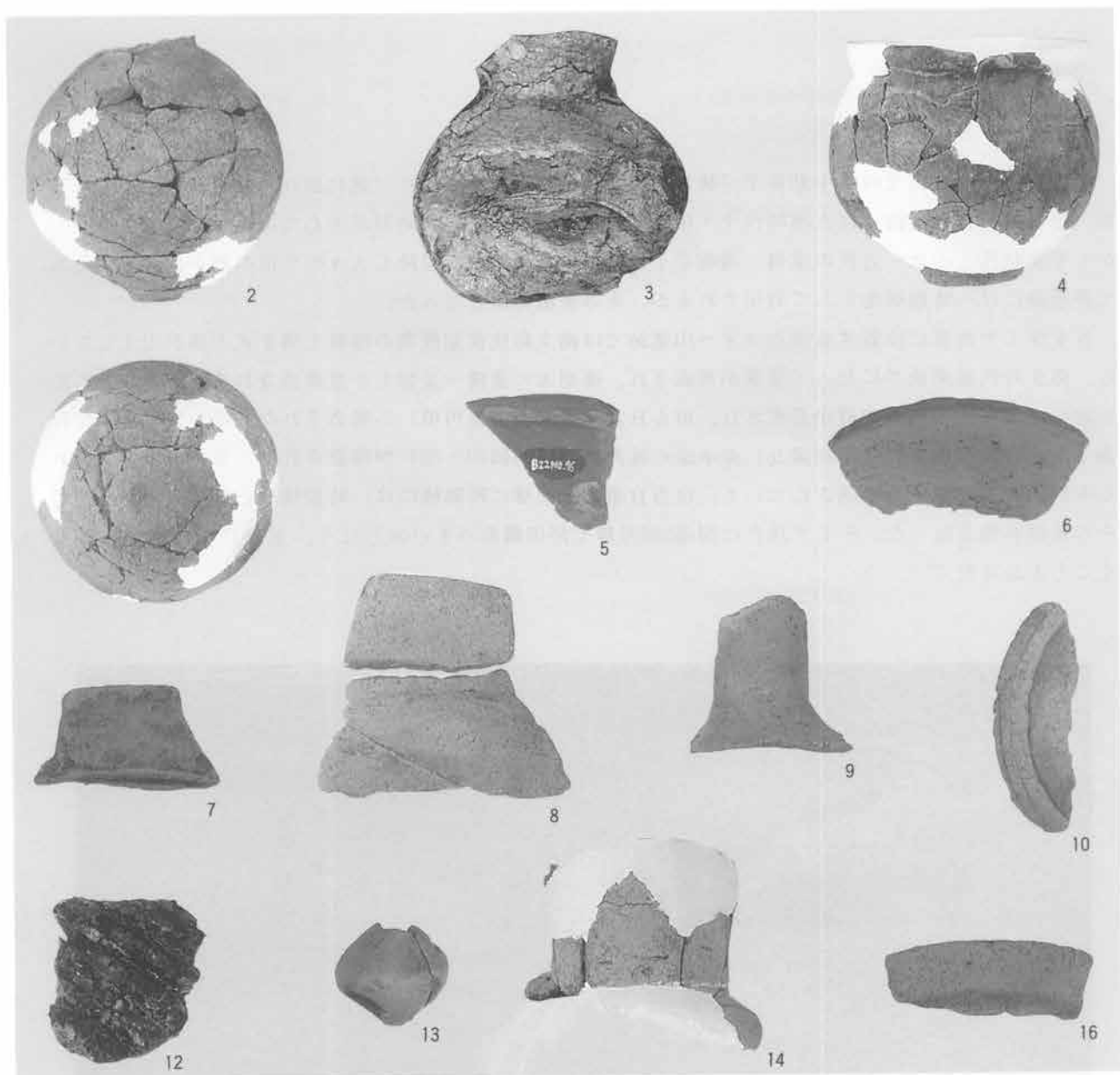


写真101 垣吉B22号墳出土遺物(2)

第5節 小結

垣吉B遺跡では縄文時代中期後半～後期前半の可能性がある土器片（第13図16）と石器が出土している。その後垣吉B遺跡では古墳時代中・後期の集落が営まれ、その時期が中心であったようである。しかし平安時代・中世・近世の遺構・遺物が少量確認されており、以降も人々の生活の跡が伺える。そして終戦後には一時期畑地として利用されるが、その後植林地となった。

谷を挟んで西側に位置する垣吉フクベ山遺跡では縄文時代前期後葉の福浦上層Ⅱ式土器が出土している。弥生時代後期後半になって集落が形成され、後期末の遺構・遺物も少量確認される。その後、この丘陵には垣吉古墳群B支群が形成され、垣吉B22号墳（前方後円墳）が築造された。その後は若干ではあるが、古代の須恵器（第29図5）や中世の珠洲焼（第23図29～32）が確認される。また近世と思われる木炭窯（第22図）も確認されている。垣吉B遺跡と同様に終戦後には一時期畑地として利用されるが、その後植林地となった。そして現在は国道249号線七尾田鶴浜バイパスとなり、未来に受け継がれていくこととなった。



写真102 バイパス開通後の風景

田鶴浜町垣吉遺跡群

発行日 1997（平成9）年3月31日
編集・発行者 石川県立埋蔵文化財センター
921 石川県金沢市米泉4丁目133番地
0762（43）7692
印刷所 ヨシダ印刷株式会社
921 石川県金沢市御影町19番1号